
中村晃
直江兼続
なおえかねつぐ
宿敵・家康も惚れた名軍師
PHP文庫

直江山城守兼続も秀吉の特命により、出羽国(山形県)米沢三十万石(一説には三十二万石)を賜った。このことは、陪臣にしては異例中の異例である。当時三十万石を超える大名は、兼続を含めて十二人しかいない。たしかに秀吉は兼続に惚れていた。小田原城攻めのとき、秀吉は兼続をこう評した。兼続に二十万の大軍を預けて高見の見物をしたいものよのう、と。

本書「あとがき」より

装幀——上田晃郷
装画——西のぼる

直江兼続

宿敵・家康も惚れた名軍師

中村 晃



PHP文庫

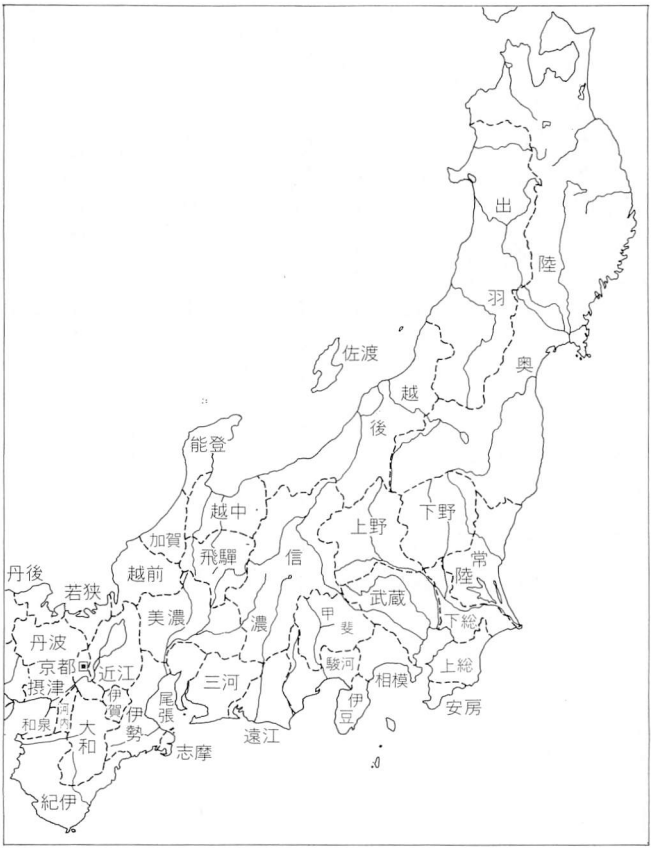
○本表紙図柄＝ロゼッタ・ストーン（大英博物館蔵）
○紋章＝上田晃郷

直江兼続（なおえかねつぐ）＊目次

序の章……7
越後無常……9
東奔西走……22
越水の会……36
直江山城守の誕生……49
洛陽城裏、花に背いて帰る……65
愛憎相剋……78
巨星落つ……96
動乱の目……110
急　変……132

女の意地……152
挑　発……169
直江状……186
三成挙兵……201
戦機うごく……221
臣の道……243
もう一つの関ケ原……265
関ケ原……283
不惜身命（ふしゃくしんみょう）……300
あとがき

編集協力――元気工房



▲16世紀における東日本

序の章

高野山金剛峯寺宝楼閣ゆぎ塔の壁に、直江山城守兼続の座像が描かれている。のち、谷文晁がこれを模写して「集古十種」に載せた。

この肖像は、垂纓の冠に、花の図柄をあしらった直衣姿である。右手には型通り檜扇を持ち、腰には大刀をたばさんでいる。心持ち前かがみになったその姿は、もの静かで、何かを思念しているように見えた。顔はまさしく竜顔である。その目は知的な色を秘めて切れ長く、豊かな頬には、りんとした威厳がこめられていた。今は昔、兼続がどう生き、数々の苦境をいかにして切り抜けてきたか、を知る人は少なくなった。その肖像だけからそれを推察する時、兼続が関ケ原の戦いの仕掛人であったとは、どうしてそれを想像することができようか。兼続は徳川家康を向こうに回して一歩も後に退くことがなかった。石田三成が挙兵できたのも、兼続あればこそである。

この壁画のほかに、今、兼続を偲ぶ縁として残されているものは、その兜である。戦場に赴く武将にとって、その兜の前立はまさに武将の信条を示すものであった。兼続は

その前立に「愛」の一字をもってした。その一文字は兼続自身によって楷書体で書かれた。その書体はのびやかで、見る人をして人間的なあたたかさを感じさせる。前立に文字を用いること自体が稀有なことであるのに、その上こともあろうに「愛」の文字をはめ込んだということは、二重の意味での驚きであった。

この「愛」の一字の意味するものは何か。兼続の敬愛する上杉謙信は、毘沙門天を信仰した。兼続もそれにならって、愛染明王を信仰したのか。謙信は毘沙門天に一生女性不犯を誓い、代わりに勝利をわれに与え賜えと願った。兼続もまた愛染明王にそれを誓い、勝利を祈ったか。いや、それは違う。兼続は信仰の人ではなかった。兼続の一生の生き様を見る時、このことをはっきりと断言できる。

兼続は民を愛した。戦いはしても、国の立つは民の立つをもってした。しかし戦乱の世にあって、それだけでは国の安泰が保たれないことも、兼続はよく意識していた。義の裏づけを必要としたのである。兼続の義とは、「絶えんとするを継ぎ、傾かんとするを扶く」――それである。そのためには、兼続は自分の生命をかけて戦った。上杉謙信の求めたものを、兼続もまた求めたのである。

越後無常

越後上田庄坂戸の城主長尾政景は、上杉謙信の一族であった。謙信の姉綾子を妻とし、その勇武をもって知られ、二人の間に景勝が生まれていた。その政景はかねがね謙信の下風につくのを嫌い、すきあらば謙信を弑して、長尾の宗家をわがものにしようとしていた。

それに気づいたのが、謙信の家臣宇佐美定行である。定行はこの事実を謙信に告げて、いかに対処すべきかを協議した。しかし謙信はこのことを信ずることができず、明確な返事を出さなかった。そこで定行は一人こう考えた。謙信と政景とが争うようなことになれば、越後の大乱にもなりかねない。それを留めるには秘かに政景を害するしかないと。その結果定行は、一つの妙計を思い立った。自分の身を捨ててこそ、ことは成就するものである。わが主謙信を安泰の座に置くためには、自分がその人柱になろう。これに優る方策はないと。

永禄七年（一五六四）七月、定行は政景をさそい、信越国境の野尻湖畔に遊んだ。湖

上から見る風光もよかろうということになって、二人は小舟を漕ぎ出した。ほぼ湖心に達した時、定行はかねて用意しておいた舟底のくさびを抜き、櫂を投げ捨て、浸水するままにまかせておいた。それを見て政景はいぶかった。駿河（定行）、これは何事だと。定行は見じろぎもせずに答えた。上意である。越前（政景）のお命頂戴いたすと。そんないわれはないと政景は怒って、定行におどりかかって来た。むしろそれを待っていた定行である。しっかりと政景を抱きかかえると、われとわが身から湖面めがけて体を投げかけていった。あとは、政景がいくらもがこうとも定行はその腕を政景から離さなかった。水中でもがくこと五分。息がつまった二人は湖心めがけて落ちていった。

二人の溺死を知らされて謙信は、定行の言葉の真実さを悟った。二人の菩提を厚く弔い、政景の子景勝を引き取り自分の養子とした。

もっともこれには、つぎの理由があった。謙信は深く毘沙門天に帰依し、一生不犯の誓いを立てた。つまり女子には一生触れぬと誓ったのである。したがって子はなかった。甥の景勝を養子とすることに何も不思議はない。この誓いを立て実行する代わりに、謙信は戦勝を願った。その軍旗に「毘」の一字を用い、この軍旗のもとで決したことは、絶対的な力を持つものと定めた。春日山城にも毘沙門堂を設け謙信はこれに籠る

ことが多かった。それほどの人であったので、謙信の用兵は迅速で鋭く、まさに軍神の名に価するものであった。甲斐の武田信玄との川中島の合戦、能登の七尾城攻略などは、特に有名である。

霜は軍営に満ちて秋気清し
数行の過雁月三更
越山併せ得たり能州の景
さもあらばあれ家郷遠征に念う

この「十三夜」の詩は七尾城において作られたと伝えられている。謙信は単なる武弁ではなかった。詩をよくし、文に通じた。その「家訓」にも言う。

心に私心がない時には、人を疑うこともない。
心に勇気がある時には、後悔することもない。
心に自分を誇る気持ちがない時には、よく人の善を知ることができる。

謙信は潔癖なほど大義に生き、それを貫き通した。謙信は言った。私欲のために自分

は一度も戦さを仕掛けたことはないと。

永禄四年（一五六一）、謙信は、関東管領上杉憲政からその職と上杉の姓を譲られ、以後長尾を廃し、上杉を名乗った。景勝は謙信を敬愛すること大きく、その一挙手、一動作にも意を払い、それを自己のものにしようと試みた。景勝にとって謙信は、まさに神にも等しい存在であったのである。景勝は、それと同時に、秘かにこの謙信の後継者たらんと自負していた。

その景勝の近習に、樋口与六がいた。後の直江山城守兼続である。景勝の母仙洞院（綾子）の推挙による。仙洞院は、まず兼続の容姿端麗なのを見て、女としての愛情を感じた。好き嫌いの感情の強いのは、女の常である。年齢の差はあってもこの点女性は同じで、仙洞院はこの美童が少なからず気に入った。近習として景勝の側に置き学習も共にさせてみると、なかなかの秀才である。師につけて武道を習わせても、その太刀筋が鋭かった。景勝と五歳年少であることも兼続に幸いした。下手に景勝から対抗意識を持たれなかったからである。こうして仙洞院は、ますます兼続を重用した。

兼続は、永禄三年（一五六〇）、樋口兼豊の長子として越後上田庄坂戸城下に生まれた。兼豊は政景のもとで軍功があり、政景没後は景勝に忠誠を誓い、次第に栄進して直

峯城主となり、伊予守と称した。慶長五年（一六〇〇）八月、上杉の出羽攻略の際、米沢城の留守役を勤めたのが、この兼豊である。

そうするうちに、景勝の身に大きな変化が起きた。永禄十一年（一五六八）、謙信はかねての宿敵であった、小田原城主北条氏康と和を結んだ。北条と上杉の兵力を総合して、中原を制せんとしたためといわれている。氏康は同盟の証としてその舎弟三郎を人質として謙信のもとに送り込んできた。もとより人質を取ることを好まぬ謙信は、その三郎を自分の養子の一人に加え、自分の旧名の景虎を名乗らせ、重ねて自分の妹を彼に娶せた。謙信の腹づもりとしては、ゆくゆく景勝に越後と越中の半国を与え、景虎には能登と佐渡の両国を与えて、並立をはかるにあった。しかしながら景虎を春日山城の二の丸に住まわせ、景勝を三の丸に置くとなると、後継問題は、にわかに深刻な様相を呈してきた。もしそれが謙信の存命中になされたものならば、あるいはその案もそのまま実行されたかも知れない。だが問題は、意外と根ぶかいものを蔵していたのである。

この謙信の処置を喜ばぬ者がいた。兼続であり、本庄繁長であり、長尾景路らである。謙信に対し絶対の忠誠を誓っていた彼らではあったが、これだけはどうしても是認できなかった。兼続の言い分はこうである。いかに謙信公とはいえ、このなされようは

景勝様をないがしろにするものである。景虎様は、言うなれば、北条のお人だ。それに今々上杉家に入られて日も浅い。それに聞く。景虎様の父、氏康公は、むさぼって厭くことのないお方だといわれている。景虎様に上杉家を任すようなことになれば、ひいては北条家の軍門に降るようになるかも知れない。そのようなことをわれわれが、どうしていさぎよしとできようか。それに対し景勝様は、謙信公のお血筋にあらせられる。それにその武勇は、謙信公に似て生きうつしと思わぬか。与六にとって、景勝様以外に、わが主と頼む人はござらぬと。さすがに謙信の耳に入るのをはばかり、内々のうちに計画は進められた。やがてその機会は来た。

天正五年（一五七七）冬、謙信は織田信長を討つため、出師の準備に余念がなかった。信長が室町幕府最後の将軍足利義昭を追放したのを怒り、上洛しようとしたからである。明けて六年三月九日、謙信は出陣を直前にして中風（脳卒中）を発し、春日山城で倒れた。それを知ると、兼続は上条義春と謀り、景勝を本丸に移し、謙信の枕元にはべらせた。その一方、鉄安則と栗林肥前守に命じ、本丸の城門を閉ざして景勝の許可がなければ、景虎の手の者は一兵たりとも本丸に入ることを禁じた。謙信はそれからついに意識がもどることがなかった。その死は三月十三日である。享年四十九。謙信の

ものといわれる辞世は、このことあるを予期していたものか。

四十九年一睡の夢
一期栄華一杯の酒
柳は緑　花は紅

景虎も謙信の病い篤しと知ると、本丸に見舞おうとした。だが、このことあるに備えた兵である。安則、肥前守の兵は、頑として景虎を本丸に入れなかった。ために両者の間に、小競り合いが起こった。ただ謙信が病中なのを遠慮して景虎は引き下がったが、両者の睨み合いは、これを境にして日ごとに激しさを加えていった。「御館の乱」の幕開けである。

謙信の亡骸は、景勝の命によって越後林泉寺に運ばれ、そこで荼毘に付された。この一方的な景勝のやり方を怒った景虎は、前の関東管領上杉憲政にこう訴えた。自分は謙信の家督を継ぐ者として約束された。しかるに上杉家の家老どもが邪魔をして困っている。このことを景勝に説得していただけまいか。憲政はそれを聞いて、景虎支持を打ち

出した。憲政がそう態度を表明したその背景には、このような判断があった。景勝には、強力な後ろ楯がない。その点、景虎は違う。一度小田原の北条が動けば、景勝などひとたまりもなかろうと。この判断は、一人憲政のみならず、上杉家中にもあった。彼らは北条の声望に期待と恐れを抱いた結果、景虎支持に回り、上杉家を二分して相争うことになったのである。

さっそく憲政から本丸明け渡しの勧告が景勝になされたが、景勝がそれに応ずるはずがなかった。憲政の声援に力を得た景虎は、力攻めにこれを占拠しようとして軍勢を差し向けた。このことあるを十分予期していた兼続は、大砲をもってこれに応じた。攻撃軍がそれにひるんで後退する間に、その筒先を二の丸に向け、続けざまに砲撃し、それが小半刻（三十分）にもおよんだ。二の丸の城壁が崩れ、内部に火の手があがると、兼続は逆襲に転じ、これを攻撃させた。これには景虎もこらえ切れず、子息道万丸、内室とともに憲政の御館城へ落ちのびていった。

景虎は御館城で、憲政と策をねった。戦いに勝つための要諦（大切なこと）は、その兵力にある。互いに他の条件が同じなら、敵に倍する兵力のある者が必ず勝つ。景虎は父の北条氏康に早飛脚を立て援軍を求めると同時に、甲斐の武田勝頼が氏政の妹婿であ

る縁を頼ってこれにも出陣を要請した。そうするうちにも、景虎擁立の上杉家中の諸将が続々と御館城に集まり、その勢いを駈って春日山城本丸を眼下に見下ろす愛宕山に陣取って気勢をあげた。その数一万余である。

景勝は地の利を得た春日山城にあるとはいえ、日を数えるにしたがって、自軍の非勢を思い知らされた。北条氏政は遠山丹後守、富長三郎左エ門、中条出羽守、太田大膳、北条治部大輔らに命じて一万八千余の大軍を北上させた。武田勝頼は一万の兵を率いて越後老津に着陣して戦機をうかがった。これに対し兼続は、上条義春家老赤田の城主斎藤下野守と謀り、勝頼の鋭鋒をかわす策に出た。芋川縫之介、島津月下斎を使者として老津に遣わし、こう言わしめた。景勝様に勝頼公の妹御を賜い、武田、上杉一家となし賜えと。その引出物として景勝は東上州半国を献上し、さらに勝頼には黄金一万両、その幕下の長坂釣閑、跡部勝資にそれぞれ二千両を差し出しその口添えを願った。勝頼にしてもそのことは「渡りに舟」で、景勝にも幸運をもたらした。勝頼も長篠の戦いでの大敗後、織田信長の来襲に備えて背後の患いを断つことは、戦略上決して悪い取引ではなかったからである。勝頼はそのことを即決すると使者に対面し、互いに誓書を取り交わして甲斐へ帰陣した。

こうして危機を乗り切ることができた景勝は、自分から攻勢に転じた。

兼続は今は景虎勢に占拠されているかつての景勝の居城坂戸の城を奪取しようとしているという情報を流した。景虎にとっても坂戸は要衝である。夜襲を想定して、夜ごとに宿将を代えてその防備にあたらせた。兼続の攻撃のねらいは、御館城攻略にあるが、兵力を二分することにより、本城の兵力をそぐにあった。兼続は坂戸と御館との間にある蓮池のほとりに兵をひそめ、坂戸城の宿番を終えて御館城に帰る将士を襲わせた。そこを通りかかった北条丹後守こそ不運だった。橋の下からふいにおどり出た荻野主馬、津波木与兵衛の槍を馬上もろにそのわき腹にうけ、小仆めとにらみつけてその場を走り去ったが、ほどなくして丹後守は落馬し絶命した。この変を知って、御館城から救援隊がくり出されると、そこを待ちかまえていた兼続の伏勢は、一挙に鉄砲を撃ちかけ、これを壊滅させた。

この鉄砲隊の威力に着目した先駆者は、何と言っても織田信長である。長篠の戦いの大勝以来、兼続はこれに注目し、その戦術の研究におさおさ怠りがなかった。その点、兼続は、やはり謙信とも一線を画す武将であった。

もともと武田信玄以来、勝頼の戦法は、密集の突撃部隊を用いて敵陣に突進するにあ

った。それで敵陣が乱れるとみるや、騎馬軍団が突撃することによって常に勝利を収めてきた。若い勝頼が絶対にこの戦法に信を置いたのは、無理からぬものがある。しかしながら、信長はその対策を十分に考え、その上を行った。まず決戦場をここと定めると二十余町（約二、三キロメートル）の間にわたり、二重にも三重にも空堀（からぼり）を掘らせ、土手を築いた。その後方に木柵をめぐらし、バリケードとした。この陣型は攻撃ではなく防備である。そこに五千の鉄砲隊を三段に構えた。そこに信長の新工夫があった。当時の鉄砲は連射がきかない、その欠点をおぎなったものである。武田勢はこの新戦術の前に、自分の実力を完全に封じられて敗北したのである。兼続は、信長の非凡さに感心した。かんばしからぬ評判とは違い、信長はなんとすぐれた武将であろう。謙信公亡き今、信長の右に出る武将はまず少なかろうと。

それから景虎との戦いは、一進一退を繰り返した。だがそのうちにも、景勝に味方するものが次第にその数を増してきた。景勝優位が伝わると、そのことがじかに両陣営の士気にも影響を及ぼしはじめた。景虎の陣営の足並みの乱れを見てとった景勝は、すかさず軍令して言った。もとはと言えば、上杉家中の者。降服する者は、その責は問わない。このことは景勝の有利さを一層確定的なものにしていった。

景虎も北条家を頼み、最後まで抗戦したら、まだしも勝機はあった。ただ景虎にとって惜しむらくは、あまりに順調に育ってきたために、逆運を耐え切る力にいささか欠けていた。景虎は越後林泉寺と浄安寺の住持を通して景勝に和議を申し入れてきた。だが、これだけの大事を引き起こされた今、景勝には和議に応ずる気はなかった。降服ならばそれを受けようと景勝は答えた。これには両住持も困った。なにとぞ和議をと、再度にわたって願い出たが、景勝はそれを聞き入れなかった。やむなく二人はそのままに御館城に持ち帰って復命した。それを聞くと、景虎はまだ景勝の気持ちがわからず、降服しようと言った。

天正七年（一五七九）三月下旬、上杉憲政は立山（たてやま）黒衣の姿で景虎内室とその子道万丸、妹姫を引き連れ、城を出て春日山城に向かった。景勝に対し、景虎の命ごいをするためである。しかしそれすら景勝は拒んだ。途中、霧沢左京進（きりさわさきょうのしん）に命じて、憲政、道万丸と妹姫とを四谷で討ちとらせた。内室は景勝の叔母であったので、生命の全きを得た。彼女はわが子を殺され、景勝を呪った。子供たちには罪なきものを。因果は景勝にもおよぶであろうと。左京進にとって、景勝の所業がこれほど怨めしく感じられたことはなかっ

た。これが士道というものであろうかと。のち二人は仏門に入っている。

これを機に景勝は、御館城へ総攻撃をかけた。寄せ手は兼続である。すでに戦意を失っていた景虎は城を支え切れず、館を捨て、飯盛摂津守と片貝民部の籠る鮫尾城へ落ちていった。そこをすかさず上条義春が攻めたてると、民部はにわかに逆心して景虎に襲いかかった。今はこれまでと覚悟した景虎は、切腹して自害し果てた。介錯は上条家来蓑与十郎が務めた。

こうして兼続は景勝第一の功臣となった。以後景勝とともに、天下の檜舞台へとその巨歩を進めることになる。

東奔西走

武田勝頼の妹の於菊姫が景勝のもとに嫁いできたのは、天正七年（一五七九）十月二十日のことである。その日春日山城は華燭の宴にわいた。景勝二十五歳の時である。姫は於菊殿と呼ばれた。

景勝は小男で、その点、兼続の長身と好対照であった。面長で目が鋭かった。いつも左手を脇差にかけ、身じろぎ一つしなかった。景勝は無口で、およそ笑顔を見せぬことで、伝説中の人となった。ただある時、牛飼いの猿が景勝の頭巾を取り木の上へ逃れた。近習たちはてっきりその猿が景勝の手打ちにあうものと思っていた。ところがその猿がその頭巾を頭にかぶり、顔を上下に動かして景勝に挨拶を送った。それを見て景勝は莞爾と笑い、その猿を許してやったという。そんな景勝ではあったが、於菊殿との仲は睦まじかった。翌年長子の千徳をもうけ、千徳は成人して定勝と名乗った。

この同じ年の九月、この春日山城に時ならぬ不祥事が起きた。

それは、直江大和守信綱と山崎秀仙が槿の間で対談中、毛利秀広が突然入ってくる

なり奸賊と叫んで秀仙を斬った。これには信綱も驚き脇差を抜いて秀広に打ちかかり顔に傷を負わせた。だが、すぐ秀広からも反撃されて左肩から胸にかけて斬りさげられてしまった。これで秀仙も信綱も間もなく絶命した。そこへ駈けつけた岩井信能と登坂広重によって、秀広もまた斬殺された。

上杉家の慣習として、家臣の刃傷による喧嘩は両成敗とされていた。だから彼らは、よほどのことがなければ、刀を抜いて争うということはまず少なかった。その毛利秀広にしても、かねがね秀仙を快く思わなかった結果の犯行といわれている。御館の乱に戦功があったと思っていたのに秀広に何も恩賞の沙汰がない。不審に思い調べてみると、秀仙がどうも邪魔をして景勝に取り次がないと思われる節が見えた。日を重ねているうちに、秀広の心の中でその疑問が動かしがたい事実に育っていった。不満が秀仙憎しに変わり、自分を抑え切れずついにこの犯行となった。

思わぬ巻き添えをくった信綱と直江家では災難だった。嗣子のいない直江家はこのままでは断絶する。累代の名門が今絶えんとするのを惜しんで景勝は、兼続を残されたお船の方に配して、直江の名跡を襲がせることにした。時に兼続二十二歳、お船の方二十五歳であった。ただここにいたるまで二人はまんざら無縁ではなかった。お船の方の

父景綱は兼続の母の兄であり、兼続は従姉と結婚して母の生家を相続したことになる。

直江家は景綱の時、与板城主として大和守を名乗った。謙信に重く用いられ、その手腕を幅広い分野で発揮した。謙信に従って上洛し、後奈良天皇に拝謁も許されている。飯野城主飯沼頼清を上意討ちしたことで、景綱の智勇は家中に知れ渡った。この上意討ちというのは、命ぜられた者にとっていやなことである。その相手と親交があればあるほど冷静にそれを遂行することは困難であった。それが首尾よく成功できて当然である。もし相手を討ちもらそうでもしようものなら、自分の勇武を疑われかねなかった。しかも今度の相手は小なりとは言え城主である。それを力攻めにした時、どのような反撃に出られるか予想もつかなかった。景綱の方にも相当な犠牲が出ることは必定である。景綱はその愚を避けたかった。

景綱はわざと少数の供侍を連れ飯野城を訪れた。もちろん平服で甲冑はつけていない。頼清はそれを見てとり、半ば心を解いて景綱らを城内に招じ入れた。頼清にすれば軍勢をもって攻撃されるものとばかり考えていたからである。奥の書院に通り頼清と対座すると、景綱は上意書を朗々と読みあげた。頼清に対する疑いは晴れたと。その実はその文面の逆である。頼清は半ば信じかねながらも頭をさげた。作法に従って頼清に向

かって書面を見せ、近うと声をかけた。上意書を受け取れというのである。頼清もそれと察して頭を低くして景綱のもとににじり寄った。頼清の両手が上意書にかかりそれを受け取ろうとした瞬間、その機をのがさず景綱は頼清の首筋めがけて抜き打ちに斬りつけた。頼清の首は血しぶきとともにそこに落ちた。すかさず上意書を拾いあげると、それをかざし景綱は大音声に叫んだ。上意なるぞ。直江大和守、頼清を討ちとったりと。その意にのまれて城兵は誰一人として景綱に抵抗する者がなかった。これを兼続の功にする者があるが、それは誤りである。

お船の方と二人だけになった夜、兼続は彼女にこう告げた。直江家の存続が許され、おことと夫婦となれたことは、兼続にとって大変喜ばしいことである。末長く添いとげたい。なれど景勝様に大事があれば、兼続、いつでもこの生命を投げ出す覚悟である。おことも武士の妻。聞きわけてくれよと。

それから二人の蜜月は、春日山城内の直江屋敷で始まった。直江の居城は、信濃川に沿うた一小邑、与板にあったが、兼続が上杉の政務を司っている関係上、春日山城を離れるわけにはいかなかったからである。この生活は、景勝が上洛し、京都伏見屋敷が与えられるまで続いた。その間、約五年である。それ以後、お船の方は約三十年を京で

過ごすことになる。

兼続は、国の仕置き、公事沙汰、訴訟まで、よくこれを一人でこなした。兼続のやり方はこうである。人払いをして、太刀を側に置き、相手が家中の侍である場合には座上におき、相手が百姓、町人である時には白洲で対決させ、もの静かに聞き取りもし尋ねもした。そしてその裁きはおおむね即決して誤りがなかった。

しかしながらこの時期は、景勝にとっても兼続にとっても容易ならぬ時期であった。武田勝頼は、織田信長、徳川家康連合軍の攻撃にあってあえなく天目山麓で自刃した。三月十一日のことである。勝頼が愚将だったわけではない。織田信長と比べた時、近代的戦術を身につけていなかっただけである。長篠の戦いにおいて、山県昌景、内藤昌豊、馬場信房ら多くの重臣、部将を戦死させ、北条氏と結び、要害の地に新府城を築いてあくまでも信長に対抗しようとしたが、劣勢をはねかえせなかった。家臣の離反も相つぎ、重臣穴山梅雪も勝頼を見限っている。戦いに敗れ、新府城に火をかけてようやく天目山麓にたどりついた勝頼は、死に臨んで若い北条氏の夫人に小田原へ帰るようにと勧めた。しかし彼女はこれを断わり、こう辞世を残し、勝頼に殉じた。

黒髪の乱れたる世ぞ果てしなき思ひに消ゆる露の玉の緒

勝頼を失ったことで、景勝は信濃からの、信長の重圧をじかに受けるようになった。そのため景勝はこの地に多くの軍勢を割かなければならなかった。一方信長は、その時すでに、柴田勝家、前田利家、佐々成政らに北陸平定を命じ、加賀、能登をその手中に収め、越後の諸将にも調略の手をのばしながら、越中に軍を進めつつあった。

その年の四月、越中魚津の城主寺島六蔵から景勝のもとに急使が到着した。織田勢が大軍をもって魚津城を包囲した。援軍を送れというのである。魚津城をそのまま放置すれば、落城は必至だった。折も折、揚北の豪族新発田重家が会津の芦名と通じ、公然と景勝に反抗を開始した。この反乱は、景勝にとって痛かった。いわばこれは、自分の体内に発した膿である。外敵を迎えこれにあたろうとした時にこのざまでは話にならなかった。それだけ景勝の重家に対する憎しみは強く、逆に言えば重家の反乱は時宜を得ていたものであったと言える。

景勝と兼続との協議が続いた。兼続は景勝にこう進言した。背腹を敵にして戦うは愚である。織田とは和議しかありますまい。織田には勢いがある。殿、ご自重なされます

ようにと。景勝は額に筋を立て、唇を噛んだ。例によって言葉は発しない。不本意なのである。兼続にはその口惜しさがよくわかった。ややしばらくして、景勝はうめいた。よかろうと。

そうと決まると、景勝は寺島六蔵あての書を書いた。ことがことであるので、景勝の自筆であることを要した。今、自分は、三方から敵の攻撃を受け、魚津に援軍を差し向ける力がない。すまなく思う。この上は織田軍と和睦し、魚津の城を明け渡して帰国せよ。このことは戦略的撤退でなんの恥にもならぬ。よく戦いよく退くことは、作戦の妙であると。景勝がこれだけ言葉をつくしたのは、あることを憂慮してのことであった。かえってこのことにより、寺島六蔵らを死に追い込むことになってはならないと考えたからである。だが、ことは逆の方に動いた。

織田軍の重囲の中、岩井源蔵、庄野瀬八左エ門がこの書を持って魚津城に着いた時には、城内は兵糧、矢玉も底をついていた。寺島はそれを読むと、景勝の命令をあますところなく伝えた。それを聞くもの、大将、物頭――亀田小十郎、若林九郎左エ門、治賀門介、川田豊前守、安部左門、中条越前守、竹俣三河守、山本寺勝蔵、吉江喜四郎、石田采女ら十二名である。

それが終わると、竹俣三河守がやおら立ち上がって言った。兵糧、矢玉の尽きたのは、われらが悲運である。いたしかたがない。なれど、敵に降を乞い、城を明け渡したとあっては、われらが末代までの恥辱である。腹かきさばいていさぎよく自害しよう。だが、自害するにしても自害の仕方がある。古(いにしえ)の名将たちは、自害の時、城に火をかけたが、わしはそれをとらぬ。焼けては誰の首ともわからぬ。それぞれの名字を木札に書き、自分の身体にそれをつけて死のう。それで死に花が咲くというものだ。このことはふつうでは、考えおよばぬことであった。それが一人の口から言い出されると、ただちにそれに一決した。上杉士魂(しこん)としか言いようがない。その夜は、文字通り末期(まつご)の酒盛にあけた。それが終わると、諸将は、用意のものを身につけ、六月二日一斉に切腹して果てたのである。

翌朝、織田軍は、無抵抗の城に入ってこの惨状を見た。士卒もそれにならい、城内は死骸の山であった。そうするうちに、景勝の書状が発見された。それに目を通して織田の諸将は一切を悟ることができた。景勝はこう命令してはいなかった。しかし結果はこうなった。織田軍の将士は、涙を流し彼らを手厚く葬った。

このことは、景勝にとっても兼続にとっても、その一生涯を通じてぬぐい去ることの

できぬ悔恨となった。景勝にとっては忠誠の士を、兼続にとっては義を惜しむ士を、無駄に死なせたという意識である。自分たちに兵力さえあれば、彼らをどうにかできたものを、と二人は互いに自分を責めて泣いた。それに追いうちをかけるように、戦局を一変させる情報が二人に寄せられた。覇王信長の死である。もしそれが事実とすれば、上杉の危機は脱出できる。とっさに二人はそう直観した。しかしそれは本当であろうか。あの信長がこんなにもろく死ぬとは、夢考えもつかぬことであった。それが夢ではなかった。続いて情報が寄せられるうちに、そのことがまぎれもない事実であることがわかりかけてきた。織田軍の陣営に動揺が見え、攻撃が止まった。北陸においてもそうであるし、信濃においてもそうである。上杉の忍びの者の報告をこう受けると、もう二人は疑いを持たなかった。信長は六月二日、京都本能寺においてたしかに明智光秀によって殺されたと。六月二日といえば、くしくも魚津城の落城と一致していた。二人はそのことに運命の皮肉さを感ぜずにはおれなかった。あと一週間、いやあと五日さえ魚津の城を持ちこたえてくれさえしたら、彼らを死なせずとも済んだものを——。

織田信長は、まがりなりにも足利義昭を擁立し、一度は天下の実権を握った男である。身は右大臣の位にあり、自力で強敵を一人一人倒していったが、その時はまだ天下

人たり得なかった。覇業の途上において、その階段をころげ落ちたのである。

信長の死によって、にわかに脚光をあびた男がいた。羽柴筑前守秀吉、のちの豊臣秀吉である。秀吉の智略は、つとにその声望を高めていた。秀吉は信長の死を知ると、中国の毛利輝元と和を結び、反転して京都へ向かった。明智光秀との決戦のためである。京都山崎の戦いで勝ち、秀吉は事実上の、信長の後継者となった。悲運だったのは光秀である。敗戦後、いったんは勝竜寺城に逃れ、居城の坂本へ入ろうとしたが、途中小栗栖で土民長兵衛の竹槍にかかって果てた。信長を討ってからわずか十一日後であった。

信長の死から秀吉の勝利が伝えられる一か月というものは、人心は動揺し、各地の豪族にとって、またとない草刈り時、あるいは失地回復の機会となった。景勝も謙信以来の抗争の地、川中島に出陣し、兼続を先鋒としてその四郡を手中に収めた。

七月、小田原の北条氏直もまた万余の大軍を率い信州に攻め入り、これを制圧せんとした。それに対するに兼続は、五千の兵をもってこれを迎えうち、川中島の両宮渡でこれと対峙した。十六日明け方、兼続は氏直軍に奇襲をかけた。氏直軍はうかつにも兼続軍の近づくのを知らず、眠りの中にいた。わあっと鬨をあげ、氏直軍が混乱し右往左

往するなかに銃撃を加え、そのあとを兼続の騎馬隊が突入してそれを蹂躙した。そのため氏直軍は、軍勢を後退させ、川中島から犀川、善光寺までその陣形をひろげて包囲の態勢をとった。

八月、景勝の主力四千が信州飯山に着陣した。その兵力の少ないのを見て、海津城の高坂源五郎は、氏直に内応し、不意をついて景勝を討ちとろうとした。しかし景勝の命運は、いまだ尽きていなかった。上杉忍びの者がこれを探知し、景勝に急報してきた。景勝はそしらぬ顔で海津城に入り、源五郎を生け捕りにした。これを見せしめとして景勝は、源五郎を磔にし、その一門十一人の首を切った。川田軍兵衛、大関弥七に命じ、これらの首を氏直に送り届けて威嚇した。景勝はめくらではないと。

この対峙は、氏直軍から打開の緒を見出せぬままに、長期戦の様相を呈してきた。じれて来たのは、氏直である。徳川家康から自分の本城をつかれることを憂慮し始めたからである。氏直は壮途半ばで国に兵を退かざるを得なかった。

天正十一年（一五八三）四月二十一日、豊臣秀吉は柴田勝家を賤ケ岳の戦いに破り、これを急進して北庄で自刃せしめた。

柴田勝家は、織田信長の宿老である。秀吉を小者の時から知っていたので、佐々成政

とともに成り上がり者として秀吉を軽蔑し、秀吉と同列に見なされることを極度に嫌い、癇を高ぶらせた。感情もここまでこじれてくると、もう行きつくところに行くしかなかった。自刃に際し勝家は、妻のお市の方が信長の妹であったので、秀吉に下ることをすすめた。しかし彼女はそれを退け、浅井長政との間になした三人の姫のみを城から脱出させ、勝家と行動を共にした。長女がお茶々、のちの淀君であり、つぎのおはつは京極高次の妻、最後が小督で徳川秀忠に嫁した。

その秀吉が富山城の佐々成政を攻撃するに先立って、景勝に誼を求めて来た。

秀吉は戦いに際して、自軍の兵の損傷を極度に嫌った。あえて兵力を用いなくとも相手が自分に従ってくれれば、それでよしとした。そのためには少々自分の意にそわなくとも、じっとそれに耐えることを知っていた。秀吉は木村秀俊を使者として景勝に国光の大刀一振り、瓦毛馬一頭、綸子五十巻、白銀二百枚を贈り、景勝の意向を打診した。成政を東西から挟撃しようと。景勝はこれを受けて快諾した。景勝も時流を敏感につかんでいたからである。おそらく、天下人はこの秀吉であろう。景勝は、光秀を倒し、勝家を亡ぼした未知の男にそんな感じを抱いていた。秀俊はこのことを喜び、秀吉に報告した。

その年は佐々勢と前田利家勢とが攻防を繰り返して、決定的な激突はなかった。秀吉も小牧・長久手で織田信雄、徳川家康と戦い、北陸に回るゆとりがなかった。景勝もこの時期を新発田重家攻撃に向けたが、新発田勢の抵抗も強く、容易にこれを攻略できずにいた。抗戦六年、天正十五年（一五八七）五月、落城するが、よく持ちこたえたものである。これに手間どるあいだに、信州福島の城主須田左エ門尉に逆心の噂が立った。それを問いただすため景勝は左エ門尉を春日山城に召し寄せようとした。だが左エ門尉は病いと偽って来なかった。そこで景勝は左エ門尉に逆意ありと判断し、海津城主上条義春に命じてこれを討たせた。義春は能登の国主畠山修理大輔義忠の末子である。幼少の時、謙信のもとに人質として送られてきたが、謙信は義春を景勝の妹婿とし大将分に取り立てた。義春はよくこの期待に応えて景勝を補佐してきた。須田左エ門尉討ち取りを命ぜられると、義春は四、五人の供侍を従え、平服で病気見舞いと称して福島城を訪れた。これは多分に危険な賭けである。一歩間違えば生還を期しがたいものであった。左エ門尉も迷ったが、結局酒を出してこれをもてなした。義春は半日をこの城で過ごした。帰ると二、三日間を置いてから返礼として海津の城に左エ門尉を招待した。左エ門尉もこれを受け、海津の城に向かった。変ある場合に備えて、七百騎を従えた。し

かし義春はそれをはるかに上回る二千余人をもって左エ門尉を包囲した。左エ門尉は、義春、汚なしと叫んで、義春めがけて突っ込んできた。そこをめがけて、義春の銃隊が一斉に火をふいた。左エ門尉は、もんどりうって落馬した。

越水の会

天正十三年（一五八五）八月、秀吉はみずから十万の大軍を擁して佐々成政征伐の軍を起こした。この予定が遅れたについては、つぎの事情があった。

秀吉は、北畠信雄の家老岡田長門守以下三人の買収にかかった。信雄は信長の第二子で、岐阜の北畠家を継いでいた。それを知ると、信雄は三人の家老を殺してしまった。これを詰問したのが、秀吉である。信雄はこれを怒り、家康に加勢を求めた。家康はこれを好機と見て、秀吉に対し、信雄と共同戦線を張ることに同意した。亡友の遺児を義によって助けるという口実も悪くはないと考えたからである。それに今、秀吉を叩かなければ、天下は秀吉のものになってしまうという判断もそこにあった。小牧・長久手の戦いは、こうして起こった。

しかし、これほどはかばかしい進展を見せぬ戦いも、珍しかった。尾州小牧山を中心に、九か月もの間両者は睨み合った。その間、戦いらしい戦いと言えば、二度ばかりである。三月、秀吉の先鋒、森長可は家康方の羽黒の砦を攻め落とした。四月になると、

秀吉の甥の豊臣秀次が長可と池田勝入斎と謀り家康の背後をつこうとしたが、家康に察知されて長久手で敗れた。これだけである。そうするうちに、秀吉は信雄に手を回して、さっさと単独講和を結んでしまった。これには家康もあっけにとられた。信雄に使者を遣わして信雄を責めても、一向にらちがあかなかった。やむなくさすがの家康も、居城の岡崎に帰るしかなかった。

これで一区切りがついたとした秀吉は、今度は佐々成政攻めにかかった。景勝にも書状を送り出陣を求めてきた。これに応じ景勝は、兵八千をもって越中に侵入した。そしてまたたく間に宮崎城を陥れた。その頃には成政は、戦わずして頭を坊主にまるめ、秀吉に降伏していたのである。成政にも意地はあった。信長麾下の先輩部将として、成政は常に秀吉を下風と見立ててきた。だが、今となってはこの有り様である。成政は何かが狂っていると思った。こんなことがあってたまるか。今にきっと何かが起こる。起こらないですむものかと秀吉の好運を呪った。この一念が成政に降服の道を選ばせた。生命さえあればその時こそ。秀吉は成政の生命を助け、越中一国のうち新川一郡だけを彼に与えた。のち肥後に移封されると、秀吉の禁に背いて検地を行なって失敗し、死を命ぜられた。成政の期待した変は、ついに秀吉に起こらず、成政自身に起こったのであ

る。

こうして成政の処分が終わると、秀吉はわずかに石田三成、木村秀俊ら三十八人の供揃えで、越水の城下に入った。

そこから越水城主須田修理亮に遣いし、景勝公にお目にかかりたく、木村秀俊ここに参上したと告げさせた。木村秀俊と言えば、先年秀吉の使者として越後に赴いた人である。その人ならば知っている。疎略にできまいと考えて、修理亮自身で町屋に出向いた。修理亮の姿を見ると、秀吉は出迎え大儀と労をねぎらったあと、自分は秀吉であると気さくに声をかけた。景勝公に内々での相談事があってまかり越した。ここにおいでを願えまいかと。修理亮はまじまじと秀吉を見た。目が落ちくぼんで大きく、やせた小男が、本当に秀吉であろうか。秀吉であるならば、十万の大軍を動かせるお人である。修理亮の持っている先入観と現に目の前にいる秀吉のそれとが、急にかみ合わなかった。ある当惑さを感じて、修理亮はちらと視線を脇にそらした。そこに木村秀俊がいた。幸い秀俊とは面識があった。秀俊も自分を覚えていて、目礼を返してくれた。それで修理亮の気持ちが決まった。一礼すると、修理亮の口を乾いた声が走った。承知つかまつりました。二、三日の猶予を賜りませ。早速わが主景勝に申し伝えますれば——。

それからいんぎんにすすめて修理亮は、秀吉主従を自分の城に招じ入れた。

すぐさま糸魚川城にいる景勝のもとへ急使が立った。景勝、兼続にこのことが告げられると、あまりの思いがけなさに、二人は意表をつかれた。このことは、ありがたいことではあったが、絶対にあり得ぬことではなかったからである。秀吉が機略に富む者であることは、二人は風聞でよく知っていた。だがあまりの小人数である。身の危険を感じないのか。

「まこと秀吉公でしょうな」

兼続が言うと景勝は黙ってうなずいた。

「行かずばなりますまい」

「参ろう」

今度は、景勝もそう答えた。

秀吉は三日二晩を越水の城で過ごした。考えてみれば、これは秀吉自らが求めて景勝の籠の鳥になったようなものであった。秀吉にはそのことが一向に苦にならぬように見えた。かえって神経をとがらせていたのは、石田三成の方である。景勝にその気があれば、秀吉の生命など、一瞬にしてこれを奪うことができた。

景勝主従が城に着くのを待ちかねていた修理亮は、二人の顔を見ると、別間に通し人払いの上、声をひそめて言った。

「修理の見るところ、秀吉公にまぎれもござらぬ。ひと思いにお討ちなされますか」

「たわけめ」

兼続はそれを聞くと、声を荒らげて一喝した。兼続にしてはめずらしいことであった。

「上杉の義を何と心得る。義なくて何の上杉ぞ。秀吉公がここにあるは、上杉の義を信じたればこそ。その信を裏切るわけにはまいらぬ。それがお主にはわからぬか」

「わかり申さぬ」

修理亮はなおもくいさがり鉾先を景勝に向けた。

「今これをいたさねば、悔いをあとに残しまするぞ。殿、ご決断を――」

景勝はにがりきった表情をあらわにして言った。

「修理、やめよ」

これ以上修理が言葉を返せば、景勝の佩刀が鞘を離れていた。修理亮は黙った。

秀吉と景勝との密談は、城の奥間で一刻（二時間）にわたって続けられた。その席に同席を許された者は、石田三成と兼続のみである。

秀吉は雄弁だった。景勝はひたとその視線を秀吉に向けてまばたきもしなかった。秀吉はまず謙信の義と勇武とを持ちあげた。故右大臣家（織田信長）もその勇武を恐れられた。鬼神をもしのぐとは、謙信公のことであろう。この秀吉もそれにあやかりたいものである。ついで天下の仕置きに触れ、戦乱に明け暮れた民の苦しみを救い、帝（みかど）の御心を安んじ奉ることこそ、自分に課せられた急務であり、半ばそれを達成している。ついてはおことと徳川殿とに、盟友として協力をお願いしたい。お二人の力添えが得られれば、秀吉の悲願は、たちどころに成就する。そう言って秀吉は景勝に深々と頭をさげて見せた。秀吉は偉大なる演技者でもある。ここ一番という檜舞台に立って、頭をさげることくらいは、秀吉にとって何でもなかった。秀吉の胸中には、景勝の協力を得られれば、無益の血を流さずに済むという計算もはっきりとはじき出されていた。秀吉は決して景勝に対して心にもないことを言っているわけではなかったのである。家康に対しても、同じことである。家康を味方につけるために、自分の妹の旭（あさひ）姫を家康に嫁がせ、それでも十分でないと見るや、自分の生母の大政所（おおまんどころ）さえも人質として岡崎に送っている。それに盟友とは言いながら、秀吉の官位が次第に進み関白太政大臣となるから、自然、景勝も家康も、秀吉に臣従する結果になった。秀吉にとってそんなことなど、一瞬

の読み筋に過ぎなかった。

景勝はこれを了とした。秀吉の義が、景勝の義にいたくかなったからである。笑顔を見せぬ景勝が笑った。心を解いた証拠である。いかにもお味方つかまつる。先陣をおおせつけ下されよと。

兼続は、この小男に不思議な魅力を感じていた。それは、謙信以外に感じたことのないものだった。秀吉の口をついて出た言葉は、決して大言ではない。それが日常事のことのように、語られただけである。しかも秀吉の話しぶりがいかにも確信に満ち、自分がやらなければ他の誰にできるか、という気迫にあふれていた。言うなれば、男の意気である。そのことを兼続は、痛いように自分の胸に感じるにつけ、こう思った。秀吉のような男もこの世におったのか。今の自分に、この男の真似ができるか。いや、できない。今はできなくとも、自分は幸いにもこの男よりは若い。この男に学べばよいのだ。そのためには身を屈しよう。頭もさげよう。それは恥でも何でもない。すばらしい先達にめぐり会えたことを感謝しよう。天は大いなるお人を兼続にお引き合わせ下された。

と、秀吉がにこと兼続に声をかけた。直江どの、上杉どのと上洛なされよ。再会を楽しみにいたしておる。兼続もそれに答えた。わが主と図り、そういたしますると。石田

三成も言葉をついでお待ち申すと言った。これが兼続と三成との出会いでもあった。時に兼続、三成ともに二十六歳。

天正十四年（一五八六）五月、秀吉との約定通り、景勝、兼続は上洛し、六月十六日大坂城に伺候して関白秀吉に拝謁した。二十二日、景勝は従四位下左近衛権少将兼侍従に任ぜられ、兼続もまた従五位に叙せられた。秀吉は二人を饗するに、千利休の茶会をもってした。

千利休は堺の納屋衆の一人、千与兵衛の長子として生まれ、茶を好んでその道に精進し、はじめ宗易と称し、利休は居士号である。織田信長に見出されてその茶頭となり、信長没後は秀吉のもとでその職にあった。その権勢は強く、表向きのことは秀吉の舎弟の豊臣秀長、内々のことは利休と言われた。ということは、この二人を通して秀吉に願い出れば、たいていのことは許されたということである。その権力の強弱は、天下人にいかに信頼されているかによって決まる。その意味で、利休はまさに時の人であった。

大坂城での茶会のあと、別間で兼続は利休に問うた。自分は田舎者故、不躾は許されよ。茶道の神髄とは何かと。利休は兼続をすずやかに見て答えた。わが師紹鷗は、侘を侘する心と教えられた。それを説明されるのに、「新古今和歌集」の藤原定家卿の一

首をもってした。

見渡せば花も紅葉もなかりけり浦のとま屋の秋の夕暮れ

このことは無の境地に近い。華美を嫌った利休の好みと一脈相通ずるものがある。しかし利休はこの歌でこと足れりとせず、藤原家隆の一首を選んだ。

花をのみ待つらむ人に山里の雪間の草の春を見せばや

利休の美は、日常的なものの中における発見の美である。それを求める心さえあれば、どこにでも発見し得る有であった。花が咲くのを待つまでもない。雪の間を割って萌え立つ新芽の中にも春はある。それを心づけて見ることこそ、茶の心であると。

兼続はこれを無の中に有を求める心と解した。これは美というよりは、自分の境地である。それを求める心がなければ、見れども見えず、聞けども聞こえずである。兼続は漢詩を好んだので、つとに理解も早かった。後年兼続はその心を漢詩に詠み、「四季農

戒書」にこう記した。

雪夜囲炉

雪夜炉を囲んで情更に長し
吟遊相会して古今を忘る
江南良策求むる処無し
柴火煙中煨火香ばし

四季農戒書

一、四月　最中　男は未明より暮まで、鍬のさきのめり入るほど田をうなうべし。女房娘は三度のめしをこしらえ、頭にあかき手巾をかぶり、田のほとりへ持ち行き老若共に、よごれたる男の前へ食をすうべし。あかき衣装の女房を老若共に男みて其身はよごれながらも心をいさみ身労を忘るべし。……

兼続の詩魂は、日常性の中にあってよくそれを克服した。上越、東北の冬は長い。むかし雪の夜にあって、「雪夜囲炉」の経験をせぬ者はなかったろう。要はその経験を経験のままに終わらせるかどうかである。さつま芋の焼けるかんばしい香りとともに、その余情は今に生きている。

「農戒書」の赤い手拭を女性にかぶせる——これは兼続ならではの発想である。それを見て、男たちはしばし労苦を忘れ、飯時を知る。田畑にこの赤い手拭が散在する時、必ずそこに一家の語らいが生まれる。それを微笑して眺める兼続には、武将としての面影はない。

明けて天正十五年夏、景勝はいよいよ反逆者新発田治長に対して決着をつけるべき時が来た。この反逆は、原因はと言えば、織田信長の誘いに端を発していた。だが、その信長はすでになく、その後継者豊臣秀吉と上杉とが同盟関係にある以上、もう戦う理由は失われていた。一端の責任を感じた秀吉は、後陽成天皇に上奏して、和議を図ろうとした。帝はこれをよみせられ、青蓮院尊朝親王に命ぜられ、親王また長谷の三位、辻坊法眼に意を含めて新発田に下向させた。

しかしながら治長はその子治時とともにこれを拒否した。二人が考えたのは、こうで

ある。自分たちは主家の上杉に楯ついた。その身をもって、どうして景勝に見えることができようか。朝廷の命に背けば逆賊となるが、もはやいたしかたのないことであると。そこには死はあっても、生はなかった。これをよく言えば、治長治時父子は、よく恥を知っていた。悪く言えば、異端者と言える。あくまでも自分の士道を貫こうとするなら、兵を巻き添えにせずとも、二人が景勝の前に出て断斬を願い出るか、自刃し果てる方法もあったのである。こうして最後のとどめを刺すべく、上杉の新発田総攻撃が開始された。

兼続はその兵三千をもって、新発田城と会津の芦名盛隆とを結ぶつなぎの城、赤谷城を取り囲んだ。

兼続はつぶさに敵情を偵察すると、軍勢を三つに分けた。灌木、枯れ草を集め、城の西城壁に山と積ませた。これに火をかけ、ここから攻めるぞと見せかけての擬態である。攻撃の本命は城の東方であり、兼続自身が軍勢を率い、旗、指し物を倒して林に隠れた。残る一隊は、それをさらに二分し、城の南北それぞれ六、七町（約七千メートル）の地点に伏勢として置いた。

西風の吹くのを待ってその夜、兼続軍の第一陣は、枯草木に火をかけると鬨をあげ、

弓、鉄砲の援護のもとに攻めたてた。それを合図に、兼続の主力は暗に乗じて、ひたと東側城壁に忍び寄った。西と東との攻撃の時間差は、約小半刻（約三十分）である。西側の攻撃にのみ気を取られていた城兵は、この背後からの攻撃に、やすやすと侵入を許した。こうなっては、その結果はもう目に見えていた。南北の城門を開き、城兵たちは先を争って逃げた。それを待ちうけていたのが、先の伏勢である。彼らの銃撃の前に、城兵たちはいたずらに屍を野辺にさらした。

赤谷城を攻め落とした兼続は、そこに五百の守備隊を残すと、すぐさまとって返し、新発田城に向かい、景勝の本隊と合流した。新発田城の落城は、十月三日のことである。

落城も旦夕に迫るのを見てとると、治時は色部長実の旗印めがけて打って出た。長実の妻は治時の妹である。二人は上杉家中にあって親交があった。色部勢の手にかかって死ぬことを望んだからである。形勢はすでに定まり、治時の手勢は二人、三人と討ちとられ、あとは治時を残す数騎となった。戦い疲れた治時は、馬から降りその場に座った。動こうとしても身体が動かず、そこまでがやっとであった。これまでと治時は血ぬられた大刀の刃を自分の首筋にあて、力の限りぐいと下へそれを引いた。さっと鮮血があたりへ飛び散り、治時の身体ががくんと前に落ちた。

直江山城守の誕生

天正十四年（一五八六）秋、兼続にはお船の方との別れが待っていた。景勝の妻於菊殿が秀吉の人質として京伏見屋敷に上洛するにつき、それに従ったからである。

兄勝頼の敗死と武田家滅亡後、於菊殿はめっきり心弱くなっていた。頼る実家がないということは、他郷にある於菊殿にとって景勝の愛にすがるしかなかった。この生活も秀吉の命によって別居を強いられた時、彼女は悲愴な覚悟を決めた。どうせわらわは、こうした運命の生まれであろう。泣いたとてどうにもならぬものなら、泣くのはよそう。わらわも武田の娘。見苦しい真似はすまいと。

お船の方にしても、兼続との別離は切なく胸をついた。ただ彼女は自分の置かれている立場をよくわきまえていた。自分の悲しみを口にせず、於菊殿をなぐさめて言った。お船もお供いたしますれば、お心安う思しめせ。嫡子千徳様もご一緒であられますし、殿にも春にはご上洛の由にござりますれば、お心落とし遊ばされませぬように――。

妻が何らかの事情により夫との生活が満たされぬ時、その子にのめり込んでいく例は

ざらにあった。母がわが子の成長に期待するのは、当然である。しかし、それを自分の生きがいにしなければならないということは、彼女にとって不幸であった。戦国の武家の妻の習いとはいえ、そのことを強いられたことに女の悲しみがにじみ出ていた。こうして千徳、のちの定勝は、於菊殿、お船の方の愛情を一身に受けて育った。いうなれば千徳は名門上杉、武田の血を世に輝かせ伝える期待の結晶だったのである。

天正十六年（一五八八）四月、関白秀吉は聚楽第に後陽成天皇の行幸を仰いだ。秀吉の喜びは、また一入だった。五月、景勝、兼続は第に伺候して秀吉にその光栄を賀した。

たまたまその席に前田利家が伺候していたので、景勝との間に些事が起きた。秀吉に賀をのべるのに、利家が先か景勝が先かということである。秀吉は上意をもって利家を先にした。それが景勝の鶏冠に来た。利家づれの後に賀をのべるいわれはないと兼続にごねた。身は関東管領を兼ね、勧修寺の末孫である。系図、代々の院宣、公方様（足利将軍）の御内書をそろえて関白殿下にお目にかけ、お取り消しを願おうと息巻いた。兼続はすかさず景勝の声を制し、おこらえ下さりませと止めた。それを通せば、秀吉の不興をかうことはわかり切っていた。秀吉にしても名家の出ではない。顔を逆なでされたと感ずるのは、秀吉とて景勝と同じであった。殿は権少将、前田公は中納言でござりま

するぞ。これが兼続の口から出されたことでなければ、とんだ大事になるところであった。こうさとされて景勝はしぶしぶそれに従って、ことなきを得た。このことを知ってや知らずや、秀吉は利家を上奏して大納言に昇進させた。同月二十六日、景勝もまた従三位参議に任ぜられた。

在京中、兼続には得るところが多かった。二度目の上洛であったので、兼続にも洛中の様子が少しずつのみ込めてきた。京都五山の僧、承兌を知ったのもこの時期のことである。京都五山は将軍足利義満の時に定められたもので、天竜寺、相国寺、建仁寺、東福寺、万寿寺の五寺とし、南禅寺をその上に置いた。当時五山は、鎌倉と並んで漢文学、漢詩のメッカであった。兼続はすすんでこれらの僧侶に教えを請うた。

承兌は臨済宗相国寺山内豊光寺に住していた。詩歌茶道にも通じ、諸将ともよく交わりを結んでいた。承兌がその才を発見し、徳川家康に推挙した者に、「黒衣の宰相」といわれた崇伝がいる。僧の枠を出て政治活動にも幅広く関与していた。

承兌は兼続を見て、大器と直観した。武将にして武将にあらず、武将の尺度では測れぬものを兼続に感じたのである。大器の者というのは、その相手によって器量の小さい者に対しては小さく、器量の大きい者には大きく、その片鱗をのぞかせる。しかもその

全部をのぞかせることがないのである。表面に現われるものは、すべて氷山の一角にすぎなかった。臨済宗の僧の中には、あけすけに自己の意見を相手にぶちまける者が多い。その結果、胸襟を開くもよし、また去るもよしである。承兌は兼続に言った。

「愚僧の弟子にならぬか。あっぱれ名知識となろう」

兼続は笑って答えた。

「いやはや困ったことじゃ。兼続はいまだ女子に未練がござる」

また承兌は、若き日の兼続の習作を愛吟した。

冬風吹き尽して又春を迎う
春色悠々として運長を晷る
池上糸を垂れて新柳緑なり
檻前飛気梅香に早し

同じく臨済宗妙心寺に古文真宝抄二十巻があると聞くと、兼続は南化に願い出てこれを書写した。

妙心寺は、大徳寺を中心とする一派で、一休禅師で名高い。五山からはずされていたことでもわかるように、足利幕府からは強い庇護は受けていなかった。それ故にこの妙心寺の僧たちは反俗で、求道の道に精進できた。つまり正統な修禅の中に禅僧本来の姿があると考える僧たちが修行に明け暮れ、誇りをもって清貧に甘んじ、権力に接近しなかったのである。

兼続が来意を告げ、古文真宝抄を借り受けたいと丁重に願い出ると、南化はじろりと兼続をみて、こう断わった。たしかにお尋ねの本はござるが、あいにく門外不出でござると。しかしそれで引きさがる兼続ではなかった。それならば、兼続の方から当山に出向くから、山内において書写させてはいただけまいかと再度願い出た。南化も今度はそれを了とした。

それから兼続と供回りの者との妙心寺日参が始まった。兼続は要職にある身なので、それにあまり時間を割くわけにはいかなかった。一か月間と期間を切り、書写に専念した。兼続がその書写の者たちの中に加わったのは、自分自身の目で早くその内容を知りたかったからである。書き進めるうちに、兼続はますますそれにひかれる自分を意識していった。

二週間過ぎた夕方、兼続の側に座ったものがある。よくぞご精が出ますなと声をかけて用意の茶をすすめた。見れば南化である。兼続は居ずまいを正して一礼した。和上自らのお手前恐れ入り申すと。

南化はもちろん兼続を並の武将として扱ってはいなかった。それとなく兼続の所作を観察していて、一層それを強くした。いくら書物好きだといっても、ここまでやれる人はそうざらにあるものではなかった。いうなれば求道心と一脈相通ずるものを南化は兼続に感じたのである。

ついにその書写が終わると、南化は兼続に対して称賛を惜しまなかった。今までおことのような武将を見たことがない。本心を申せば、最初、在家衆の気まぐれと感じていた。しかし今はその不明を恥じると。こうして兼続はまた一人知己を得た。

この写本完成とほぼ時を同じくして、兼続に慶事が待っていた。八月十七日、秀吉は上奏して、兼続を山城守に任じた。直江山城守の誕生である。

天正十七年（一五八九）になって景勝は佐渡島を平定した。佐渡は下尾諸家、本間利忠、羽茂高持、佐原利国らの領分であったのを、諸家、利忠が謙信に討たれ、上杉に臣従していた。しかし景勝の代になってからは挨拶がとだえていた。景勝も御館の乱、織

田信長侵攻、新発田の逆心と続いたので、それを治めるまでにはいたらなかった。ようやく新発田氏を亡ぼしたのを機に、佐渡島にも平定の軍を差し向けるゆとりができた。景勝自ら七千の軍勢を率い、藤田信吉を副将としてこれにあたらせた。高持、利国らは、信吉と四回戦い、四度敗れ、討死した。

その一方、秀吉は徳川家康と和を結び、名実ともに天下人としての威令を示そうとしていた。しかしながら、その秀吉をあなどり、それに従わぬ者がいた。小田原の北条氏政である。

この氏政の下へは、すでに前年秀吉よりの使者として、富田信広、津田信勝、僧妙音院とが遣わされ、上洛して今までの無音を謝罪せよとあった。それに対し氏政は、病いのため二年の後には上洛いたしましょうと答えた。このことは、体のよい拒絶である。しかし使者はそれを承知せずなおも強く迫り、閏十二月に上洛することを約束させた。

これで氏政が上洛すれば、北条家は安泰であったろう。秀吉は氏政に対して別に私怨は持っていなかった。秀吉の求めるものは、秀吉の命には従わせるというそのことだった。

同年八月には叔父氏規を、十二月には板部雪斎を上洛させたが、もとよりこれで秀吉

のよしとするところとはならなかった。それでも氏政は頑としてそれを実行しなかった。翌年十一月、秀吉は北条との手切れの文書を作ると、新荘直頼を駿府に遣わし、家康の手を経て氏政の子氏直に渡させた。

この文書を受け取るなり、氏政はそれを投げ捨てて叫んだ。秀吉め。この北条が、たった一片の書面で屈服すると思うてか。もし関東を取ろうとすれば、武力にかけて取るがよい。秀吉を潰走させるまでと。なぜ氏政はこう言い切れたのか。徳川家康が自分の味方であると信じていたからだ。家康は氏直の妻の父であり、婚族の間柄にあったのだ。しかしその認識からして氏政は誤りをおかした。家康はすでに秀吉麾下の家康であり、もとの家康ではなかったのである。

天正十八年三月、秀吉は入朝して節刀を賜り京都を発した。景勝また秀吉の命を受け兼続とともに兵一万を率いて春日山城を進発した。氏政はこれに対するに小田原城籠城をもってした。しかしこれに対して反対意見がないわけではなかった。氏政が主城にあって、氏直が進んで沼津城を攻め取り、富士川を隔てて一戦するという積極策である。衆議がこれで一決するかに見えたが、宿老松田憲秀が籠城説を立ててこれを一転させた。憲秀の主張はこうである。小田原城は、早雲公以来の名城である。食糧、矢玉、兵

器も十分に蓄えがある。関八州の支城を固め長対陣に持ち込めば、敵は食糧にもこと欠き、士気衰え、いながらにして退散するであろうと。

事実、小田原は、謙信でさえもこれを攻略させられなかった。今まで北条は一度も敗れることがなかったのである。ただ惜しむらくは、彼らは、その条件がその時と今とでは、まるで違うことに気づかなかった。謙信はその時、四方に自分の敵を持っていた。北条一つが敵ではなかったのである。それに秀吉と北条とでは兵力の差がありすぎた。いかな名城といえども、外部からの補給を断たれれば、いつかは落城する。秀吉には落城を急ぐ理由などいささかもなかった。いながらにして小田原城を手に入れるのは、秀吉の方だったのである。

この戦いにおいて、その能力を十分に発揮したのは、長束正家（なつかまさいえ）である。正家は前年中に米二十万石を調達し、新年早々それを駿河の江尻、清水の二港に運送を完了していた。さらに金一万枚をもって糧米を買い調（ととの）え、小田原付近にいつでも輸送できる手はずを整えていた。これを確保できた秀吉だったので、松田憲秀の予測するような状態は皆無だったのである。

三月中旬、景勝、兼続は前田利家らと合し、三万五千の兵をもって松井田城に攻めか

かった。

松井田城は、西に碓氷の険を控えた、東山道の要衝であった。守るは、大道寺政繁である。その兵二千。

政繁は敵の兵力を見ると、野戦を避け城に籠った。景勝、利家は城より一里前に布陣して、城に降服を呼びかけた。しかし政繁がそれに応ずるはずがなかった。そこで戦端が開かれたが、政繁がよく防戦し、二十余日を過ぎても城を堅守した。兼続が水路を発見しこれを断つにおよんで、政繁も戦意を捨てた。降を乞い、その子直重を人質に差し出すとともに、道案内をすることを約した。景勝、利家もこれを許し、降服を認めた。

続いて秀吉から軍令が届けられた。次の攻撃目標は、鉢形城である。この城は、現埼玉県寄居町の真南にあり、東北は上武の平野を望み、西南は秩父、甲州路の喉もとにあたっていた。その城北を荒川が流れ、城東には深沢川が通り、共に断崖をなしていた。この天然の要害の主将は氏政の弟氏邦であり、兵三千三百である。

この鉢形城もまた落城まで秀吉の軍令から約一か月を要した。力攻めにせず、食糧の尽きるのを待ったのである。兵三千三百と言えば、防禦にとっては得がたい戦力である。それと真正面から戦えば、その数の半分以上の犠牲を味方に強いることになる。こ

れを逆に長期戦に持ち込めば、この人数を養う食糧がまたたく間に底をつく計算だった。そしてこの策はずばり的中した。

景勝の重臣に藤田信吉がいた。彼は前の鉢形城主、藤田康邦の第二子である。北条氏邦が康邦の跡目を相続したのを機に、鉢形を去り、上杉に仕えた。その縁故の故に信吉は景勝に申し出た。氏邦に説いて開城いたさせますが、旧領を安堵願えますかと。景勝にしてもそれは望むところであった。これ以上、血ぬらさずして開城できれば、それに越したことはなかった。景勝は早刻それに同意した。

信吉は供侍一人とともに鉢形の城に入っていった。なるほど城兵は諸所方々の角に身体を横たえ、生気にとぼしかった。信吉は氏邦に会うと、ここまで戦った氏邦の勇武をほめ、食糧が底をついたのは御辺の罪ではござらぬと弁護した。その上でただこの先城兵がこのまま飢え死にするを座して見るのはしのびがたいとして降服を勧めた。氏邦とても、信吉からそう説かれるまでもなく、そのことを考えていた。氏邦はいさぎよく決意を述べた。自分は切腹しよう。なれど城兵の生命はお救いあれと。そこから信吉は止め役に回った。景勝公には、鉢形の所領安堵を約束されている。切腹は無用でござると。こうして氏邦は切腹を思い止まり開城すると、剃髪して正龍寺に入った。

こうして景勝、利家は六月十七日相前後して小田原に入り秀吉に謁したが、秀吉はこの軍功を予期以上には喜ばなかった。これには景勝も意外な感じを受けた。納得いかぬままに景勝は、このことを兼続に問うた。それに対し兼続はこう答えた。この世においては、見せしめということも、必要でござりましょう。誰かを血祭りにあげる。その人こそお気の毒ですが、全局から見た場合、抵抗が弱まりまする。関白殿下の思し召しは、このへんにあると存ぜられます。考えてみますれば、われらが今までの戦さは、招降によるもの。一城くらいは戦い取れとの、殿下のご諚ではありますまいか。

景勝、利家の八王子城攻めは、こうして始まった。その城主は同じく北条氏政の弟氏照である。城は武蔵国多摩郡にあり、甲州街道の要所にあたり、西に小仏峠の険を配していた。

六月二十二日、景勝の先鋒藤田信吉らは、東方の渓谷より進み、三の丸を攻撃目標とした。それと時を同じくして、甘糟清長らはその背後に回り、火をその上方に放った。さらに両軍はそこを陥れると、本丸に迫った。

その時、氏照は小田原の本城にあり、横地吉信、中山家範、狩野一菴らが守備していたが、中山家範一族の最期は悲壮を極めた。彼は本丸がすでに陥ちても、なお中の丸を

守った。左右わずかに十数名になったのを知ると、家範は門を閉じて、自害し、その一族もこれにならった。寄せ手の者が門の脇を破り乱入すると、中は老幼男女がおり重なって倒れていた。その中で家範の妻は、まだこと切れずにいた。それを見て寄せ手の兵は、その耳もとに口を寄せて大声で言った。手当てをいたしますれば、お生命を長らえて、菩提を弔い給えと。しかし彼女はかぶりを振ってそれを拒絶すると、敵の手にかかること穢(けがら)わしと叫んで、懐剣を口にふくみうつぶせになってそれに自分の身体の重みをかけて死んだ。

日ならずして小田原城は秀吉の軍勢のために一つ一つ支城を落とされ、孤城と化していった。こうなっては、勝負はすでに決していた。あとは落城がいつになるか、それを待つばかりになった。秀吉はこの小田原を歓楽郷に変じ、諸国の名物、珍物の市を開き、また上方(かみがた)、田舎の遊女を移り住ませた。諸将にも奥方女房どもを呼び寄せることを命じ、秀吉自身も、浅井家の淀君を招いた。それについては、秀吉は正室北政所(きたのまんどころ)（ねね）に書を送り北政所の口添えで淀君を小田原に来させるよう依頼した。このやり方は、いかにも秀吉らしいやり方だった。秀吉は不幸にして子のない北政所に、常に一目置くことを忘れず、立てるべきところは立てた。この書面中にも、その一端がうかがえ

る。

……大名共に、女房を呼ばせ、小田原に有附候へと、申触、……長陣を申付候まゝ、其為めに、淀の物を呼び候はん間、そもじよりも、弥よ申つかはせ候て、前廉に、用意をいたさせ候べく候。そもじに続き候ては、淀の物、我等の気に合候様に、細かに使はれ候まゝ、心易く召し寄候よし、淀へもそもじより申やり、人を遣はせ候べく候。

小田原攻めの陣中、秀吉はしばしば諸将を石垣山の本陣に招いて宴を催した。諸将の士気の衰えを防ぐとともに、人物評価のためである。兼続も召されて秀吉の前に伺候した。順を重ねるうちに、秀吉の目が止まった。秀吉は兼続を側によぶと、盃を兼続にさずけてこう問うた。山城守ならば、小田原城をどう攻めるか。しばしあたりは静かになった。このことは、諸将とても等しく関心があったからである。彼らは兼続がどう答えるかを待った。兼続は秀吉に返盃してやおらこう答えた。勝負はすでに決しており申す。それは殿下もお見透しのはず。その理由を申し上げまする。第一に北条は、はじめ

から見込み違いをしています。北条に先見の明あらば、そもそも小田原攻撃は起こりません。第二には、孤立して城が持ちこたえられた例しがありません。いたずらに時を浪費するだけです。第三には、殿下と氏政とでは人物が違います。恐れながら殿下は、上は朝廷から下は商人にいたるまで、人心を一身に集められるお方。氏政はその点全く殿下と異なります。人心、氏政を離れ、昔日の北条はもう存在しません。ここに至って、どうして小田原攻撃を急ぐ必要がありましょうか。殿下はこれ以上お手をわずらわすまでもなく、北条方から崩れ落ちましょう。これくらいのことならば、一人兼続ならずとも、その場に同席した諸将にも言えた。しかし実際にそれを口にするとなると、それは別である。それを言い出したくとも言えない者もいたはずであった。兼続はそれを臆することなく、しゃあしゃあと言ってのけたのである。そのことごとくが、秀吉の意にかなったことは言うまでもない。英雄は、とかく気ままで、気まぐれなものである。秀吉は上機嫌で兼続に言った。山城守。そちに二十万の大軍を預け、高見の見物をしたいものよのう。そして時服と佩刀とを兼続に授けた。

さしもの小田原城も、宿老松田憲秀の内応と北条氏直の徳川家康への投降とを契機にして落城した。そして秀吉は七月六日をもって開城日とした。北條氏政、氏照、松田憲

秀、大道寺政繁の四名に切腹を命じ、氏直は家康の娘婿なるをもって、高野山に放たれた。憲秀、政繁は、主君を売った者として秀吉の逆鱗に触れたためである。

我身今消（きゆ）とやいかに思ふべき空より来り空に帰れば

これは氏政の辞世である。氏政の首は氏照のそれとともに、京一条の戻橋（もどりばし）のたもとに梟（さら）された。

そのあと秀吉は徳川家康を関東に移封し、十七日には小田原を発して会津に赴いた。陸奥、奥羽の諸将に所領の安堵、処分等を決め会津から凱旋（がいせん）の途についたのは、八月十二日のことであった。

洛陽城裏、花に背いて帰る

天正十九年（一五九一）も明けて間もない二月、京都の人々を震撼させる事件が起きた。利休の賜死である。このことは、たかが茶湯者一人の死としてかたづけるには、あまりにもその影響するところが大きかった。彼らにとっては、利休を一介の茶人と見る者はなかった。豊臣政権下の補佐官として政治の中枢にいると信じられていた。

秀吉は茶会を好んだ。このことは一般に知られている通りである。秀吉が信長の旗下にあった時、一般の将士には茶道をなすことが禁じられていた。秀吉の場合にしてもそうである。信長から茶の湯が許されたのは、中国攻めの途中、その恩賞として与えられたものであった。以来秀吉は、これに厭くことがなかった。

秀吉はその茶頭としてのみならず、利休を信任することが強かった。彼は秀吉の諮問に答えるにそつがなかった。要点をつかんでずばり言い切る才気も秀吉には魅力だった。しかしその魅力も、秀吉が天下人となった後は、いささか小面憎く感じられないでもなかった。利休の力を借りずとも、天下のことはほぼ秀吉の意のままに動かせた。自

然、秀吉の利休を見る目も違ってきた。秀吉が関白太政大臣として人臣を極めるのに反比例して、利休の地位は、彼本来の茶人へと後退していった。そのことが、才を誇る利休に感知されぬはずがなかった。天下のことは秀吉なら、こと茶の湯に関しては自分がその第一人者であるという意識を一層固いものにしていった。

問題の茶会の日――その前年の九月二十三日、秀吉は聚楽第において朝会を催した。作法に従って亭主は秀吉である。お点前は茶頭としての利休が務めた。客には黒田孝高、針屋宗和、津田宗凡がいた。床に収渓筆の「遠浦帆帰」の大軸の絵を掛け、掛け物の下方、床柱の前に鳴肩衝を紹鷗所有であった天目茶碗の中に入れておいた。ここまでは型通りである。だが、肩衝と天目との間に野菊が一本はさんであった。明らかにこれは秀吉の趣向である。そこへ茶頭の利休が席に現われ炉端につくと、洞庫から瀬戸水指と柄杓を取り出して床の間へにじり寄った。ふと野菊に目を止めていたが、それを抜き取って、床の間の畳の上に横にして置いた。そして肩衝を天目茶碗に入れたまま席に持ち帰って、お茶を立て、客にすすめた。(註・肩衝は茶入れの一種)

いよいよ秀吉の出番である。秀吉も勝手から出て来て、お相伴をした。お茶が終わって客が名物の鳴肩衝を拝見している間に、利休は天目と水指をもとにもどし、拝見し

終わった肩衝を床の間にあげた。その後である。利休が床畳の上の野菊の花を取り、床の間の勝手口の隅に寄せかけて置いたのは――。

それを見て、秀吉はさっと顔色を変えた。秀吉には秀吉の自負があった。秀吉の置いた野菊はその場所に置かるべきであった。たとえその場所がどこであってもである。それをこともあろうに、勝手側の隅におしやるとは――。さすがにその朝は、秀吉も怒りを爆発させることはしなかった。その代わりにその怒りは秀吉の内面に、陰湿に沈んでいった。そのことは秀吉にとっても、利休にとってもかえって不幸だった。利休はそのような秀吉の感情のかげりを素知らぬように無視した。

それを追いかけて、重ねて利休は秀吉の機嫌を損ねる事態を自ら招いた。

利休は京大徳寺の古渓と懇意で、その山門を自ら建立し、それを寄進した。そしてその山門内に利休の雪踏ばきで杖をついた木像を彫らせてこれを安置させた。それを聞くと、秀吉はもう怒りを隠さなかった。茶坊主のぼせあがったか。これでは、うぬの下足でもって王公貴族の頭を踏むに等しい。早々にこれを取り払えと。このことを故意に荒だてれば、そこに不敬罪が成立した。

都合の悪い時には、悪いことが重なるものである。秀吉はまた無類の女好きであっ

た。利休の娘のお吟が堺の鴫屋に嫁に行き、夫に死別して実家に帰っているのを知り、東条行長を通じて秀吉の側に差し出すように命じた。東山の花見で、お吟の美貌が秀吉の目に止まったからである。それに対し利休は断わり、内々のことでもあるし、心を許してこう言った。娘を側女に差し上げることは、そこもとのような武弁には似つかわしいことであろうが、茶杓の柄を握るわれらには不要のことでござると。行長はこれをそのまま秀吉に報告した。秀吉に含むところあるは当然である。

ついに利休は土壇場に追いつめられた。利休が茶道具を不当に安く買い入れ、高く売りつけるのを業としているというのである。このことは、利休にとって心外だった。たしかにこういうことはあった。ある茶会で、利休が楽の新焼茶碗を使った。と、それを利休が使ったということで、その茶碗を欲しがる者が出て来た。これが人気を呼び、高値がついた。それを欲しがる者で金のある者は金子で、金のない者は唐物茶碗、名物を持ち込んで利休に交換を持ちかけてきた。利休も余儀なくそれに応じた。一体、茶道具というものは、値があって値がないようなものである。それを作った者、それを用いた人によって値はおのずと定まった。

これらの罪が問われて堺に蟄居を命ぜられると、利休は死を覚悟した。二月二十六日

にいたって再び上洛を命ぜられ、京葭屋町の利休屋敷に入った。その利休屋敷の警備を務めたのが、上杉である。

折しも景勝は帰国して、羽前庄内の征討にあたって留守であった。その指揮をとったのが、兼続である。よもやと思われたが、秀吉の監視の目は厳しかった。不測の変に備えて、上杉に万全を期さしめた。兼続もまた千三百をもってその屋敷を取り囲み、その侍大将に岩井信龍、色部長門守、千坂兵部らをもってした。

兼続も利休についてはとかくの噂のあることを知っていた。利休ほどの権力者になれば、政敵のあることも当然予想された。しかし利休排斥の当事者が当の秀吉であったとは思いがけなかった。秀吉こそ利休の最大の後援者ではなかったのか。あえて秀吉を理解者だったとは言わない。むしろ利休は秀吉の代弁者としての利休が兼続のイメージの中にあった。兼続は自分を田舎者として利休に接してきたので、利休がいんぎんで権高なもの言いをする人だとは思ってはいたが、さりとて自分の横車を無理押しするような印象は受けていなかった。金銭には貪欲だとは聞いていた。茶湯者にしては不粋なことだとは考えられても、そうした場に合っていなかったので、実感としてぴんとこなかった。利休屋敷の警備を命ぜられた時、むしろ兼続が直観できたことは、これで利休も最

後だということであった。利休とて一時は、「宗易（利休）ならでは関白様へ申上ぐる者一人もなし」と言われた男。その最後をどうしめくくるか。兼続の関心はそこにあった。

秀吉から切腹の命が届けられた時、利休にこう勧める者があった。大政所様（秀吉の母）か北政所様（ねね）のお情けにおすがりしてはどうかと。しかし利休はすっぱりとそれを拒絶した。利休とても天下の茶湯者である。それを今になって、どうして女子の情けにすがれようか。

二月二十八日、京都に大雨が降り、雷が鳴りわたって、のち大霰に変わった。利休は自庵の座敷の床に腰をおろし、釜の湯のたぎるのを耳にしながら、腹を一文字に切った。短刀がつかえて動かなくなると、下腹の切り口から両手を差し入れ、腸を取り出して自在蛭鉤に掛け、それからみごと短刀を上に切りあげ、こう頼んだ。いざ、ご介錯を――。すさまじいまでの気迫である。その辞世にいう。

人生七十　力囲希咄
吾這宝剣　祖仏共に殺す

提ぐる我得具足の一つ太刀
今此の時ぞ天に抛つ

この利休の最期を聞いて、兼続は利休の凡ならざるものであることを改めて認識させられた。武士としてこれほどの覚悟の者があろうか。兼続は利休の求めたものが、自分にとってもそうであることを意識していた。このことは利休が関白秀吉と渡り合い、一歩もあとにひくことのない立派な証ではなかろうか。

翌三月、細川幽斎の屋敷で開かれた漢和連句会では利休の死をめぐって、ひそかに囁かれた。兼続もその場にいたが、口を開く者も秀吉の威を恐れ、秀吉を表立って非難する者はなかった。中には利休の吝嗇をことさらに言いふらす者さえあった。それを聞くと細川幽斎はきっとなってそれをたしなめた。そこもとは生前、利休居士に面と向かってそれを言い得たか。心ないことを言われるものではない。幽斎は、細川忠興の父である。忠興は利休の高弟として利休からその死に臨み、彼の愛用した茶杓に書を書き入れ、茶の湯印可の証として忠興に与えられていた。幽斎が会の主催者という立場を離れてこう言い出すには、よほど腹にすえかねるものがあったためであった。

会における兼続は、漢詩を専らにした。句は作らなかったということである。こうした後であったので、会はいつものようには盛り上がりを見せなかった。それでも兼続には、得るところがあった。

花の後帰るを雁の心かな

この一句をものにしてこれを披露した後、幽斎は兼続に対し、こう問うた。山城守どの、漢詩ならば、これをどのように表現なされるか。兼続は微笑して考慮することしばらくして一詩を吟じた。

春雁吾に似て吾雁に似たり
洛陽城裏、花に背いて帰る

この漢詩には前二句がない。兼続の漢詩の中では、最も広く人々に愛吟されているものである。春になると、北国へ帰らなければならぬ渡り鳥の別離の悲しみが、また人々

を触発して郷愁の思いを誘うのであろうか。この漢詩には、妙に心ひかれるものがある。

天正大判が洛中に出回って評判を呼んだのも、この時であった。

一日、伊達政宗は聚楽第にその大判を持ち込み、得意げにそれを諸侯に披露した。諸侯はそれを手にしてその重さをはかり、その光沢をめでた。兼続も景勝に従ってその場に居あわせたが、やがて兼続のもとへもそれが回ってきた。やおら兼続は扇子をひろげてそれを受けると、羽根つきのように上下にぽんぽんと浮かした。それを見て政宗は、こう声をかけた。政宗は三十万石の大禄とはいえ、兼続が陪臣なるが故に、遠慮して手にせぬと見たようだった。山城(やましろ)どの、遠慮はいらぬ。手にとってご覧になされよ。それを兼続は微笑して受けて、こう答えた。かたじけのうござる。なれどわが手は、軍配を握る手にござる。誰の手に渡らぬかわからぬこのような不浄のものに、どうして手を触れられましょうか。これには政宗も苦笑して言葉を添えた。山城どののお御意のままに――。

これを額面通りに取れば、兼続の所作はいかにもきざっぽかった。さらにかんぐれば、なぜ兼続がそんなことをしたのか。

兼続も金銀の重要さはよくわきまえていた。一国を預かる為政者として、金銀の有用性を、兼続は知り尽くしているはずだった。金銀がなければ戦さもできなければ、治政もできなかった。それにもかかわらず、兼続はなぜにそのようなことを口にしたか。

その答えは、簡単である。伊達政宗の得意顔をからかったまでである。政宗は名だたる「伊達者」であった。いわゆる派手好みということだ。政宗がしたり顔に大判を見せびらかすのを、伊達者としての政宗にそぐわないと、形で示した結果がそうなった。

伊達者と言えば、秀吉もそうであった。聚楽第、大坂城、伏見城に、桃山文化の粋を集めてこれらを造らせた。秀吉の気風を反映して、形は現実的で豪壮、色彩は華麗であった。秀吉は一人それを見て、悦に入っていた。

そんな秀吉にも、一つの泣き所はあった。後継者に恵まれなかったということである。北政所はもちろんのこと、秀吉には多くの愛妾がいた。その名を後世に伝える者だけでも、淀君（西の丸殿、浅井氏）、松の丸殿（京極氏）、三の丸殿（蒲生氏）、加賀殿（前田氏）がいた。しかしながら、淀君一人を除いて子は生まれなかった。それもたった一人の子がお捨（鶴松）である。秀吉はお捨が誕生した時、自分には子供ができぬものとあきらめていたので、その喜びもひとしお大きかった。小田原在陣中も、孫のよ

うなお捨の顔を見るために大坂城に帰ったほどであった。孫となると、自分の子に対する感情とまるで違うものがあった。無条件にただ可愛いのである。どうしてそうなのか、自分でも不思議なくらいだった。子育ての時は、自分の仕事に追われてゆとりがなかった。自分も年齢が若く、子に対する期待もあった。いくら可愛いとは言っても、そこに厳しさがあった。子に対する責任感とでも言おうか。子供と自分との間に距離を置くことができず、なぐりつけることもあれば、感情をじかにぶっつけることもあった。それが年齢を経て自分の為すべきことを為しとげたと意識できた時、孫の誕生は喜び以外の何ものでもなかった。天下人と自覚する秀吉にとって、心情的に孫のようなお捨の誕生は、自分で自分が信じられぬほどの喜びであったろう。文字通り溺愛である。

そのお捨の健康がこの八月はじめから思わしくなかった。秀吉はそのことをわがことのように心配した。医師にも万全を尽くさせた。それでも経過がはかばかしくなく、秀吉をいらだたせた。病気に対してどうにもできずそれを傍観していなければならぬ自分が責められてじっとしておれず、神社仏閣へ代参を立てて回復を祈らせた。お捨本復の際には、莫大な寄進をするとも約束した。

しかしお捨は、秀吉の願いも空しく果てた。秀吉の落胆は大きかった。秀吉は人目を

はばからず号泣した。自分のもとどりを切り、諸侯がそれにならう者が多かった。お捨の葬儀は妙心寺で行なわれた。守役石川光重の願いによる。導師は南化が務めた。

天正十九年（一五九一）十一月、秀吉は秀次を養子とし、十二月四日に内大臣に進め、同二十八日には関白職を譲って、みずからは太閤と称した。まことに突然のことである。

関白秀次――この選ばれた男は、秀吉の姉瑞龍院日秀と三好一路との間に生まれた長子である。秀吉の親類頭の地位にあり、秀吉とともに戦陣に赴き軍功もあった。小田原城攻めでは秀吉の先鋒として山中城を陥し、ついで奥羽に出兵し、その戦功により織田信雄の旧領尾張と北伊勢も加えられ、百万石の大封を得ていた。天正十九年五月には再度、奥州一揆平定のため、徳川家康とともにその鎮撫に赴いた。九戸政実の福島城攻略は秀吉の全国平定の総仕上げとも言うべきものであった。秀次をあえて派遣したのは、その意味である。九戸一族の最後は、まさに容赦ない殺戮であった。

九戸政実は、浅野長政に降を乞い、その条件として南部信直の所領を従前通り認めてもらいたいと願い出た。長政はこれを許し投降して来た政実と櫛引河内守を秀次の前に連れていった。しかし秀次は不興だった。長政が自分の裁可もうけず二人の助命を約束

したことを咎めたからである。秀吉は即刻二人を斬首し、数百人のこもる福島城に対し総攻撃を命じた。

二の丸へ突入した頃、寄せ手は四方から火を放った。業火が渦を巻き、政実の妻は逃げまどった。しかし彼女は土をも踏まず歩みも習わなかったので、長く走ることはとうてい不可能だった。そこを雑兵に見つけられ、所持していた金銭をはぎとられたあげく首を刎ねられた。政実の子の最期は痛ましいものであった。その子はまだ童形だったので、女装して城を離れた。それを見とがめたのが、蒲生氏郷の家臣、外池甚五左ヱ門の郎等である。男子であることを確かめると、その子を斬った。それを聞いた土着の人たちは、涙して冥福を祈ったという。

愛憎相剋（あいぞうそうこく）

文禄元年（一五九二）三月、秀吉は朝鮮出兵の軍を起こした。文禄の役である。朝鮮、明への出兵は、秀吉の念願であったのかも知れない。織田信長在世中、それらの国々を攻め取り信長に献上すると大口たたいて、横着者よ、なにをぬかすかと言われた秀吉である。ほらが年月を経るうちに秀吉の心にあたためられ、現実のものにまで高められたものかも知れなかった。

この出兵の動機については、他の理由もいくつかある。外国貿易を求める九州諸侯の利害に動かされたという見方もその一つだ。また戦国時代に終わりをつげた諸将のエネルギーのはけ口を海外に求めざるを得なかったということにも一理はあろう。あるいはお捨の死後ようやく気力を回復した秀吉が、自分に与えられた使命の総決算として朝鮮に死に場所を求めたためであろうか。

はじめ戦いは日本軍の優勢のうちに展開した。またたく間に加藤清正軍は白頭山の東会寧まで攻め落とし、小西行長、黒田長政らは平壌（ピョンヤン）に達した。陸戦の勝敗を分けたの

は、両軍の鉄砲の差である。しかしながら沿海権は、閑山洋の敗戦によってそれを失った。その理由としては、朝鮮の戦艦の大きさ、装備において日本のそれをはるかに上回るのみならず、大砲を使用したからである。

しかもこの朝鮮出兵において、二人は秀吉恩顧の武将であるはずなのに、加藤清正、小西行長の対立抗争を決定的で、抜きさしならぬものにしていった。ことの起こりは、その和平交渉において、両者の反目が端を発した。

この朝鮮出兵は、ほとんどの諸侯がこれを好んでいないように見えた。しかし、徳川家康はじめ誰一人として、その中止を秀吉に直言し得る者はなかった。小西行長も海外貿易に長年たずさわってきた関係で、秀吉の考えるような海外事情にないことを熟知していた。秀吉の命令なのでやむなく平壌まで侵攻したが、行長の求めたものは、早期和平であった。外傷による傷口をあまり拡げぬうちに、幾分条件は悪くとも、はやく和平を締結したかった。平壌にあって一時停戦協定が成立した直後、明の大軍に攻められて行長は平壌を撤退せざるを得ない苦境に落ちた。加藤清正は、それみたことかと行長をあざ笑い、その弱腰を秀吉に報告した。行長が秀吉の不興をかったのは、想像にかたくない。行長はそのことを深く怨んだ。それ以来両者の溝は深まりこそすれ、最後まで和

解することはなかった。

加藤清正は、秀吉の命令を遵守して終始一貫して講和にのぞんだ武将の一人だった。清正は多くを語らず、実行を先にした。秀吉が朝鮮を九州の一部のように考え、永久支配をのぞんでいたのを受けて、清正はその線から一歩も譲歩しようとはしなかった。その点、日本軍の全面撤退を求める明側の要求と全く相反し、それがまた行長との対立点となっていた。

行長は困った。秀吉の強硬外交では交渉がまとまるはずがなかった。それでも行長はねばり強く工作を続け、属将の内藤如安を北京まで派遣して、明の宣祖の使いを訪日させるまでにこぎつけることができた。

慶長元年（一五九六）九月二日、秀吉は明の国使惟敬を大坂城で引見した。案内は行長である。惟敬は真赤な衣を着て、明冠をかぶった秀吉にうやうやしく一礼して賀をのべた。秀吉は上機嫌であった。秀吉は相国寺の僧承兌にその国書を読ましめた。それに先だって行長は承兌に頼んだ。国書と惟敬の上奏には若干違いがあるかも知れない。その時にはよろしく惟敬の意を汲み取って読みあげてほしいと。承兌にしても少々の違いならば、それくらいの度量はあった。しかしながら読みあげていくうちに、容易なら

ぬ表現にぶつかった。あまりの重大さに承兌もこれを飛ばして読むわけにはいかなかった。これほどの大事をなぜ惟敬が言わなかったのか、言っても通訳がこれをわざと伏せたのか。いぶかりながら承兌は一気に読みあげた。爾を封じて日本国王となすである。それを聞くと秀吉は顔色を変じて立ちあがった。読むのを止めい。秀吉はどなった。衣を捨て国書を奪い取るとその場に投げ捨てて言葉を続けた。わが国には天朝がおわします。それを差しおいて何の国王ぞ。

行長の一生は、ここに終わったと言ってもよかった。この一言で行長の苦心は一瞬にして水泡に帰した。それから再び慶長の役に入る。日本軍は、軍をたてなおした明、朝鮮の連合軍の前に苦戦を強いられることになった。

これを遡って文禄元年（一五九二）四月、景勝、兼続は出兵の命を受けて九州の名護屋に駐屯していた。徳川家康、前田利家、上杉景勝らは、予備軍としてここにいたのである。名護屋に止まること二か月。景勝、兼続が神谷宗湛から茶の接待を受けたのもこの時である。兼続はこの地にあっても、時間を無駄に浪費しなかった。済生救方三百巻をこの地で発見すると、急ぎこれを書写させた。兼続の書に対する執着の強さは、他に類をみない。

六月、熊川城修築を命ぜられて上杉軍は渡鮮した。秀吉としてはここに司令部を置き、朝鮮軍の仕置きにしようと考えたからである。翌文禄二年一月まで在陣し、上杉軍は城の修築を完成した。兼続は陣中の手すさびに連句会を催し、また木戸元斎をして師説撰歌和歌集を講ぜしめた。一方軍律を固くして、一切の掠奪を禁じた。軍律を破る者は、即死罪である。戦時下にあっては、至極当然の処分であった。修築の指揮に励むとともに、金銭を惜しまず漢籍を買い求めさせた。兵馬に荒された書籍もこれを拾い、垢をはらわせた。それを見て、諸将の一人は兼続を冷笑して言った。山城守どの。それでは田のこやし(肥料)にもなるまいに——。兼続は笑って答えた。頭のこやしになり申すと。

文禄二年九月、景勝、兼続が名護屋に帰朝すると、名護屋は秀頼(拾)誕生でわいていた。もとより淀君の腹を痛めた子である。秀吉は、このことのために何ごとも忘れて驚喜した。この喜びが諸侯に迎合されぬはずがなかった。しかしながら、この一人のみどり子の存在が、他に与える影響がいかに大きかったかを考える時、天意の皮肉さを感ずる。もとより秀頼自身にはその力はなかった。だが秀頼が秀吉の子であるというだけの理由で、秀次の死が起こり、関ケ原の戦いが起こり、大坂・冬の陣、夏の陣が起こった。秀頼の誕生は、まさに悲劇の幕開けであった。

秀頼の誕生以来、秀吉の心に微妙な変化が生まれつつあった。秀吉には、今さらのように秀次に関白職を譲り渡したことが悔やまれてならなかった。秀頼が生まれるとわかっていたら、そのようなことをしなかったものを――。このことを裏返せば、秀頼に関白職を継がせたいという親心である。しかし秀吉は、自分の身勝手さを十分に弁えていた。わかっていながらもそれを捨て切れないのが、またその本心だったのである。秀吉はなまじ秀次がいるばかりに、その下風に立たなければならぬ秀頼が可哀そうでならなかった。

秀次とてもあながち秀吉の意に逆らおうとして行動したわけではなかった。関白になった時、秀次も秀次なりに一人歩きを始めていた。朝鮮出兵に際しても、秀次は聚楽第にいてそこを動かなかった。秀吉の意中を知る参謀黒田如水（孝高、長政の父）は秀次にすすめて言った。太閤殿下に代わって朝鮮に出陣召されよ。殿下はそれを待ち望んでおられると。だが秀次はその忠告を無視した。そこは嫌でも、諸将が朝鮮で苦労しているのであるから、秀吉の身内の一人として直接戦わずとも、一声かけてやるくらいの心遣いを必要とした。

正親町上皇が崩御なされた時、七日も過ぎないというのに秀次は鹿狩を行なった。秀

次は関白であるから、その期間は精進潔斎して弔に服さなければならない時であった。そしてまたその場所が悪かった。殺生禁断の比叡山麓である。鉄砲の音があたりにこだまして時ならぬ騒音が静寂を乱した。

文禄三年（一五九四）、伏見城完成を機に秀吉は、秀頼、淀君とともにその城に移り住み、こんなことを考えていた。秀次の娘を秀頼に配していずれは秀頼に関白職を譲らせようと。しかしそれにはまだ秀頼は幼すぎた。まだ生後百日を出なかったからである。

それに伏見城に来て秀吉が新たに知ったことは、聚楽第にいる秀次のもとへ、千客が伺候して政権の中枢の様相を呈していたことである。そのことは秀吉にとって一抹の不満がなくはなかった。自分が天下の中心であると自負していたのが、そこだけ見れば、秀次に取って代わられたような印象を深くした。関白職を秀次に譲る時にそのことあるをある程度は予測していたはずなのに、さすがの秀吉もこれほどまでに秀次の威光を見せつけられると今さらのように不安にかられた。このまま秀次をほうっておけば、自分でも手のつけようがなくなるのではあるまいか。

秀次の台頭を喜ばぬ者は他にもいた。浅野長政、前田玄以、増田長盛、長束正家、石田三成ら、秀吉の側近である。これまで秀次の側近は、彼らの意を迎える態度があっ

た。しかし今度は必ずしもそれを必要としなくなった。どうしてもこれからの天下人は秀次であるという意識があるから、つい言葉のふしぶしに出た。それが石田三成らには、それ見よがしの態度に受けとられたのである。そのことは秀次のせいではなく、側近の罪である。決して太閤を無視したわけではないが、太閤に通すべき所を通さないで、どんどん政務を進められるのは、やはり三成らにとっては面白からぬことであった。

それに加えて秀次の悪評は、噂が噂を呼んで広がっていった。右大臣菊亭晴季の姫一の台をめとって、これを正室とした。それでもあきたらず、依然として女あさりが続けられた。しかしそれらのことは、まだしも弁明の余地は残されていた。しかし妊婦の腹を裂いて、嬰児を取り出し両者を死にいたらしめ、また罪人の四肢を一本一本切り取っていきその苦しむのを見て喜んだということは、どう考えても常人の神経ではなかった。

と、ある月、秀次は側近とともに北野に遊んだ。聚楽第への帰路、秀次は路傍に立つ盲人を見かけた。もちろん酒気を帯びてはいたが、輿を止めると、秀次はその前に立って声をかけた。酒を飲ませよう、参れと。盲人は見えぬながらに、目の前に立っている人が尋常の人でないことを直観した。彼はそれを丁寧にことわった。だがそれで後に退く秀次ではなかった。遠慮は無用とその右腕に手をかけ彼を手元にひっぱった。盲人は

それをいやがり、その手をはずした。秀次にしては、これが気に入らなかった。太刀を引き抜きざまその右腕を斬り落とした。鮮血があたりに飛んだ。それでもその盲人は傷口を押さえ、蒼白になりながらも気丈にこう叫んだ。人殺しじゃ。人々はおられぬか。助けてくれと。それを聞いて熊谷大膳亮も大膳亮である。盲人、これでも助かりたいかと問うた。盲人は悲痛な色をその顔に浮かべて答えた。この辺に殺生関白が辻斬りに出られると聞いていた。うぬがそれか。わが身が盲目になったのさえ悪業のためと悲しんでいたのに、今またこの災難にあう。なんと自分は因果な生まれであろう。もうこれ以上命長らえようとは思わぬ。さあ、わが首をとれと首を差しのべた。その言葉が終わるやいなや、大膳亮はその哀れな盲人を、ずたずたに切り裂いていた。大膳亮はのち、嵯峨の二尊院で切腹を命ぜられた。

秀吉の秀次に対する不信は、時間の経過とともに成長していった。その不信が疑心暗鬼に変わった時、秀次の死はまぬがれ難いものになっていた。秀次が鹿狩りにこと寄せ、甲冑具足をしのばせて秀吉を暗殺せんと企んでいるというのである。しかしこれは逆で、秀次が秀吉から不意に襲われるのを警戒したためであった。石田三成ら秀吉側近は、この流言には神経を使った。その可能性が十分にあり得たからである。それをう

かつに口にも出せず、秀吉にその判断をまかせた。秀吉はついに心を定めた。それほどまでに、秀吉の心は冷え切っていたのである。秀吉は軍勢を伏見城に集め、秀次に詰問状を発した。秀次の暴行は目にあまるものがある。供侍数名を従えて伏見城に来て弁明するか、秀次の父の居城清洲に退去せよ。

これに対し秀次は前者を選んだ。秀吉に親しく会って嘆願すれば、叔父、甥の間柄であるから、生命だけは助けてくれるものと考えたからである。しかしながら、秀吉は秀次に引見を許さなかった。木下吉隆の屋敷に秀次を入れ、高野山へ追放を申し渡した。これには秀次も自分の天運も尽きたことを感じた。その嘆願も、秀吉に面と顔を合わせてこそ望みがあった。それさえも秀次には断たれたのである。秀次は剃髪して染め衣の身となり、七月八日、供侍百人とともに高野山にのぼった。それを追いかけるように、秀次切腹の命が出された。慶長四年（一五九九）七月十五日、秀次は高野山青巌寺においてその生涯を終わった。その死はすさまじいまでに怒気を含むものであったという。われ悪鬼となりて、豊臣家を亡ぼさんと。

この秀次の死は、京都の市井には当然のこととして認められた。しかし秀吉が秀次の一族になした処刑は、少なからず反感をかった。織田信長と違い殺生を好まぬという秀

吉の声望は一時に地に落ちた。

八月二日、秀吉は秀次の子女妻妾三十余名を京三条河原で斬首した。その中に山形城主最上義光の娘駒姫がいた。彼女は天正十九年九月、秀次が九戸一揆を平定して帰京の途中山形に立ち寄った時、義光はこの賓客をもてなすため、駒姫を秀次の宴にはべらせた。その時彼女は童女であった。秀次はいたく駒姫が気に入り、成人の後は上洛させることを義光に約束させた。義光としても、時の権力者と結ぶことは、決して悪いことではなかった。むしろ義光の方からすすんでそれを希望した。

数年後、義光は駒姫を伴って秀次のもとに伺候した。以後、駒姫は伊満の方と称した。しかしその時には秀次は最悪の時を迎えていた。秀次の賜死とその一族の処刑が申し渡されると、義光は家康を通じて秀吉に助命を願い出た。しかし結果的には秀吉の聞き入れるところとならなかった。伊満の方十五歳の辞世を、こう伝えている。

罪をきる弥陀の剣にかかる身のなにか五つのさわりあるべき

義光は秀吉を怨む心が強かった。伊満の方の死を弔む気持ちがそうさせたのである。

兼続とても、この事件について釈然とせぬものを感じていた。兼続にはその事件の裏がすっぱりと読みとれていた。秀頼がいくら可愛いからと言って、ここまでする必要があったのであろうか。どう考えても秀次の子女を殺したことは、秀吉の負に働いても、正に働く要因は見出せなかった。兼続は、そこに秀吉の弱さを見た。兼続が秀吉に心服して以来、兼続がはじめて感じた経験だった。秀吉ほどの人物にしても年をとればこうである。それでは自分は——。兼続は自戒してこう思った。わしは断じてこうはならぬ、こうはならぬぞ。

慶長元年（一五九六）閏七月の大地震は、畿内においてその被害がもっとも大きく、死者数万人と伝えられている。伏見城もその被害を受け、大天守閣も崩壊し、そのほか城門、諸侯の屋敷も大破、倒壊するものが多かった。

秀吉はただちに諸侯に命じて、その修築にあたらせた。その時景勝の官位は権中納言に進み、五大老の要職にあったが、兼続をして修築のための、舟入総奉行を命じた。太閤の威信にかけても修築は急務だったのである。ゼスイット派の宣教師の一人は、この天変地災をもってゼウスが秀吉に対して懲罰を降し給うたと言った。世論もほぼこれと同じような見方をしていたからである。

それを憂いた三成は、兼続を閑亭に誘った。余人を交えず懇談したいというのが、その口上である。兼続も、即それに応じた。

閑亭での三成は、秀吉の健康状態がすぐれぬことから説き始めた。話の進行につれて兼続にも三成の言わんとすることが、少しずつのみ込めてきた。秀吉の生命も、そう長くないということである。兼続もこの側近の見方に誤りがなかろうと判断した。この頃の秀吉は、あまりに百年先のことを心配し過ぎた。兼続はふんふんとうなずくだけで、しいて言葉をさしはさまなかった。一段落したところで、三成は兼続に問いかけた。

「山城守どの。太閤殿下亡きあと、豊臣家はどうなるとお思いか」

「十五年が別れ道でござろう」

兼続は確信を持って答えることができた。

「秀頼様がなんとしてもご幼少であらせられます」

「十五年を持ちこたえることができれば――」

「そうなれば、治部どの（三成）の補佐を得て、安泰でござる」

「なるほど」

とうなずいても三成は真顔をくずさなかった。

「豊臣家の安泰を願わぬ者がありとすれば――」
「それは治部どのも、よくご承知のはず」
そこで言葉を切って、兼続は三成の反応を見た。三成がそれを考えぬはずがないのである。だからこその問いかけである。三成はにっと笑って答えた。
「ご賢察、恐れ入る。内府（徳川家康）でござろうか」
「恐らく。それに相違ござるまい」
兼続とても見方はそれに尽きた。二人の間に意は十分に通じている。
「その折は、何分のご助勢を願いたい」
そう言って三成は、じっと兼続に視線をすえた。それに答えるに兼続はつぎの言葉をもってした。
「心得申した。時いたらば、兼続いかにもご助勢つかまつろう」
そして兼続はこうつけ加えた。雲は風を追って飛ぶと言われている。いかに内府とて、豊臣家に内紛がなければ、容易に手出しはできないはずである。よくよく治部どのにはこのことにご留意あられて、万全をつくされよと。兼続の言うのは、理である。つけ入る隙を与えなければ、これにまさる上策はなかった。

慶長三年（一五九八）正月、景勝は会津百二十万石の大守に封ぜられ、兼続もまた秀吉の特命により米沢三十万石を賜った。陪臣にしてはこの措置は、けだし異例中の異例と言えた。ちなみに諸侯の中で当時三十万石を越える者は、徳川家康、毛利輝元、上杉景勝、前田利家、伊達政宗、宇喜多秀家、島津忠恒、佐竹義宣、小早川秀秋、鍋島直茂十名を数えるのみであり、石田三成でさえ佐和山城主として二十万石を領するのみであった。蒲生氏郷の死去にともない、氏郷に代わる奥羽の仕置に、秀吉は景勝、兼続を選んだためである。

同年二月、会津に景勝が着任する時になって、上杉屋敷につまらぬ争いが起きた。この起こりはこうである。

上杉の家臣横田式部が、召し抱えていた茶坊主を無礼打ちにした。それでおさまらないのが、坊主の親戚たちである。式部の非をならし、これを訴えた。本来ならば、訴訟先は兼続である。それをこともあろうに、前田玄以、石田三成に持ち込んだ。

それを受けると、三成は筋違いを納得させ兼続にも連絡して上杉家扱いとした。それを了とし兼続も彼らの訴訟を受けた。早速双方を呼び出してその言い分を聞いたのち、兼続は裁決を下した。式部は死者を弔うため、銀五十枚を遺族に与えるようにと。

しかし訴人側はその裁決に納得しなかった。再度、前田玄以、石田三成に不服として訴えたが、今度は二人もそれに取りあわなかった。すると彼らは、矛先をかえて性懲りもなくまたも兼続に願い出た。あまりのしつこさに兼続も折れて再審を開始した。その結果、兼続は裁決を変えて銀七十枚を納めて落着とせぬかと訴人側に提示した。それに対する訴人側の言い分が心憎かった。銀子を七十枚はおろか七百枚を積まれても、駄目だ。そんなことで死んだ者が生きかえるものか。生かして返せと。

兼続はそれを黙って聞いていたが、かたわらの紙を手に取ると、すずりを引き寄せて、さらさらとそれに筆で認めた。書き終わった兼続は、やおら訴人たちに尋ねた。その方たちに尋ねる。ただ今の申し條、しかとその通りか。彼らは皆申し合わせに従ってそうだとうなずいた。それをじろりと見て兼続は、張本人は誰か、名乗り出よと言った。それに応じて、茶坊主の兄と伯父とが立ちあがった。それがどうしたと、兼続を向こうに回しぬけぬけと一歩も後に退かぬ不敵さがその面上に見えた。この二人に対し、兼続は静かに申し渡した。兼続がどのような裁決を下そうと、おそらくその方らには合点がいくまい。ほとほと困ったことだ。この上は、かの坊主を今生に呼びもどすしかあるまい。それならよかろう。そのためには、その方らにあの世まで迎えに行ってもらいたい。

今えんま大王に手紙を書いたから、大王にこれを見せるがよかろうと言って読みあげた。

未だ御意を得ず候らえども、一筆入れ申し候。然らば横田式部召使の茶道坊主、親類共呼び戻し申し度と、達て申すに付き、即親類二人迎えに越し申し候。急ぎ御返信有る可く候。恐々謹言。

二月十日

直江山城守兼続

閻魔大王殿　参

それを読み終わると、兼続は下役人に命じて二人をその場で斬殺させた。

そして三月、兼続は景勝とともに伏見を発し、新たな治政を待つ会津へと駒を進めて行った。二人が伏見城に伺候してこの度の移封を感謝し別れを告げた時、秀吉はいつになく心細げにこうもらした。中納言（上杉景勝）今度の上洛はいつになるか。早々にいたせよ。しかし、二人はその後、生ける秀吉を見ることは絶えてなかった。

イエズス会の宣教師は、秀吉の病状をこう記録している。

この頃太閤様はお病気になられた。このことは、ゼウスの特別の御旨であり、摂理である。太閤様がこうなってから、この国の異教徒たちは、これまで彼らが私達にして来たような虐待をしなくなったばかりか、巡察師とその一行を非常に丁重にもてなすようになった。

太閤様は、軽い不眠に悩まされたか、または今まで太閤様が殺された人達の顔を夢に見るようになった。太閤様はその顔に去れ去れとお命じになると、その顔はすぐに消えた。しかしすぐまた別の顔があらわれて、太閤様のお気持ちの安まることが少ない。このことは太閤様みずからが招かれたことである。太閤様は私達がゼウスの御名において、彼のために善かれと為すことも、おそらくお許しになるまい。太閤様は、自分の出された布告なり掟が損なわれることとゼウスを信ずることを嫌っている。太閤様は、外国人は皆、日本をわが物にするためにやってくるという、世間に流布されている虚言を深く信じて、自説を容易にまげようとはしない。太閤様がその気持ちになれば、ゼウスは彼のために、輝かしい慰安と喜悦の光とをお与え下さるであろうに――。

ともあれ秀吉は、この期におよんで未だかつて秀吉が対決したことのない悪鬼とすさまじい戦いを演じていたのである。

巨星落つ

慶長三年（一五九八）三月十五日、太閤秀吉は、醍醐において盛大な花見の宴を催した。当日は雨もなく風も吹かず、花曇りで終始した。前日までの長雨が嘘のようであった。秀吉は秀頼と並んで先頭を歩き、道の両側に咲き競う桜を愛でた。それに従うもの、北政所、西の丸殿（淀君）、松の丸殿（京極氏）、三の丸殿（蒲生氏）、加賀局（前田氏）らである。これを眺める誰の目にも、桜にこと寄せて、秀吉の関心が秀頼にあることは一目で知れた。秀吉はなめ回すように秀頼にまつわりつき、秀頼の機嫌を取り結ぶのに懸命だった。秀吉は人知れず、おのれの体力の衰えを意識していた。あまりに若年から身体を酷使してきたので、老いも秀吉にとって急速だった。自分が生きているうちに秀頼の先途を見届けたいものだという願望は、日増しにつのるばかりであった。今日の醍醐の花見も、その願望の一つの表われであるとも言えた。秀吉にとっては、秀頼のためにしてやりたいことがあまりにも多すぎた。

慶長二年九月二十六日、秀吉は御所の東、阿古世が池を取り囲む地に、秀頼の新館を

造り、淀君とともに移り住まわせた。そして二日置いて元服のために秀頼が参内し、その当日従五位下に叙せられ左近衛少将、その翌日には進められて左近衛中将に任ぜられた。異例のスピードである。こうして五歳の左近衛中将ができあがった。秀吉はそれがすむと満足して大坂に帰ったが、秀頼はそのまま新館に止まったので、秀吉は心の赴くままに秀頼に書を送った。

返す〳〵御床しく候ま、、やがて〳〵参候て、口を吸可レ申候。又我々留守に、人に口を御吸はせ候はんとおもひ参候。鷹の雁二さを進上。

秀吉は秀頼が可愛くて可愛くてたまらなかった。あえて繰り返すが、その感情は、子に対するそれというよりは、孫に対するそれであった。あとで生まれた子供ほど可愛いというが、秀吉の場合も無条件に何もかも可愛いのである。秀吉には自分の感情を制禦する何ものも持ち合わせていなかった。そうでなくとも、秀吉は喜怒哀楽をかくさぬ人である。自分が秀頼に口付けするのはよい。自分以外の者に口付けされるのはいやなのである。そこまで秀吉は心配していた。

北政所は、自分の前をまつわりつくようにして行く秀吉、秀頼に、何か心許せるものを感じていた。自分でも不思議な気持ちである。そこまでのめり込める秀吉を、北政所は今さらのように強く意識させられていた。こうなると、誰が何と言おうと、秀吉はてこでも動かせなかった。そのことを一番よく知っているのも北政所自身であった。

しかし三歳で夭折したお捨（鶴松）の誕生の時は、そうはいかなかった。淀君の懐妊が伝えられた時、北政所も心中おだやかならぬものを感じた。まさか秀吉に子ができようとは——。もちろん彼女にも嫉妬はあった。自分にできなかったことが、こともあろうに淀君によってなされようとは——。その反面、北政所は、身を焼くような苦痛の一瞬が過ぎると、疑惑者としての彼女が、次第に頭をもたげてきた。それは決して彼女が理知的であるためばかりではなかった。彼女はどちらかと言うと話し好きで、からっとした性格である。歯に衣を着せず、ずばっと言い切る点も、秀吉と好一対であった。しかしことがことだけに彼女はその重大さを十分に意識していた。かつて彼女もそれで悩み自分を責めてきたことだけに、北政所は自分の気持ちからつぎのことを完全に消し去ることができなかった。——天下様（秀吉）にお子ができるものなら、もうとっくの昔にできている。天下様も、そうお考えにならないのであろうか。

ところが北政所がそのことを口に出せない状況が、つぎつぎに積み上げられていった。これには彼女も唖然とした。秀吉はわしもまだまだ捨てたものでないぞと彼女にぬけぬけと言った。上機嫌である。秀吉は女心を知らないとうらめしく思いながらも、結局祝賀を述べるしかなかった。朝廷からも、お祝いの品々がご下賜になった。公家、大名が淀城に列をなした。蒲生氏郷にいたっては、先祖の藤原秀郷が百足を退治したというわれのある矢で作った太刀を献上さえしていた。

これほど祝福されたお捨が死んだ時、秀吉は落胆して関白を辞任し、甥の秀次に関白を譲った。北政所がその時感じたことは、秀吉の悲しみの深さである。お捨にかける期待があまりにも大きかったので、その反動も当然大きかった。すべてが派手好きで演出家の秀吉ではあるが、これだけは秀吉の本音と見てとれた。北政所は今さらのようにほっとすると同時に、うかつに発言しないでよかったという思いで安堵した。

その後が、秀頼の誕生と秀次の賜死である。この頃になると、北政所の気持ちの中で、そのことがもはや疑いえないものにまで成長していた。秀吉が淀君からよいように牛耳られているとしか思えなかった。それを淀君が仕組んだものか、それとも秀吉も納得ずくでそうなったのか。何ごとによらず、「天下様」である秀吉には、不可能という

ことがあってはならなかった。もしそれが秀吉も合意の上でのことであるとするなら、それは恐ろしいことであった。北政所は思わず身震いして、即座にこれを否定した。

――まさか、まさか秀吉がそこまでするだろうか。

秀吉が秀次に高野山で自刃を命じたと聞かされると、北政所も怒りがこみあげてきた。自己を抑え切れずに、彼女は秀吉にそのことだけは思い止まってくれるよう哀願した。

「殿下」

北政所が正面切って公式なもの言いをする時には、こういう言い方をした。

「秀次の生命、お助け下さりませ。秀次も関白職にある者。再考を願わしゅう存じます」

しかし秀吉の返事は冷たかった。

「よう、ねね（北政所）。それが困るのよ。秀次も関白なら関白のように、ああまで殺生をしなかったものを――。天下の仕置きのために、秀次をそのままにしておくことは許されぬ」

「おおそれなら、死を賜らずとも、僧籍に置くことですむものを――」

「いや、それはなるまい。駄目じゃ。余がここでけじめをつけなければ、誰がけじめをつける。ねね、こらえてくれい。政治とはつらいものよ」

それを肯定すれば、即秀次の処刑は決定する。この意識があるから、彼女も必死だった。

「わかりませぬ。わかろうとも思いませぬ。秀次は、決して殿下に弓引くような子ではございません。秀次はよく存じております。殿下あっての自分で、自分あっての殿下でないことを――。秀次の非は、ねねが身をもって正させます。秀次の身柄をねねにお預け下さりませ」

これに対して秀吉は、大きく目をむいて言った。

「天下のこと、女子にはまかされぬ。これ以上申すな。ねね、やめにせい」

「いいえ、止めませぬ」

もうこれまでと北政所も覚悟を決めた。言うだけ言ってやらなければ、彼女の気持ちがとうてい治まるものではなかった。がらりと言葉をかえて秀吉をにらんだ。

「お前さまも、お人が変わられた。お前さまにも赤い血が流れておりましょう、豊臣家の赤い血が――。それをむざと秀次に流させるという法がありますか。同族が相食め

ば、喜ぶのはまわりだけ。それがわからぬお前さまでもなかろうに――。お前さまがそうせよといわれるなら、拾どの（秀頼）に秀次を土下座させましょう。それですむことではありませんか。秀次を生かしておいてよかったと思う時が、必ず来ます。その時になって、誰も拾どののお力になれる豊臣家の者がいないとなったら、お前さまはどうなされます。ねねはそれを見るのがいやじゃ、見とうない」

秀吉に怒気が走った。秀吉はなぐりつけんばかりにして、北政所の言葉を制した。さすがに秀吉は北政所をなぐりつけることだけは止めたが、彼女の言葉が秀吉の急所を逆なでしたことはまぎれもなかった。もうこうなっては、秀吉とても後にひけなかった。秀吉はとにかくも何も、彼女の口を封じたかった。秀吉は彼女の言葉に悪意を感じた。こうしたことは、たえて感じたことのないことだった。彼女のそれには、豊臣家、いや秀頼に、何かことあれかしと言わんばかりに受け取れた。彼女の言っていることを、根も葉もない女の戯言としてこれを聞き流せるゆとりは、秀吉にはなかった。秀吉が感じていることを、そのまま彼女が言っていたからである。秀吉は不吉な予感を打ち消すように、黙れ、黙れと繰り返した。

こんなことがあって、北政所と秀吉との間に、冷ややかなものが流れた。それをよい

ことにして、秀吉は彼女に寄りつかなかった。北政所は、それもせんないことと思いあきらめていた。これでは、われとわが手で秀吉を淀君のところへ追いやったことになろう。これも運命(さだめ)なら、彼女の尺度ではかれぬ男を夫に持ったことも運命であろう。ただ一つ、それも最高の救いは、それでも秀吉が、他の側室と違って、自分に一目置いてくれるということだった。これが彼女にとってどれほど心のなぐさめとなってくれたことか。彼女にも、一人、豊臣家とは何であるかを考える時がある。それは秀吉と自分とが、二人で築いたもの。これだけは誰にでも公言できるという自負が彼女にはあった。それならば、二人でどうしようとそれは勝手。二人の間に子があるなら、また彼女の心に別な考えも浮かんだことであろう。しかし子がなかった。それならば、自分たち夫婦の死後、豊臣家がどうなろうとも、知ったことではなかった。豊臣家は、自分たち一代で終わりと考えると、北政所は妙に肩の荷が軽くなったような意識を覚えた。——それでよいのだ、もともとそうだったのだから。

それでは、秀頼はどうなるのか。それに対する北政所の解答は明快だった。淀君の出方一つだと思った。彼女はようやく一つの帰結を得たような気持ちだった。彼女は秀頼を彼女の膝に抱きあげた時のぬくもりを今に覚えていた。秀頼は人おじせぬ子だった。

彼女があやすと、秀頼はそれに応えて笑った。その笑顔がとても可愛かった。彼女は思わずこの童子のやわはだに、その肌をこすりつけていた。女の本能がそうさせるのであろうか。自分でさえそうであるから、秀吉がこの子にのめり込むのも、無理からぬことと思えた。その反面、北政所は自分の悪い性を感ぜずにはおれなかった。彼女の心をちらとよぎったもの——それはその子の面差しの中に秀吉のそれを探している自分であった。しかし見れば見るほど、秀吉の片鱗はその子のどこにも見出せなかった。淀君似であるかと言えば、そうでもなかった。童子の顔は変わるというから一概に速断できないが、彼女の見る限りでは、秀頼のそれは二人とは異質なものを備えていた。彼女はわれ知らず大きく息をはいた。半ば彼女の推測していたことが、現実のものになりつつあると。かと言ってそのことのために淀君を責めようなどという気はもうなかった。かえってそれならそれで、こだわりなく秀頼に愛情を注げられそうな感じさえ持つことができた。その時彼女は、自分でも信じられぬほど、心の動揺はなかった。

醍醐の花見は、秀吉にとって「生ける葬儀」となった。それは文字通り秀吉の持てる栄華のすべてをあますところなく昇華させたと言える。慶長三年五月、秀吉は伏見城において死の床についた。死期を覚悟した秀吉は、最後の仕上げに入った。秀吉の案ずる

ことは、秀頼のことである。もはや秀吉には、天下国家のことは念頭になかった。

秀吉は病床にあって、豊臣家安泰策を必死に考えた。五大老、三中老、五奉行の合議組織の確立である。五大老は命令機関であり、五奉行がその執行機関である。三中老はいわば前両者の調整機関であった。

五大老には、徳川家康、前田利家、毛利輝元、上杉景勝、宇喜多秀家が選ばれた。中でも徳川家康と前田利家は、声望、実力とも最も傑出するものと万人の認める者であった。家康は秀吉の主筋にあたる織田信長の同盟者で、身は内大臣の地位にいた。利家は秀吉の同僚として秀吉の信頼も深く、大納言である。秀吉の意図したものは、この二人の勢力均衡の上に立った秀頼政権の持続維持である。言うなれば、秀吉は秀頼を天下の主と定め、その補佐を家康と利家に託したに他ならなかった。

それでも死に行く秀吉の身には、自分なきあとがどうなるか不安でならなかった。その死から約一か月前七月十五日に、秀吉は前田大納言邸においてつぎのような起請文を諸大名に求めた。

一、秀頼様に対して太閤様（秀吉）同様、誠心誠意ご奉公いたすべきこと

一、御法度御置目は従前通りとし、ゆめゆめ背くべからざること
一、諸傍輩に対して私の遺恨を去るべきこと
一、徒党を組んで争わざること

ついで八月五日には、家康、利家、輝元、秀家と五奉行にもたがいに起請文を交換させ、左記の文をつけ加えた。それは、議決の方法に多数決を採用し、知行の取り次ぎ、加増の手盛りを禁じたものである。五大老のうち景勝だけはその場にいなかった。会津百二十万石に封ぜられ、その任地にいたからである。秀吉がこれだけの布石をしたということは、それだけ秀吉がその発生を恐れた証拠と言える。秀頼があまりに若手であるゆえ、秀吉が起請させた問題は十分に起こる可能性が強かった。不幸にしてやがて秀吉のこの予感が的中することになる。

しかし秀吉は、それでもこと足れりとはしなかった。家康、利家、秀忠、利長、秀家、景勝、輝元と五奉行あてに遺言状を作った。その中で秀吉は、こう書いた。家康を律義者と持ち上げ、秀頼に家康の嗣子秀忠の娘をめあわすことをうながした。利家は特に秀吉と幼友達なるをもって、秀頼の守り役とした。秀忠は秀頼の舅であるから、家康

に代わって秀頼の補佐を指示した。利長（前田利家の嗣子）に対しても、利家に代わって、やがて秀頼の守り役になるべき時期を指定した。また、景勝に対しても、家康同様、律義者とし、「秀頼様之儀、御取立候て給候へ」と言葉をつくしている。

秀吉最期の遺言状は、秀吉の弱さをあますところなく伝えるものであった。秀頼の将来にあり余る心残りを感じながら、頭をたれ肩をすぼめて暗黒の中に一人座っている、小さな老人の姿がそこにあった。

秀頼事、なりたち候やうに、此かきつけ候しゆを、しんにたのみ申、なに事も、此外にわ、おもひのこす事なく候。かしく。

八月五日　　太閤（花押）

いへやす
ちくせん
てるもと
かけかつ

秀いへ

返々秀より事、たのみ申候。五人のしゆ、たのみ申べく候。五人の物に申わたし候。なごりおしく候。以上

自分の生命が旦夕にせまったのを知った秀吉は、自分の床を伏見天守閣の一室に移し秀頼を呼び、別れを告げた。今後、家康を父と呼び、自分を父と呼ぶ必要はないと。秀吉はじっと秀頼の顔をみつめ、手をとり、そして落涙した。

北政所は秀吉の病床にいて、彼女は今まで秀吉と過ごして来た日々のことを思い浮かべていた。不思議といやな思い出は浮かばず、新婚当初のことが懐かしく再現された。これが寿命のこととて、人の力をもってしてはどうにもならぬことだと自分に言い聞かせはしたものの、北政所はまだまだ秀吉を失いたくなかった。しかしここ数日、秀吉は眠り続けに眠った。目が落ちくぼみ、やせ細って、肌も黒くつやを失っていた。それでも時折目をさますことがあると、秀吉は自分のみた夢のことを北政所に語った。右大臣家（織田信長）が彼を迎えに来たというのである。このことだけはいくら上様のおおせ

でも従いかねると答えたところで秀吉は目が覚めた。かと思えば、拾（ひろい）（秀頼）が諸大名に引見するさまを見たいのう、とも言った。このような明け暮れの生活のうちに秀吉を失うのと、何の予告もなしに一瞬の間に秀吉を失うのと、はたしてどちらがよかろうかと、北政所はそんなことも考えてみた。しかし彼女は、そのどちらもいやだった。彼女は祈った。十年が無理ならあと五年でも仕方がない。五年が駄目ならあと三年は秀吉に生きていてほしい、と。だが、彼女の祈りもむなしく八月十八日、太閤秀吉は六十三歳の生涯を閉じた。その病因は老咳（ろうがい）（結核）と言われている。淀君もよばれてそこにいたが、がばとその場に泣き伏した。しかし北政所は、涙一つ流さなかった。秀吉の死を目にしていながら、彼女は実感としてそれを拒否したのである。その事実がまるで嘘のように感じられて、しばし北政所は、秀吉の横顔を凝視していた。

露と落ち露と消えぬる我身かな
浪華（なにわ）のことは夢の又（ま）た夢　（秀吉辞世）

動乱の目

秀吉の死が、石田三成によって上杉景勝のもとに知らされたのは、それから十日後のことである。兼続もその報を会津で聞いた。一般にはその喪を秘し、朝鮮からの引き揚げを行なうようにという秀吉の遺命があったので、秘密のうちにことは進められていた。

秀吉の病いがあつく、もはや回復しがたいものであることは、兼続にもほぼ推測がついていた。すでに秀吉の遺言状が景勝に届けられ、また二人は形見わけと称して、遺物を拝領していた。景勝は雁の絵を、兼続は兼光の太刀を——。その報に接すると、景勝は兼続とともに急ぎ上洛した。何せ景勝は五大老の一人である。やはり彼が座るべきところに座ることを要した。

彼らが伏見城に着いた時には、秀吉の遺体は京都の東南阿弥陀ケ峰に葬り納められていた。家康、利家とが相談の結果、徳永寿昌（とくながひさまさ）と宮本豊盛（みやもととよもり）とが選ばれ、在陣の諸将に帰還命令を伝えるため朝鮮に派遣されていた。石田三成も、浅野長政、毛利秀元とともに博

多の名護屋城におもむき引き揚げの任にあたっていたので、その場にはいなかった。景勝・兼続は秀頼に目通りを願い出てすぐ許された。秀頼の側には淀君だけで、北政所（きたのまんどころ）の姿はなかった。景勝が型通りの挨拶を述べると、秀頼に代わって淀君が丁重な挨拶をもって答えた。秀頼が幼年のことゆえ、くれぐれも頼みおくというもので、権高なもの言いはしなかった。

その後で、二人は家康に会った。家康は上機嫌であった。小肥りの顔に微笑をたたえて、中納言どのの上洛ご苦労に存ずると言った。兼続に対しては、山城守どの、移封後のこととて万事大変でござろうとねぎらった。ついで帰還命令に触れ、景勝に事後了解とも報告ともつかず、やんわりと説明した。日頃無口な景勝も、口にしてその処置を謝した。

前田利家、毛利輝元、宇喜多秀家とも続いて挨拶を交わした。利家は、太閤にあと五年は生きていてほしかったと、嘆息するように言った。なぜ利家が五年と区切ったのかはわからなかったが、秀吉の死を悼む気持ちがありありとその面上に見えた。兼続はそんな利家に好感を抱きながらも、秀頼のためにはあと十年はほしかったのではないかと思った。それならば、秀頼も成人しよう。兼続がそのままにそれを口にすると、利家は

ほうというように兼続を見て、それならばかえって上々、利家の肩の荷も下り申すと言った。

西国の太守毛利輝元は、やや声をひそめて、家康のことを尋ねた。兼続が上機嫌のこと、朝鮮撤兵のことを伝えると、輝元はさもあろうというようにうなずいて、内府はこの頃出過ぎて困るとそんな意味のことを言った。大名気質の輝元には、自分をさておいて家康がてきぱきとことを処理するのが気に入らぬようであった。兼続は思わず苦笑させられて、何とも答えなかった。

若い宇喜多秀家は、敬意をこめて景勝に挨拶した。秀家は幼い時から秀吉が養子として面倒を見てきた人物である。彼は軍神とも言うべき上杉謙信の後継者を疎略に取り扱わなかった。自分は故太閤の恩を受けたものであるから、太閤の遺志に忠実に生きようとするものであることをはっきりと明言し、今後よろしく引き回しを願いたいと飾らぬ言葉で言った。兼続は、秀家の一本気の中に若き日の自分を見るような思いがした。

朝鮮在陣の諸将が、ぞくぞく博多に帰還して来たのは、その年の十月から十二月にかけてである。その間兼続は、石田三成と加藤清正とのかんばしからぬ噂を耳にした。とかくこうしたことは中傷され、誇張されて伝えられるものである。

三成は帰還の将士たちに秀吉の喪を告げ、一方彼らの労苦をねぎらうため茶会を催したいと申し出た。これに対し清正はきっと立って三成をねめつけながらうそぶいた。

「われら在鮮七年。茶もなければ酒もなかった。露命をつなぐためには、壁土も食べた。ひえがゆくらいならば、当方から進呈したい」

それを聞いた多くの諸将は、大いに溜飲をさげたと言う。

三成が秀吉の側にあって諸将に誤解を抱かせる要因は十分にあると兼続も推察できた。秀吉にあることないこと進言して、諸将の非をあげつらうというのである。まさかそれほどとは思えないが、兼続は三成のもの言いで損をしていると思っていた。自分の秀才づらをことさらにひけらかして、相手の感情を逆なでするようなことをずばりと発言した。清正との争いにしても、清正の邪推がこのような結果をまねいたと考えられる面があった。言ってみれば、清正の三成に対する人間的な反感である。

三成と清正の反目が表面化したのは、清正の召還事件以来のことである。清正の家来で三宅角左衛門の足軽が、明国の正使として釜山にやって来た李宗城の財貨を奪って遁走した。そのため宗城は釜山から本国に引き返し、副使の楊方亨（ようほうこう）が正使となり名護屋城でこのことを秀吉に訴えた。秀吉はただちに三成に命じ事実を糾明させた。調査を進め

るうち、小西行長の口から新たな二つの事実が明らかにされた。一つは、清正が朝鮮人の前で小西行長を堺の薬売りめと罵倒したというのである。その二は、清正が許可なくして明国への書状に「豊臣清正」と署名したというのであった。

召還命令を受けた清正は急ぎ帰国し、秀吉の質問に対し、ほぼその事実を認めたので、伏見の加藤屋敷に閉門を命じられた。閉門中清正はしきりと行長と三成をののしった。あの薬売りめ、いらざるつげ口をしおって——。きたなし、治部(三成)、はらわたの腐ったやつ——。

この裁決が下る前、清正は奉行の増田長盛に秀吉への取りなしを依頼していた。長盛は清正を気の毒に思い、自分が仲介の労をとるから三成に会ってみてはとすすめた。長盛だけでは秀吉の怒りを解く自信がなく、三成と一緒ならばあるいはと考えたからである。しかし三成の名を聞くと、清正は治部めとはき出すように言って表情をこわばらせた。それを聞きとがめて長盛は清正をたしなめた。主計どの(清正)、治部めとはおだやかではない。治部どのとて奉行職にあるもの。情をつくせば、必ずおことの力になってくれるものを——。そう理を説かれても、清正はますますいきり立つばかりであった。治部には頼まぬ。きゃつに頼むくらいならば、見事閉門を受けよう。あとはどう長

盛が説得しようと、清正にはそれを受けつける耳を持たなかった。そしてかねて三成に抱いていた疑惑は、今はある確証となって清正の胸深く育っていた。――治部の口一つで自分の罪が許されるなら、治部の口一つで自分が罪に問われることになりはしまいか。自分にそれを命ずるのは太閤か、治部か。

慶長元年（一五九六）閏（うるう）七月十二日の夜、伏見が大地震に見舞われた。その時閉門中であったにもかかわらず、清正はいち早く登城し秀吉の警護にあたった。秀吉は清正の顔を見て喜んだが、清正が閉門中であることを忘れてはいなかった。そのことをなじると、側にいた北政所が清正を取りなして言った。殿下、清正が閉門を破ってこうして来るのも、殿下の御身を思えばこそ。その性根いじらしゅうはございませぬか。清正は、秀吉子飼いの武将である。その少年期を福島正則らとともに北政所が手塩にかけた。だからわざと主計頭（かずえのかみ）（のち肥後守）と呼ばず、清正と呼び捨てにした。北政所には秀吉の気持ちなど手に取るようにわかっていた。立場上そう言わざるを得なかっただけで、清正の顔を見た時、すでに心情的には清正を許していた。あとは北政所の口添えがあればよかったのである。清正は許されてそのまま秀吉の警護を続けた。

三成もしばらく遅れて登城して来た。伏見城の中門にさしかかった時、清正はがんと

して三成の登城をこばんだ。今さら何だ。清正があれば貴様の力を借りずともよいという気持ちを露骨にあらわした。これには三成も困った。入る、入らせないで、ひともめした。そうするうちにこの騒ぎが秀吉の耳に入った。これには秀吉も苦笑いして、三成を通すようにと清正に告げさせた。これには清正もしぶしぶ従わざるを得なかった。それでも腹の虫がおさまらず、清正はいまいましげにあたりかまわぬ大声で家来にこう命じていた。仕方がない。あの背のひくいわんさん者（横着者）を入れてやれ。

清正らの反抗にあって一時支障をきたした帰還事務も、小西行長の尽力によって打開できた。清正憎しから行長は諸将の間をまわって説得につとめたからである。結果的にはこれが効を奏し、三成はことなきを得た。三成が行長に感謝したことは言うまでもない。以来三成はことあるごとに行長を立てたので、行長も生涯その行動を三成とともにすることになる。

ところが家康は、物議をかもし出すような意表の行動に出た。家康が従弟である水野忠重の娘を養女に仕立て、清正の子忠広にめあわせようとしているというのである。その情報を得ると、兼続の胸にがちりと来るものがあった。秀吉の葬儀もまだ済まないというのに家康は何としたことか。これは秀吉の大名に対する私婚禁止令違反ではない

か。そうまでして家康は、三成に対し、いやがらせをしたいのだろうか。

ところが、つづいて家康の異父弟松平康之の娘を養女にして福島正則の子正勝に、同じく家康の外曽孫である小笠原秀政の娘を養女にして蜂須賀家政の子至鎮に嫁がせようとしたばかりか、さらに追いうちをかけて伊達政宗の娘を、家康の六男忠輝の嫁にもらい受けようとしていることになると、意味が違ってきた。こうなると、そこにはある意思が働いている、ある意思が――。そうでなければ、それみよがしに太閤禁令をふみにじってまでそうする必要はないのである。それを実現するためにはこの禁令違反が、家康にとって重大な試金石の一つであると兼続はみた。諸大名がこの家康の仕掛けに対してどう反応するか。もっとせんじつめて言えば、家康を非とするものが誰と誰で、これを是とするものが誰と誰か。家康のねらいはただ一つ――豊臣家に代わって、自分が天下人になること。兼続は家康が油断のできぬ男としてその印象を一層強くしていた。それならそれでよい。そのように対応するまでのことである。景勝もうなった。家康め、したたかなやつ。舌足らずな言い方は景勝のくせである。許しがたいという気迫がその眉にあらわに出た。

この家康の公然とした挑戦が諸将の間で取りざたされ始めた慶長四年（一五九九）一月

十日、秀吉の遺命により秀頼は伏見城から前田利家を後見役として大坂城に移った。その時他の大老や奉行たちもそれに従って大坂城へ向かった。家康も当然大老の一人としてその中にいた。ただ供奉者という立場から、供回りの軍勢はそう多くはなかった。

それに目をつけたのが、石田三成の家老島左近である。左近は三成に進言して家康襲撃をすすめた。内府（家康）の禁令違反をこのまま見のがせば、豊臣家崩壊につながる。今のうちにその根を刈り取っておきましょう。この時点では、三成よりもむしろ左近の方に危機感が強かった。

左近は、策士と言うよりは軍略家である。この人の行動は、常に自分の豪勇を軸にして、すべてそこから割り出された。その点、左近は三成と対照的である。はじめ筒井順慶の家臣であったが、順慶の死後、浪々の身となった時、近江国（滋賀県）水口城主の三成の家老となった。左近伝説では、三成が四万石を領していたのに、そのうち一万五千石をさいて左近に与えたという。ということは左近が三成からそれほどまでにほれこまれたということである。左近がそれに報いるため、三成に対し絶対の忠誠を誓ったとしても、むべなるものがある。

三成が左近からこの襲撃を聞かされた時、すぐにはそれに同意しなかった。もとより

家康抹殺は三成の望むところである。しかし抹殺にもやり方がある。どうも謀殺という形をとると、後が悪い。天下の人心を損ねることは疑いもなかった。できたらその手段を用いたくなかった。相手が無理でくるなら、それを大義名分で押さえ、軍でくるなら軍で押さえたかった。三成には自分にそれができるという自負もあったし、その機会もあると信じていた。しかし左近の進言をむげに退けることもためらわれて、止むなく同意した。おそらくことは成就せぬであろう。抜かりのある家康か。それほど言うのなら、やってみるがよい。

大坂での家康の宿舎は、片桐且元の弟貞隆の屋敷であった。十一日夜半、左近の手の者が家康の寝所を襲った。しかし警備の者たちの発見が早く、家康はことなきを得た。それでも二波、三波と襲撃が行なわれるのを恐れた本多正信は、家康がただちに伏見に帰城するよう進言した。

時を移さず家康は大坂を出発した。そうしたことにかけては、正信はおそろしく細心だった。家康の駕籠には身替わりを乗せ、家康は、従者たちの中に混じって、馬でそれに従った。途中、船で淀川をのぼり、枚方に着いた。そこには井伊直政の軍勢が家康を待ちうけていた。それを見て、正信は思わずほおっと嘆息をついた。

正信は、家康の晩年、影のように家康の側にあった。徳川政権の確立に、正信の存在を抜いてこれを語れない。正信の智謀は、よく家康をして天下人たらしめた。

しかしこの二人は、根っからの、水火も辞せぬ間柄ではなかった。そうなったのは、本能寺の変以降、正信が家康の危急を救ってからだと言われている。永禄六年（一五六三）の三河の一向一揆の時には、正信は家康に背いた。一揆平定後、正信は許されて再び召しかかえられたが、正信はそのことを心苦しいとして、家康に願い出て旅に出た。

それから二十年。本能寺において織田信長が明智光秀に殺されるや、堺に遊んでいた家康は急ぎ帰国の途についた。供回りはわずかしかおらず、家康の脱出は大変むずかしかった。これを機会にして野盗が彼らを襲ったからである。宇治から信楽（しがらき）を経て伊勢に向かった。この時が家康にとって一番の危機であった。その時、正信は家康のもとに駈けつけ、脱出のために力を尽くした。それが成功し、家康は白子から船で無事に岡崎へ帰りつくことができた。

家康の正信に対する信頼は、以来動かし難いものになった。人間誰でも窮地に立った時の味方ほど有難いものはなかった。それに正信を側において意見を問うてみると、そつなく答えるのみか、とうてい家康の考えおよばぬ発想のあることがわかった。正信は

決してこの二十年間を、無駄に過ごしてはいなかった。見るべきものは見、身につけるべきものは身につけていた。正信は一向一揆にのみに荷担する人間ではなく、広い視野に立ち、うちに謀略をめぐらす、策士に変貌していたのである。この才覚が、家康の求めるものにぴったりしたことは言うまでもない。一方正信も家康を帰国させたことで、二十年来の債務を投げ落としたような気持ちだった。二十年前、家康が自分に示してくれた寛容さを、正信は忘れていなかった。それが今、家康のもとに帰ってみて、家康に接するうちに、この人を天下人にという悲願が次第に成長したことも、けだし当然であったろう。

もちろん正信は、側近者の常として武人派の諸将の軽視やねたみを買うことを知っていたので、とりわけその点に注意を払った。二万石以上の高禄をことわってそれを受けなかったのもそのあらわれの一つである。このことを正信の単なる打算と解するのは酷である。あえてそれで通したのは、彼が自分の分を知り、明智であったからである。その正信が、太閤禁令違反を家康に進言したのも、正信にそれなりの成算があってのことである。もし彼の見込みがはずれれば、その時は死あるのみの覚悟がそこにあったに違いなかった。一流の策士は、ただ口先だけでそれになれるものではない。また一面、自

分が生命をかけて計画し実行することに喜びを感ずることがなければ、策士の名に価しない。

この家康の背信に対し、一番激怒したのが利家であった。五大老から禁を破って天下の仕置きがどうなるのか。内府（家康）、思いあがったか。もともと利家は、家康と敵対関係になかった。利家は織田信長の麾下として、姉川、長篠の戦いに友軍として家康と生死を共にしてきた仲間である。むしろ信義の厚い人として家康を評価さえしていた。それがどうだ。こうまであけすけに腹黒さを見せつけられると、利家も腹にすえかねた。

利家は武弁ばかりの男ではなかった。能登一国（石川県）の支配を命ぜられた時、とくにこの地方は本願寺門徒が多くて、一向一揆対策を最大課題とした。利家は羽咋本念寺などの真宗大坊と協定し、門徒惣中を通して寺院を統治する方策をとった。利家にとって本願寺門徒は、戦いの対象ではなく、もはや立派な領民であり、再生産力そのものであったのである。

蒲生氏郷が死にのぞんで、その一子秀行の相続のことを依頼された時、利家はそれを了とした。しかしながら秀吉は、秀行が年少であることを理由にして、氏郷の所領相続

をしぶった。秀行が成人するまで、蒲生氏の出身地である江州日野四万石を与えておこうというのである。利家は秀吉の諮問に対して、これを不満として首をたてに振らなかった。病いと称して出仕せず、その一方北政所（きたのまんどころ）に手を回して会津百万石の本地相続を願い出た。北政所もよく利家の意を汲み、秀吉にこう説いた。利家をのぞいて秀頼様の後見役として他に適任者がありますか。その利家の面目をつぶして何の利がありましょう。この彼女の一言で秀吉も考えるところがあった。秀行の本地相続が認められたのは、それから間もなくであった。

そんな利家であったが、三成をあまり好んではいなかった。それを承知の上で下手から出て利家の不興を買うまいとしたのは三成の方である。そうと心を決めると、恥も外聞も捨ててそれになり切れるのが、三成の長所であった。三成は犬馬の労をつくして利家に接した。それを単に利害関係にからんで利家を味方につけようとしたとは、一概に言い切れない。三成の利家に対する感情は、家康に対するものと異質なものがあった。利家には、安心して心も解きまかせるものがあった。三成にそうまでされて利家が拒否したならば、それはあまりに彼が狭量に過ぎた。しかし利家はそうしなかった。

利家が景勝、輝元、秀家三大老と三中老、五奉行を召集し、家康の禁令違反の事実を

告げて意見を問うた。それに対し、出席者はことごとく家康を非難して止まなかった。中でも三成は、語気を強くして言った。家康に弁明の余地を与え、それでもらちがあかなかったら、家康を五大老から除外すべきである。そして衆議はそれに一決した。たしかにそれは正論である。豊臣政権を持続させようとする限りは――。しかしそれは、同時に逆転の契機を内にはらんでいた。家康が天下人たる場合である。もしそうなら、正論がたちまち空論に変わり崩壊する。家康の諸将に対する信望がなみなみならぬものであることを知っているだけに、利家も三成も両者の意見は、完全に一致した。

一月二十一日、家康詰問の使者が伏見に派遣された。正使が中老生駒一正、京相国寺の僧承兌、副使として利家の重臣村井長頼、奥村永福、徳山五兵衛がこれに従った。同時に利家は軍兵を淀、橋本に集結し、家康がもし承服しなければただちにそれを攻撃できる態勢をとった。これはたんなる威嚇ではなかった。利家は心底から一戦も辞せずと覚悟していたのである。

こうした中で十三か条にわたる詰問状が家康に手渡された。それを見て、家康はこう答弁した。家康と諸将との婚約は、媒妁人よりその旨届け出てすでに公許を得ているものと速断していたととぼけた。しかし手落ちがあったにせよ、これをもって逆心ありと

いうのは、誰を証人としてそう言うのかと逆襲さえした。

そこで三成ら奉行は、まず徳川、伊達の仲介者、今井宗薫を呼び出して問いただした。宗薫の言い分はこうである。自分は町人のことであるから、武家の法度を存ぜぬこととて、このような成り行きになったと。伊達政宗は政宗でこうである。この婚約は宗薫の才覚でなされたもの。その間の事情は自分の関知せぬことであると抜け抜けと言い返した。福島正則もこのことあるを予期したような答弁をした。内府（家康）と縁組することが、とりもなおさず秀頼様のおためになることと信じている。蜂須賀家政は幾分まともな答え方をした。内府様よりの仰せなので、それに従ったまでというのである。

家康が詰問に承服しなかったので、大坂と伏見の諸将の間に緊迫した空気が流れた。徳川の伏見屋敷の周囲に竹の柵をめぐらし、外郭を増築した。そして家康に心を寄せる諸将がつめかけ、大坂方の来襲に備えた。その主なる顔ぶれは、加藤清正、浅野幸長、福島正則、黒田孝高、同長政、蜂須賀家政、細川忠興、池田輝政、加藤嘉明、藤堂高虎らである。

三成にもこの際、家康と一戦を交わそうという気持ちはあった。しかしこれを時期尚早として止めたのが、奉行の増田長盛である。これが長盛でなかったら、三成の対応も

変わっていたはずである。何せ長盛は、三成最大の協力者の一人であった。しかも能吏である。ここはまだ兵を用いずとも、家康と話し合いはつく余地はあると判断していた。それに中老の堀尾吉晴が同調した。吉晴は家康派である。身は立場上、大坂にいるが、家康のために戦端を開くことを心配した。彼の目にも非は家康にあると考えられたからである。家康に不利な戦いはこれを避けさせなければならなかった。吉晴はそのことをそぶりにも出さず、京、大坂の地を戦乱に巻き込むことは人心を動揺させることと理で説いた。この二人の説得により、ようやく大坂方の意見がまとまった。もう一度だけ内府の出方を見ようと。

中老堀尾吉晴は、ただちに調停工作に入った。家康はこれを渡りに舟と受けた。正信の読み筋通りにことは運ばれていた。大坂方の意向が読めただけでも収穫はあった。それに吉晴という強いくさびまで得ることができた。家康と正信は、顔を見合わせてほくそ笑んだ。ほどなくして、家康対四大老、五奉行の間で誓書が交わされた。その誓書に言う。

一、今後太閤の御置目（おきて）と十人衆が連印した誓書の通り守って実行したい。

一、御法度、御置目にそむくばあいには、十人衆でよく詮索して、罪科に処すべきこと。

この誓書には、今後に遺恨を残さぬようにと触れていたが、利家の心は解けなかった。この誓書に信を置けなかったからである。利家にしてみれば、誓書を交わすからには、それを遵守する気持ちがある。その気がなくて軽々しくそれをなすべきではない。ところが家康がいとも簡単に誓詞を破り、またこともなげに誓書を書くのはどうしたわけか。利家にはそれが理解できぬのである。利家には家康の言うこととやることが、裏腹にしか思えなかった。またぞろ、尻尾を出すにちがいない。この狸め。

島左近も、てんで頭から家康の誓書を信じていない一人だった。誓書と言ってもしょせんは紙一枚。家康の腹黒に時をかせがせるに過ぎない。家康にとっては、誓書はこれを破るためにあるに等しい。殿、こんなものにたぶらかされてはなりませぬぞ、と左近は三成に言った。そのうち機会は必ずあります。どうしても内府だけは秀頼様のために除かなければなりません。上杉中納言（景勝）様にもご異存はありますまい。殿では、少々目に立ちます。私が直江山城守に会って参りましょう。三成は、うむとあごをひい

た。

左近は予告もなしに玉造の上杉屋敷を訪れた。兼続がいなければ景勝に会うまでである。景勝も留守ならば、日を改めるつもりだった。幸い兼続がいて、左近を請じ入れた。

陪臣とは言え、兼続は三十万石の大名である。一応礼をつくしたあと、左近は自分の存念を、武将らしい率直さでぶちまけて見せた。兼続には、変な小細工は不要と判断したからである。兼続はすずやかな目で左近を見すえていたが、兼続に通じ合うものを左近は感じていた。それは理屈ではなかった。直観である。やおら聞き終わって、兼続は口を開いた。

「ご貴殿の申される通りでござろう。内府（家康）は油断のならぬご仁。誓書のことも、いつまで続くものやら、その信証はない。その場におよんでほぞを噛むよりは、先手先手とそれに備えるが上策でござろう」

左近はわが意を得たように大きくうなずいたが、その目があやしく光った。

「内府を亡きものにせよと仰せか」

「いや」

と、兼続はすぐさまそれを否定した。
「わしは暗殺は好まぬ。それでは大義の一分が立たぬ」
左近はこの返事に三成を思った。この男も、わが主君と同じようなことを言う。この言葉は、左近の考えとまったく逆であったが、左近は不快さを覚えなかった。
「それでは山城守（兼続）どの。その策は――」
「和でござる」
兼続の答えがぴいんと返って来た。
「豊臣家の内部をかためれば、いかに内府とてそうそう手出しはできますまい。乗ずる隙を与えぬことじゃ。四大老、五奉行が心を一にしてことにあたることが肝要でござろう」
「その和が得られぬ時は――」
「再び大乱になり申そう。好むと好まざるとにかかわらず――」
左近はしばし間を置いてから、静かに言葉をついだ。
「大乱の起こる可能性はどうご覧になられるか」
「今のところは五分、五分と見たい。五分以上でもなければ、五分以下でもありますま

い」

そんな言い方をして兼続は微笑した。そう言い切れるだけの情報が兼続にはあったし、兼続はそれを左近にこう説明した。

現在豊臣政権は、家康と利家とを頂点とする勢力の均衡の上に立っている。ところが諸将の中には、心情的には利家に心服していながら、利害の上で家康と結ばざるを得ないものがあることも事実だ。兼続は、細川忠興、加藤清正、加藤嘉明、浅野幸長らの名を具体的にあげて、これを指摘した。彼らは、家康からことを起こされても利家からことを起こされても、二者択一に困る立場にいた。それが皮肉にも両者の均衡を保たせる緩和帯の役割を果たしていた。

こう聞かされて、左近の胸にずしりと響くものがあった。兼続がいちいち名指しした諸将は、いずれも三成にとって政敵である。間違っても三成に味方する相手ではなかった。頭では彼らを敵にすることの損失がわかっていても、左近から求めて調停工作をする気になれずにいた。彼らにあえて決着をつけるとすれば、それは戦場においてしかあるまいと左近にはそんな予感さえしていた。しかしそうは言ってもそれは最後の最後のことで、利家を間に置くことでまがりなりにも和平が保てるならそれに越したことはな

かった。左近の兼続に対する共感と信頼とは、一層強いものとなった。
「ところが、困ったことがござる」
左近は、眉をひそめて言った。
「大納言様（利家）がご発病と聞き申した」
「重うござるか」
「はかばかしくござらぬ。何分ご高齢で――」
利家は秀吉より二歳若く、家康より四歳年上だった。
「それはよくない」
兼続の端正な顔にも曇りが走った。
「大納言様には、もっともっと長生きしていただかなければ――」
そう言いながら、兼続は左近来訪の意味を悟った。均衡の破れる時期は意外と早く来るかも知れない。もうすぐにでも――。左近は再会を約して帰った。

急変

それから時を遡る。家康の誓書違反に端を発して利家が激怒し、その和解が難航していた頃、両者の対立を最も憂慮したのが、細川忠興であった。

忠興は細川幽斎の子で、その夫人はガラシヤである。茶を利休に学び、その高足の一人となった。しかもその長子忠隆の妻に利家の六女千世姫を迎えていた。一方、家康には、豊臣秀次からの負債弁済で苦しんでいた時、助けられた恩義があった。忠興がこの両者の間に立って難局打開策として考え出したことは、利家がじかに家康と会って話し合ってみるということである。忠興の念頭にはもうこれしかなかった。

しかしこのことは大変困難だった。ことを起こしたのは家康の方である。それがどうして利家の方から話し合いに家康を訪ねなければならないのか。本当に謝罪するつもりなら、家康こそ利家を訪れるのが本筋ではなかろうか。当然そのことも忠興は考えた。だがもし家康が大坂に出向いた時、生命の保証ができるか。もとよりこの会見は「しのび」である。しのびにそう多くの軍勢を連れて行くわけにはいくまい。三成がこの機会

をのがすとは、忠興には思えなかった。おそらくなり振りかまわず家康を襲撃してこよう。忠興もまた三成不信でこり固まっていた。逆に利家が伏見に出向いた場合、忠興はそれはないと考えていた。死期の近い利家を殺したとて、何になろう。時を待てばよいのだ、時を――。それを知らぬ家康ではないはずである。

そう確信すると、忠興は利家の長子利長にこう説いた。大納言様（利家）と内府様（家康）とお会いしてほしい。治部らは内府様のお生命をねらっていると聞く。内府様さえ殺せば、大納言様（利家）の生命も長くはないから肥前どの（利長）を討つのに手間がかからぬと見ているようだ。彼らの裏をかくためには、大納言様と内府様とがっちり手を組まれればよいと。それを聞いてまさかと思いながらも、利長は家康との会見を利家にすすめてみた。病床にあった利家は、それを聞き終えると、がばと身を起こした。死期を悟っていた利家は、背腹に太刀をつけられたように感じたに違いなかった。さぞかし反対されるものと利長が覚悟していたのに、利家はあっさりとそれを承諾した。

「よかろう。内府とことをかまえるのは、どう考えても、秀頼様のためによくない。斬られにゆくか。しかしむざと死にはせぬぞ。その時は内府も道連れだ」

一月二十九日、利家は船で淀川を遡った。しかし利長の同行は許さなかった。それに対し家康は、丁重に礼をつくした。淀まで利家を出迎え、輿を準備の上、家康の伏見屋敷へ案内した。途中、細川忠興らが徒歩でそれに従った。饗宴は、家康の書院で行なわれた。その時利家は自分が日頃いつも愛用していた差添えを家康に差し出し、こう告げた。利家、今生のなごりでござる。いざ——。家康は快くこれを受けた。後世の史家は、この時の利家の心情をどう伝えたか。一人はこう判断した。これで自分は、無腰である。殺すなら、いつでも殺せ。またある史家は、こうも考えた。自分は家康の軍門にくだった。利長のこと、よろしくお願い申すと。

慶長四年（一五九九）閏三月三日、利家は逝いた。それに先立つ十日前、利家は利長に遺言して言った。

一、秀頼様に謀叛する者が出ないとは限らない。常に八千の兵を大坂に置き、また金沢城の留守居役には篠原出羽守をあてよ。

一、合戦は、敵地に踏み込んでせよ。自国に踏み込まれることは、草葉の利家が承知せぬ。

一、文武二道の心掛けが肝要。武道ばかりを本とするな。

それから利家は天下の形勢を予見し、三年以内に大事が起こるであろうと言葉を残した。この予見は半ば的中した。一年余にして関ケ原の戦いが起こっている。そしてその異変は、はやくも利家の死去したその夜から起こった。

三成は利家の病中、利家の側を離れず看護するという律義さを示した。三成は自分でこれぞと決めた人には全力をあげて奉仕し、労を惜しまなかった。しかし家康に対してはがらりと態度を変えた。ろくに挨拶さえもしなかった。秀吉在世中、大坂城で三成は頭巾をかぶったまま火鉢に手をかざしていた。折しも家康が登城してその側を通ろうとした。三成はそれを知らぬふりをしてそのままの姿でいた。浅野長政は見かねて、三成に頭巾を取るよう注意した。それでも三成が黙殺したので長政は三成の頭巾を取って火鉢に投げつけた。火鉢からは灰神楽が立った。その中で三成は静かに頭巾を拾いあげ、灰を払っていた。

利家の生命が旦夕に迫った時、利家屋敷の別間で、七将がおだやかならぬ謀議を重ねていた。三成暗殺である。その計画は、三成が利家屋敷を出た時を襲撃しようというも

のであった。七将とは、加藤清正、福島正則、黒田長政、浅野幸長、細川忠興、蜂須賀家政、藤堂高虎である。彼らはそれぞれに三成を敵視し、その機を待つこと久しかった。

清正が三成をののしれば、福島正則がすぐそれに和した。この二人は北政所子飼いの手の者である。手のうちもわかっていれば、気心も知り尽くしていた。正則は、三成が淀君ばかりの機嫌を取り結んで、北政所をないがしろにしていると怒っていた。清正も直情なら正則もより直情だった。感情のおもむくままにそれをどこかで爆発させなければ、気のすまないものを正則は持っていたのである。

黒田長政と蜂須賀家政は、蔚山城の救援で先手方を命ぜられた時、すすんで戦わなかったことと、順天城撤収の主唱者であることが秀吉の不興をかい、謹慎、閉門を命ぜられていた。その秀吉への上申者が、軍目付の福島直高、垣見一直、熊谷直盛であった。悪いことにこの三人の軍目付は、三成の縁に繋がる直系であった。これを取りなしてくれるのならいざ知らず、それを逆手にとって秀吉に告げ口したと二人は三成を怨んだ。

細川忠興、浅野幸長、藤堂高虎も常に秀吉の側にあり、したり顔にしゃしゃり出る三成が鼻持ちならぬ者に思えていた。口を開けばさわやかな弁説でまくしたてるし、三成

は彼らにつけ入る隙を与えなかった。ともあれ彼らには彼らを差しおいて、秀吉が三成、三成と彼を重用するのがいやだったのである。

この武将派と奉行派の反目、対立は、戦乱の時代において避けることのできない、いわば宿命的なものであったかも知れなかった。この時代にあっては、どうしても武将派が脚光をあび、人気も出た。奉行派の働きなど、軽視され、縁の下の力持ちとしか見られなかった。そして武将派は、ことあるごとにこううそぶいた。俺たちは生命をはって働いた。それを裏返して言えば、お前たちは俺たちの言う通りにしていればよいのだ。

しかし奉行派もよく働き、為すべきことはよく為しとげた。検地、刀狩り、城割、徴税、聴訴、検断、外交交渉、糧食・弾薬の調達補給などその仕事は山積していた。もし長期にわたりそれらを中断すれば、民衆は不安におびえ、戦いは内部から崩壊している。

三成襲撃の企ては、幸いにも桑島治右エ門の耳に入り、即刻三成に伝えられた。もちろん三成にも供回りの準備はあった。しかし七将の軍兵を敵に回すとなると、不十分なのはわかっていた。三成は急ぎ利家の屋敷を出た。島左近が指揮にあたった。めざすは、佐竹義宣の屋敷である。義宣は三成支持者の一人だった。義宣の屋敷ならば七将ら

の手配りもなく遠慮があろうから、よもや踏み込むまいと判断されたからである。無事義宣屋敷に着いたのはよかったが、三成が一息入れる間もなく、清正、正則、長政らが鼻息あらくその玄関に立ち、三成引き渡しを強く迫った。引き渡しなくば屋敷に踏み込んでも三成を捕えると。尾行の者が三成の行き先をつきとめたので、彼らに思い切った行動をとらせたのである。これには義宣も困った。三成はおらぬと白を切ったが、家探しされればそれまでである。とっさに左近は、三成に一策をさずけた。内府の屋敷に難を避けられては——。殿にご同意なくば、別に策を立てましょう。それに対し三成の決断は早かった。三成には自分をつき離して、そこから自分を見るようなところがあった。このことを言いかえれば、自分を第三者の立場において、冷静に観察できる男だった。義宣にこれ以上迷惑はかけられぬ。内府のもとに行こう。内府が自分をどう取り扱うか。三成はその時、自分がこれで最後だとは、つゆ考えていなかった。

三成は再び義宣屋敷の裏門から女乗物で家康屋敷に向かった。屋敷に着くと、事情を話して身柄の保護を願い出た。これを聞いて、家康は一瞬自分の耳を疑った。まことに虫のよい話である。どう考えても、三成から頼られる筋合いのものではなかったからである。しかしありうべからざることが、現に目の前に起こっているのだ。家康はどうし

たものかと、本多正信に計った。今ここで治部（三成）を殺せば、諸将は衆を頼んで勝手なことをいたしましょう。治部を助ければ、諸将は殿のお味方になりましょう。こう言って正信はぽつんと言葉を切った。いつものことながら、結論だけを持ち出すのが、正信のくせであった。説明を求めれば筋道立てて説明するが、これがまた家康の好みにあっていたのである。

清正らが家康屋敷に押しかけて三成の引き渡しをせまった時、家康はきっぱりとこれを拒絶した。私恨のために洛中を騒がすことまかりならぬと。七将らはふんまんをぶちまけながら、しぶしぶと引き下がった。

夜半正信は家康に目通りを願い出た。すぐ許されて正信は家康の寝所に通ると、正信は、挨拶を抜きにして、治部をいかがなされますかと言って、家康の様子をうかがった。家康もそれに応えて、思案していると答えた。それを聞くと、正信は頭をさげすぐに退席した。家康主従は、それで互いの意思が通じたのである。

家康もさすがにその夜は寝付けなかった。三成とても同じだったろう。家康にとっても三成暗殺は、すばらしい魅力であった。自分の気持ち一つで三成の首などどうにでもなるのである。家康は指を噛み噛みそのことを考えた。三成を殺したあとで、理由はい

くらでもつけられる自信があった。また三成を殺すにしても、方法はいくらでもあった。三成の屍体を路上に投げ出しておけば、清正たちの誰かの手にかかったと思うだろう。しかしこの策は下策の下である。第一家康の自尊心がこれを許さなかった。折も折、正信の訪れは正直言って家康には有難かった。そして正信の言葉を聞き、自分があ答えた時、家康の気持ちは決まった。そうと決まったら、もう家康には迷いはなかった。あとは残り少ない時間を朝まで眠るだけである。

翌朝、家康は三成を呼び寄せると、こう言い渡した。いやも応もなかった。一通り清正らの言い分を三成に伝えた後、清正らの行動も不埒であるが、おことにもこの騒ぎを引き起こした責任の半分はあろうとなじった。その上で、大老の立場に立ち、佐和山城に蟄居を命じた。これは、同時に奉行職の剝奪を意味した。はじめ清正らは、家康の仲介を不満としたが、誰一人として家康に表立って異議を申し立てられる者はなかった。程なくして三成の佐和山城蟄居が伝えられると、彼らは喝采してこれを喜んだ。

その間をぬって、家康はするすると伏見城に入ってしまった。奉行前田玄以が当番の時、堀尾吉晴が玄以から鍵を借りうけ、手引きして家康を導き入れたからである。人々は家康の行動を鈍重のように見ているが、実はそうとばかりは限らない。家康はしばし

ばこのような行動に出ることがあった。人々は家康の小太りの見せ掛けにだまされたのである。ここで、天下の形勢は、大いに家康に傾いた。それを敏感に反応したのが、洛中のつぎの落首であった。

徳川の烈しき波の現われて、重き石田も名をや流さん
目の黒き人と呼ばれし三成も、負目になれば赤目をぞつる

家康のこの伏見城占有は、景勝を痛く刺激した。そうでなくとも癇癖（かんぺき）の強い景勝のことである。

「われらも覚悟いたさねば」

と兼続にたたきつけるように言った。

「帰国いたそう。これではらちがあかぬ」

家康の横暴を咎め立てするには、圧倒的に数において優る徳川の軍勢に対抗し得るだけの軍勢を必要とする。残念ながら在坂中の上杉勢にはそれがなかった。二分の一とは言わぬ。せめて三分の一の軍勢でもあれば、また対抗の仕様もあった。景勝が口惜しが

るのはそのことである。

「御意」

兼続の腹もそうであった。

「まずは帰国の上で出直すことにいたしましょう。内府はことあるごとに、秀頼様を疎略にいたさぬと申しておるそうですな、白々しくも抜け抜けと――。これくらいでなければ天下はねらえぬものと見えまする」

「秀頼様を疎略にいたさぬ」は大義である。諸将はこの言葉にしびれ、家康の横暴をある程度許容した。とくに豊臣恩顧の武将にとっては、この「殺し文句」は最大限に作用した。家康に対し、安心感と信頼さえも生まれたのである。家康はそれを見て、一人ほくそ笑んだ。いや、二人であったかも知れない。正信と――。

しかし三成がそれを口に出せばどうなるか。事実三成もこの「殺し文句」を心得て使用した。だが豊臣恩顧の武将からは反感となって三成にはね返って来た。自分ばかり忠臣ぶって片腹いたい。淀君には通じても、われらには通用せぬ。彼らには、先輩たる自分たちをさし置いて、三成が発言すること自体が気にくわなかったのである。

――せんないことだ。

と兼続は思った。

――太閤においてさえもそうであった。その巨頭が柴田勝家。勝家には太閤の存在さえも目ざわりで仕方がなかった。感情が先行して、てんで受けつけようとする気がなかった。清正も正則も度し難いものよ。倒すしか仕方があるまい。

帰国を前にして、兼続は島左近の来訪を受けた。心待ちしていたので、兼続は急ぎ書院に左近を導き入れた。

左近は玉造の上杉屋敷を訪れる前、堺の天王寺屋を訪ねていた。津田宗及のあと天王寺屋のその当主となったのが、宗凡である。それを補佐したのが、一族の長老道叱であった。この一族は三成と深い関わりを持ち、反家康に回った。道叱は家康の動きを批判してこう言った。内府様のなされ方、納得がいきまへん。これでは秀頼様があってないようなもの。この堺は、むざと内府様の思惑通りには乗りませぬぞ。道叱がこう言い切るかげには、今井宗久の子、宗薫に対する対抗意識が強く働いていた。

今井宗薫は、堺の会合衆のリーダーの一人であり、その勢力はほぼ津田一族と二分するものがあった。家康に積極的に近づき、家康の六男忠輝と伊達政宗の長女五郎八姫との縁組をまとめあげたのも、彼であった。

道叱は、家康批判のあと、左近に尋ねて言った。バテレン（宣教師、パーデレ）どもはこう申しているそうでございます。内府さまが、切支丹禁制を解かれると。手前どもはその逆と見ておりますが、まことでございますか。

これには左近もまさかとそれを打ち消した。堺にもキリスト教信徒は多かった。天王寺屋支持の薬種商も、これには深い関心を払っていた。武将の小西行長はその一族である。行長と親交の厚い三成がそれを言い出すのならばまだしも、家康の口からそれが言い出されるとは、何ともおかしな感じだった。しかしそれをバテレンや信徒たちが信じているという事実があるなら、三成もそれなりの手を打つ必要があった。海外貿易とも重要なからみも持っていることでもあるし、堺衆を味方にするためにも、無視できぬことなのである。

兼続も堺の情報は得ていた。ことごとく左近の言う通りである。情報源は、西村久左エ門乗安である。久左エ門の父は、もと織田信長に仕えていたが、その死後、京都で豪商になった。近江の蒲生氏郷の御用商人となり、蒲生氏の会津転封に従って来た。その折、米沢出店に来たのが、久左エ門である。のち蒲生氏の宇津宮転封後も米沢にいて、兼続の先手衆となった。米沢特産の青苧（麻）の上方一手輸送権を与えられて、関西で

も羽振りをきかせていた。久左エ門も兼続とともに上坂し、堺で鉄砲、玉薬の武器調達に奔走していた。その久左エ門が同時に兼続の目を兼ねていたわけである。

長篠の戦い以後、鉄砲の重要性が増したことは、今さら強調するまでもなかった。戦いの内容までそれが変えてしまった。鉄砲の前には、従来の勇猛の概念まで無力と化した。最後に勝敗を決するのは、鉄砲と雑兵の数と、それを巧みに使いこなせる指揮官の資質によると兼続は考えていた。これらを得ることができれば、兼続は居ながらにして勝利を手中に収めることができると確信していた。

ひとしきりこんな情報を交換し合ったあと、左近は話の核心に触れてきた。家康殲滅の軍議である。どのような戦略をとるか。兼続は左近を制して机にむかうと硯箱と紙を手許に運び、二人の前に置いて言った。

「策は一つしかござらぬ」

左近も大きくそれにうなずいた。

「たがいに書き申そう、いざ」

と兼続は左近にすすめた。さらばと会釈して左近がまず筆をとった。ついで兼続もそれにならった。書き終えたところで、二人はその紙を畳の上にひろげて見せた。

左近のものには、挟撃と書かれていた。挟み撃ちと書いたのは、兼続である。期せずして、二人の口から高笑いがもれた。

「上杉からことを起こし申そう」

笑いが終わると兼続がこう言い、左近がそれに応じた。

「承知つかまつった」

その軍略とはこうである。景勝が家康を挑発し会津で兵を挙げる。家康を東に引きつけておいて、西で三成が挙兵する。その結果、東と西の間、日本のどこかで、壮絶な殲滅戦が展開されるはずであった。おそらくこの戦いは日本を二分し、これまでの史上類のない、大会戦になることが予測された。二人は必勝を考えた。どう考えても、負ける戦いとは思えぬのである。このことは、まさに嵐の前の静けさであった。台風の目は、常に静かである。その中にも、無限の変化がうちに秘められていた。その変化が人々にはこわいのである。

帰国の前日、兼続は景勝とともに秀頼、三大老、四奉行に帰国の挨拶に回った。家康には、帰国の途中、景勝名代として兼続が伏見城に出向いた。これには本多正信が代わりに挨拶を受けた。正信は丁重に兼続を書院に通し、挨拶を返した。たがいに腹に一物

ある二人であるはずである。しかし二人はおくびにもそれを見せなかった。正信は細川幽斎(ゆうさい)の連句の会で兼続が座興につくった漢詩をよく記憶していて、それをほめた。正信ほどの人物になると、人間の表裏に精通していて、時に応じて相手を手玉に取ることなど平気でやってのけた。だが、兼続に対しては、兼続が並の武将と違うという意識を持っていた。文禄の役で渡鮮した時、人馬にふみにじられようとした古活字本をかき集めて大事に持ち帰ったということも、正信に好感を与えていた。文官に対する武将の軽視の反動としてそうなったのであろうか。いや、そうでもなさそうである。武将としても、りんとして一筋通った兼続に、正信が何かひかれるものを感じていたのは事実であった。兼続も、正信の賞讃を素直に受けた。単なる世辞でないことが、この年長者の声音と態度に感じられたからである。人は人を知ると言うが、この場合はまさにその通りであった。別れに正信は言葉を添えた。山城どの、わしにできることがあれば、何なりと申し出られよ。悪うはいたさぬ。兼続は謝して言った。佐渡どの(正信)、是非お願い申そう、その機会があれば——。

その夜、兼続は大津で一泊した。先に到着して本陣に挨拶を終わった時、兼続は思いもかけぬ人の来訪を受けた。藤原惺窩(せいか)である。

当時どの武将にも仕えず、またどの宗門にも属さず、野にあって学問だけで自己を堅持していたのは、惺窩一人であった。公卿の冷泉院為純の子として生まれ、播州三木郡細川村で産まれ育った。しかし年少にして、三木城主別所長治に攻められてその時、父為純、兄為勝、母、乳母とを失った。惺窩だけが戦火を逃れ、姫路にあった秀吉のもとに走り、自分が冷泉院家の者であることを告げ、高飛車に父と兄の仇を討ってほしいと迫った。この少年は、激しい気性をそのままむき出しにし、哀願することを知らなかったからである。秀吉は、この一途な少年をなぐさめはしたが、今は無理であると答えて、兵を動かさなかった。それなら頼まぬと少年は怒って席を立った。その足で京に入り、相国寺に籍を置いた。学問に励み、やがて寺を出、還俗して儒者と称した。彼の政治理念は、「仁」にあった。国政は民に対する仁を本に行なわねばならぬというのである。武力による天下支配に対する批判であった。それでいて彼が諸将に信望を得ることができたのは、不思議なことである。武将たちが来るべき太平の世に備えて、その施策を模索していたためであろうか。

学問好きの兼続が、この惺窩になみなみならぬ関心を抱いていたこともうなずける。兼続は諸将から惺窩の噂を聞くにつけ、常々一度は彼に会ってみたいものだと考えてい

た。彼の説く仁とはいかなるものか。それでそれが義とどのように関わりを持つものなのか。

その機会が得られず、兼続は三度、伏見の草庵に惺窩を訪ねたが、志を果たせずにいた。今日も正信と別れてから兼続は惺窩のもとに四度目の足を運んだ。しかし結果的には彼が留守で兼続を落胆させた。そのまま帰るのに心残りを感じ、これから帰国するが今宵は大津泊まりであることを門人に告げてこう言い置いた。先生によしなにお伝え下され。残念でござった。たった一つ、先生から御教示いただきたかったものを――。この惺窩がわざわざ山科(やましな)をぬけて兼続を追って来てくれたのである。

兼続は惺窩を迎えると彼を上座に据え、自分は下座に座った。そして改めて惺窩の来訪を謝した。

兼続のために、よくぞ夜道をお越し下された。なんのと惺窩は答えて、兼続にこうながした。

「私に問いただしき一事とは、何でござるか」

「されば、義についてでござる」

兼続は自分の本心を隠さなかった。この人になら打ち明けても大事はないと判断され

た。

「絶を継ぎ傾を扶くということは、義ではござりませぬか」

これは、家康を討つという謎かけである。惺窩がそれをどう解し、どう答えるか。それとも惺窩が兼続の真意を理解できぬか。惺窩には、ぴんと来た。やおら口を開きこう答えた。

「私には、お答えでき申さぬ。山城守どのの腹一つのことなれば――」

あとは兼続も無理には答えを求めなかった。間もなくして惺窩は帰った。一泊してはとすすめても、彼は応じなかった。本陣の軒下を出たところで、惺窩は天を仰ぎ、こう嘆息して言った。天心いまだ禍を悔いざるか。億兆の生霊再び塗炭の苦を受けんとす。惺窩には、血で血を洗う殺し合いが見えたに違いなかった。しかも大乱である。それに決まって捲きぞえを食うのが民衆である。時には家を焼かれ、田畑を荒され、軍費をしぼり取られ、自身も戦いにかり出された。惺窩はまたか、と思った。戦さ、戦さで天下太平の世は遠いのであろうか。

それなら惺窩は、兼続の義を否定したのであろうか。惺窩は、為政者の「明発教導」を認めていた。それに従わない者には、「小事」と「大事」をもってのぞむべしとした。

小事とは「刑罰」、大事とは「兵」――つまり討伐である。惺窩が兼続に答えられないと言ったのは、もっぱら政治的配慮によった。兼続を義とすれば、家康は不義となる。この戦さを兼続が、秀頼のためと言えば、家康もそう宣伝している。惺窩の十分とは言えぬ情報では、二人のうちいずれが真実であるのか、急には判別がつきかねた。

翌朝、惺窩が嘆息してはいた言葉を聞かされた兼続は、はき出すように言って、口を一の字に噛んだ。

「仁も義も、孔孟の道である。惺窩先生は、学者であっても、男児(だんじ)ではない」

女の意地

北政所（きたのまんどころ）は、秀吉が亡くなると髪をおろし尼姿になった。以後、高台院（こうだいいん）と称する。秀頼が大坂城に移って来たのを機に、彼女は本丸を秀頼に譲り、西丸に身を引いた。秀頼という後継者が大坂城に入るからには、そうするのが筋目と彼女は考えたからである。——もう秀吉の大坂城ではないのだ。はっきりした折目を持つ彼女には、そのことに浅い感傷はあっても、深い悲しみはなかった。むしろ腹にすえかねるのは淀君の態度である。

高台院は、彼女なりに秀頼が可愛かった。子はなさなくとも、子は育てた経験はある。幼いからこそ可愛いのであろうか。子供がいることでその場が明るくなった。彼女はその雰囲気が嫌いではなかった。彼女の性格は、すぐにその明るさにとけ込めた。秀吉在世中は、秀頼をその膝に抱くこともできた。秀頼も北政所を毛嫌いしなかった。子供は自分に好感を持っている人を不思議に選（え）り分けた。秀頼は高台院の顔と声をよく覚えていて、彼女を見ると声をあげ、両手を前に指し出した。抱いてくれというのだ。彼

女の秀頼に対する愛情は日ごとに増していった。

ところが秀頼が本丸に入って数日を過ぎても、彼女のいる西丸に淀君から何の挨拶もなかった。口さがない高台院づきの女たちは、早速そのことを咎めて、淀君を非難した。高台院様が本丸にそのまま住んでおられてもよいのに、それを秀頼様にお譲りなされた。しかしそれは淀君様にお譲りになられたのではない。太閤さまがお亡くなりになられると、すぐにこうだ。あんまりな仕打ちではないか。

世継ぎの子供を産んだか産まないかによって、妻の座の軽重を問われる時代であった。そのことで、高台院はどれほど悩んだことか。しかしその秀吉もいない現在となっては、そのことも過去のものとなった。そして彼女の心に残ったものは、最後まで自分を正室として立ててくれた秀吉の愛情である。淀君がいかにそれを望もうと、正室の座だけは、絶対にそれが不可能であった。それあるがため、さばさばと剃髪できた彼女でもあった。

侍女たちの告げ口を耳にすると、高台院はそれをたしなめ、尼が秀頼様のご機嫌伺いに参上いたしますと、淀君に告げさせた。とっさにこれならば角も立つまいと彼女が判断したからである。このような時でも、彼女の庶民的な気さくさがにじみ出ていた。

秀頼には、淀君のお局で会った。しばらく見ぬ間に、秀頼は大人びたと北政所は思った。頬がふくよかで、上背も大分伸びたようである。高台院が話しかければ、秀頼も答えたが、前のようには彼女の膝に抱きついて来ることはしなかった。彼女にとってはそれがいく分もの足りなさを感じさせられた。しかし明るく座持ちをする彼女の妨げにはならなかった。彼女は目を細めて、淀君にこう言った。秀頼様をよう育てられた。これで豊臣家も安泰じゃ。

これに対し淀君は、高台院からそういう言い方をされるのが嫌だった。彼女から言われるまでもなく、自分が産んで育てた秀頼である。秀頼の血筋がどうして悪いわけがあろう。立派に育つのが当然という意識である。口にこそ出さないが、北政所、あなたとは違いますと言いたかった。

淀君は、高台院の氏素性を軽視していた。自分の伯父織田信長の家来——それも下級武士の娘ではないか。世が世であれば、同席さえできぬ身分であったはずである。それが秀吉と結ばれたという理由だけで、今の地位にのし上がって来た。子が産めないくせに、そんなことがあってよいものだろうか。そればかりか北政所の官位は従一位であり、準三后の待遇を受け、豊臣吉子の名さえ下賜されている。淀君はわが身に比べて高

台院がねたましかった。ねたましいからこそ、彼女の言う通りにはなりたくなかった。彼女の言う通りになっていれば、いつまでたっても彼女に頭のあがらぬことになる。秀吉のいなくなった今となっては、秀頼を絶対に高台院に渡さぬぞと淀君は心に誓った。

――秀頼が手中にある限り、わらわの勝ちじゃ。

幼児とは現金なものである。幼児は、自分にかまってくれる時間の長い者になついていく。淀君はしっかり秀頼を自分の下に置き、公式の場以外は秀頼を高台院に会わせまいとした。淀君の意を汲み、淀君付の大蔵卿は忠実にそれを実行した。何かと理由をつけて、高台院にその機会を与えなかった。大蔵卿は大野治長の母である。秀頼が次第に高台院と会話を持たなくなったのは、秀頼の罪ではない。高台院と親しくすることが、母の機嫌を損ずることだと、幼児にもわかりかけてきた年齢だった。

こう露骨に示されては、高台院も秀頼に対する気持ちを変えざるを得なかった。――狭量なことを、と彼女は思った。自分が秀頼を取り上げようとする気持ちなどさらにない。現に秀頼を豊臣家の後継者として認めているではないか。それのみか、天下人たらしめようとして本丸も彼に与え、場合によっては後援者ともなろうとしているだけである。彼女にしてみれば、こと秀頼に関しては淀君から感謝を受けこそすれ、敬遠される

何ものもなかった。淀君がそうした気持ちならこちらでも出ようがあると、生来の勝ち気さが高台院の胸にむらむらとこみあげてきた。

そうした目で見ると、淀君の日常生活が鼻につき始めてきた。もともと大名育ちの淀君と高台院とでは、その気質においてまるで違っていた。淀君は周りから奉仕されることに慣れていたし、高台院は栄華に無条件には酔えず、いつもこれでよいのかと自分に問いかけていた。淀君の贅沢は以前にもまして一層輪をかけ、ことごとに高台院を無視しようとしているようにしか思えず、それを容認しているのが、また三成であり大野治長であると考えること自体が、彼女にとって決して気持ちのよいことではなかった。

しかし三成は、秀吉の生前と変わらぬ態度で高台院に接してくれた。ことを頼めばてきぱきと処理し、そつがなかった。一定の距離を置いて彼女に仕え、その分を越えることがないのである。秀頼様第一に考える律義さが、好ましいことには違いないが、彼女には心淋しいものに感じられた。それが自分の我がままとわかっていても、どうにもならぬのである。秀頼と聞けば、すぐ高慢な淀君の顔が彼女の目にちらついて離れなかった。彼女は、払っても払ってもそうなる自分に困惑していた。

三成と秀吉との出会いは、秀吉が浅井長政を亡ぼしてその所領を与えられ、羽柴筑前

守と称し琵琶湖東岸の長浜に居城を持った、天正二年（一五七四）のことであった。一日、秀吉は伊吹山麓に鷹狩りに出た。

途中秀吉はのどがかわき、大原観音寺に立ち寄り、茶を所望した。それに応じて稚小姓が、大ぶりな茶碗に抹茶を七、八分目、しかもぬるくたてて持って来た。秀吉は一気にそれを飲みほすと、もう一服と所望した。その稚小姓は再度茶をたて持って来たが、今度は抹茶も半分、湯かげんも前より少しあつめであった。そうなると秀吉にも感ずるところがあった。ためしにもう一服と頼みその結果を待った。そこへ稚小姓が持って来たのは、あつくたてた少量の茶に、小ぶりな茶碗であった。その稚小姓が三成であったことは言うまでもない。

三成の父正継（まさつぐ）は、近江北半分の守護京極（きょうごく）家の家臣の流れをくむ地侍である。大原観音寺には諸事見習いとして三成を稚小姓に出していた。三成はそこで秀吉に見出され、近侍となった。この三成伝記はあまりにも有名である。

以後、三成は奉行職に栄進するまで、軍監、行政官としてその手腕を発揮することになる。ある年の梅雨時、淀川の水かさが増し、堤防が決潰して大坂が水びたしになろうとした時があった。その危険を感じた秀吉は、京極口に新たな堤防を築くことを三成に

命じた。しかしそう命ぜられても、急に土俵を作れるものではなかった。三成はためらわず京極口の米倉を開かせ、その内にあった米俵を堤の切り口に運ばせ、それを山積させた。こうして三成は、難なく決潰を防ぎ止めることができた。そのあとがまた心憎い。水がひくと三成は河内の百姓たちを動員して土俵をつくらせ、前に積みあげた米俵と交換にこれをくれてやった。百姓たちが三成の命令一下、脇目もふらず働いたのは、言うまでもない。

文禄の朝鮮役では、船奉行の筆頭として大谷吉継(よしつぐ)らとともに、軍船約四万艘、兵力にして約二十万の大軍を朝鮮半島の各所に輸送することに成功している。これはまさに三成にとって大役であった。秀吉の名において召集されたとは言え、この大軍を動かすことは、三成にとって得がたい経験であった。

その三成が思わぬことから佐和山城に閉居させられたことを知った時、高台院は、今さらのように自分の本心が意識させられたように思われた。さすがに三成の無事にほっとするものを感じながらも、三成がそうなることを自分も望んでいたような、複雑さを味わっていた。淀君がどのように狼狽(ろうばい)しているだろうか。あの女のことだから冷然とふりすましているかも知れないとも思った。淀君の顔が、しばらく明滅して彼女の頭に浮

かんだ。

——清正も正則も、これでは子供の喧嘩だ。二人の気性はちっとも変わっていない。そこまでやる必要はなかったろうに——。この婆が一言相談を受ければ、悪うは取り計らわなかったものを——。

それから高台院は天を仰いだ。三成を助けたのは、内府というではないか。内府はなぜ三成を助けたのか。彼女はこの処置に素直に感謝すべきであろうが、家康に不気味なものを感じていた。その真意をつかめぬままに——。

ほどなくして、大坂城中に、淀君の芳(かんば)しからぬ風聞が立った。淀君が大野治長と通じているというのである。高台院はそれを聞くと眉をひそめはしたが、別に驚きはしなかった。それに今に始まったことではない、秀頼だって誰の種かわからないという気持ちだった。こうまで大きく噂にのぼるほど淀君が人もなげに振る舞うことが高台院にとっては問題なのである。修理の立場からすれば、淀君の不貞を諫めなければならないのに、その相手をつとめるとは何ごとであるか。これでは故太閤の面目はまるつぶれである。二人の仲が公然となっても修理がそれを恐れぬとすれば、そこにはきっと何かがある、何かが——。高台院は、自分の推量を一層確かなものとしてもう迷わなかった。

高台院は心を定めると、弓箴禅師に伺候を願った。弓箴は、彼女が剃髪した時の導師である。高台院という法名も、弓箴から戴いた。彼女は今までに幾度か彼の法話を聞かされていた。弓箴は釈迦の教えをこう説いた。人間の苦は、すべて人間の執着に起因するというのである。その執着の対象が権力であろうと財貨であろうと変わりはない。もちろん人間関係においてをやである。この人間の煩悩を解脱するためには、これを捨てるしかない。高台院は彼女なりにこう解していた。大坂城を捨てること。単純と言えば単純である。ほしい者にはくれてやるまでのこと。高台院ならではの発想である。しかしただではくれてやらぬぞ。それにはいささか条件がある。条件が――。そこにはまだ高台院の俗が残っていた。

弓箴の顔を見ると、高台院は気さくにこれを迎えて言った。

「いずれ尼も、故太閤殿下の後を追うことになりましょう。それまで、殿下の菩提を一人とむらいたいと思います。その節は、よろしゅう、おたのみいたします」

「その節はとおおせられますと、いつ」

と、思わず弓箴は問い返した。高台院の言っていることが、すぐには理解できなかったからである。弓箴には、先入観があった。高台院は、現在、将来とも、この大坂城に

おられる方だという先入観が――。高台院は軽く自分の本心を口にした。

「そう遠くではありません。京に移ります。三本木がよろし」

三本木には秀吉が以前住んでいた屋敷がそのままに残されていた。今度は弓箭も、しっかりと彼女の意図がわかった。彼女はまぎれもなく、この城を出ようとしているのである。高台院をとりまく周囲の事情が、すばやく弓箭の脳裏をかすめた。しかし弓箭もさすがに禅僧である。太閤の菩提なら、この城内でもできるとは言わなかった。高台院がここを出たいというなら、それもよい。何らそれを阻む理由はなかった。彼女が望むままにまかせればよいのである。「捨世情」は発心の第一条件である。どうして弓箭が高台院の決心を止めだてしようか。

弓箭が帰ると、高台院は一人思案に入った。京に入る日をいつにするか。周囲ではさぞかし驚きもし、止めだてもしよう。彼女は母親の目を盗んで悪さをしようとする幼児のように楽しげに見えた。しかしまたそれを喜ぶ人だっているはずである。そんな人たちは、勝手に喜ばしておけばよい。ここで高台院は幾分表情を固くした。喜ぶのは勝手だが、ちとお灸をすえてやらねば。今の淀君の我がままを押さえられる人は、そういなかった。いるとすれば、彼女の考えもそこに落ちた。家康である。家康ならばと彼女の

心は決まった。

高台院は浅野幸長を呼んで、仔細を話し、家康への使者に立つように命じた。幸長は妹の弥々と長政との間にできた子である。尼は西の丸を内府に献上しよう。口実を設けて来坂されるように——これが口上である。

そう命ぜられると、多感な幸長はこの伯母が可哀そうでならなかった。叱られるのを覚悟で直言した。そこまで淀君に遠慮することはないでしょう。故太閤と高台院様の築かれた城だ。もっとえばっていなされというのである。自分で自分の感情が高ぶり、痛烈に批判した。秀頼様だって、大野修理（治長）のお子だというではありませんか。

高台院は、それを否定もせず、肯定もしなかった。代わりに鋭く幸長に質問をあびせかけた。

「幸長どのは、それをどなたに聞かれた」

幸長は返事につまった。そうと開き直られると困るのである。

「もっぱらの噂でございまする」

「そなたは、そのような噂を信じて口にするのですか」

高台院は、幸長を別に問いつめるつもりはなかった。自然、意地悪な質問になってし

まった。内心では、幸長にそう言ってもらいたくてたまらなかったくせに――。それを取りすました顔で、幸長をいじめるのである。悪い女。――彼女はわれながら、そう思った。

「いつもはそうしません。ただ、これだけは別です」

幸長の返事は、弱々しかった。それを見てとると、彼女は言葉をやわらげ、幸長をさとすように言った。

「内府へのお使いは、幸長どのでなければなりません。他人ならば駄目です。そなたが行けば、内府も信じましょう。おわかりか。治部（三成）嫌いのそなたでなければかなわぬ仕事。尼の気持ちに偽りなきことを、内府によく伝えてたもれ」

高台院からの誘いは、家康の心を大いに動かした。もとより家康の望むところであった。しかし大坂城に入るとなると、重大な決意を必要とした。話としても、うますぎる話である。大坂城内に、どのような罠が仕掛けられているか。家康の側には、正信が影のようにひかえていた。

「佐渡（正信）、いかがいたしたものか」

正信の答えは、明快である。

「参られませ。ためらいは無用にございまするぞ」
「高台院が信じられるか」
「信じてあげなされ」
「そちはこともなげにそう言うが、殺されるのはわしじゃ」
「異なことを承ります。佐渡とて同じこと。お忘れなきように――」
こう答えはしたが、いざ大坂城に入るとなると、容易なことではないのである。それがわかっていながら口にせぬのが、正信である。それなりの準備と名目とがほしかった。城内の風紀を正すことも立派な名目である。しかし多くの供揃えを連れて行くには、もう一つ何かほしい。どうしてもないときには、ええままよ、つくるまでのことである。
正信は、家康に問われるまでもなく、高台院の真意をつかむことができた。あのお方なら、やると言われたら、きっとおやりになられるお方だ。それを信ずることができるかどうかは、それを受けとる側の器量というものである。またそれが首尾よく行くかどうかは天運による。そう信じ、あとは人事を尽くすだけである。高台院が本当のお味方ならば、万に一つも失敗はなかろうと正信は考えた。

慶長四年（一五九九）九月七日、家康は船で伏見をたち大坂に向かった。船の周辺はもとより、陸路も本多、井伊のおびただしい軍兵がそれに従った。その情報を得て、大坂城内も色めき立った。頼みとする大老、諸将が帰国して不在だったからである。

城内での家康の宿所は、三成の兄石田正澄の屋敷が与えられた。正澄が堺奉行として出所し不在だったからである。その屋敷に入ったその夜、正信は耳よりな口実を持ち込まれた。家康の登城を待って、これを討ち取ろうとする動きがあるというのである。その密告者は、増田長盛と長束正家であった。

長盛も正家も、根っからの武将ではなかった。その行政手腕を買われて、秀吉に登用された人物である。長盛は算盤で、正家は貨幣鋳造でその才能を発揮した。とかく行政官は、周囲の動きに敏感である。それだけの気くばりと用心深さがなければ、いつこの座を蹴落とされるかわからなかった。彼らには誰が権力者であるかを見極め判断することが巧みだった。その点に限って言えば、武将とても同じなのに、彼らの小利口さだけが蔑視の対象にされるのは、いかにもおかしなことであった。だが長盛らが家康に密告したということは、理由はどうあれつぎの支配者に家康を選んだことになる。せまりくる地震を前にした時、動物たちは本能的にその場を逃げ出すというが、長盛らの直観

力も、それに劣らぬ鋭いものがあった。

長盛らの説明によると、家康暗殺計画はつぎのようである。

家康が本丸の玄関をあがる時、浅野長政が家康の右手をとり自由を奪う。そこをすかさず土方雄久と大野治長が家康の胸を刺すというのである。そしてその後がある。それを背後から指示したのが、前田利長だと言った。

それを聞かされて、正信は喜んだ。これにまさる口実はない。どこの世界にも二股者はいるものだ。忠実めかして、仲間を売るか。正信はことさらに顔面に渋を作って、二人に礼をのべた。よくぞお知らせ下された。知らなければ、とんだ大事にいたるところでござった。二人も喜色をこらえて、目と目を合わせた。

家康の本丸登城は、厳重な警戒のもとに行なわれた。本多正信、本多忠勝、井伊直政、榊原康政の四将が油断なく目を光らせてそのあとに従った。浅野長政、土方雄久、大野治長、片桐且元ら側近が出迎え、長政が小腰をかがめて家康に挨拶しようとするのを、家康はじろりとにらみつけそれを制止した。浅野弾正、挨拶にはおよばぬ、手のうちは見えた。追って沙汰を待てと言い捨てて、ずいと奥に足を進めた。

家康のこの態度に、浅野長政は合点がいかなかった。どうして自分が家康の怒りをか

ったのか。家康に好意こそ持て、逆意を持ったことのない自分である。考えれば考える程、長政は判断に苦しむばかりであった。とりたてて才覚のある方ではなく、高台院に繋がる縁で今の地位にあり、御用大事と勤めあげて来たこの老人には、こうした時にどう対処すべきかその方策に困った。思いあまった末、尋ねる先はやはり高台院のところしかなかった。

今日の玄関での出来事は、いち早く高台院にも知らされていた。聞けば、家康暗殺の密告者は、長盛と正家というではないか。土方勘兵衛や大野治長ならばそれをやりかねまい。しかし浅野長政がそれに一口噛んでいるとは意外だった。まさかという疑問が先に立ち、意外だった。その黒幕が前田利長だということについては、やや神経をこわばらせた。それが利長の本心からか。

長政の伺候は、まさに時宜を得ていた。長政のしょげかえって答弁する顔を見て、高台院は自分の直観の正しさをはっきりと確認できた。長政にそんな度胸があるくらいなら、今後大いに見直してやってもよい。しかしまた自分の側から自分の身内が一人去って行くことは、彼女にとっても淋しいことであった。

長政は一通り答弁を終えたあとで、家康への取り成しを高台院に願い出た。自分はま

ったく関わりないことであると。それに対し高台院は気の毒げにそれを拒絶した。
「わらわが願い出たとて、内府は取りあげになるまいの」
「なぜにござりまする、なぜに――」
長政の顔に絶望が走った。
「そなたが奉行職筆頭におるからじゃ。職を去ればそれ以上の追及もあるまいと思う。前田家とても同じこと。加賀（利家）が大老であったばかりに、内府のいやがらせは続こう。どう決着をつけるか、芳春院（利家夫人の松）も難儀なことよ」
高台院からこうまで言われて、長政はもう観念するしかなかった。あとは家康から糾弾された時、無実を抗弁するだけである。
高台院が、突如西の丸退去を申し渡して大坂城を出たのは、それから数日後のことである。このことが城内の人々を驚かせると同時に、家康が入れ替わりに西の丸に入った。高台院様のご命令によりという触れ込みである。あまりの素早さに人々はただ唖然とするばかりだった。

挑発

家康暗殺のあらぬ疑いかけられて、前田家の家中は困惑した。それに西の丸占拠、前田征伐の報がもたらされると、その困惑が激昂に変わった。上杉景勝、毛利輝元、宇喜多秀家の大老はそれぞれ帰国して大坂城に不在であり、利長もまた加賀の金沢にあった。異口同音に前田家の家臣の口をついて出る非難は、内府横暴である。不在をよいことに、大坂城をかき乱しているというのである。

重臣会議の席上で、最もそのことを激しく非難したのが、利長にほかならなかった。合議をかたく誓約しておりながら、こともなげにそれを破っていく家康の独断専行が、利長を怒らせたからである。さすがに利家の血は、利長にも流れていた。あらぬ疑いをかけられたのを幸いとして一戦も辞せずとさえ言い切ったのである。

それをやんわりと受けとめたのが、家老の横山長知である。殿がそのお気持ちなら、われらも内府と戦いましょう。しかし前田が暗殺などの姑息な手段をろうしたと思われることは心外でござる。まずはその疑いを解き、その上で一戦いたすも遅くはございま

せん。拙者が使者に立ちますので、しばしご猶予を下さりませ。そう説かれて、利長も一理あるとしてそれを許した。

長知は急ぎ大坂城におもむき、家康に会おうとした。しかし家康には会えず、本多正信がその相手をつとめた。正信は長知の弁明をふんふんと聞いた。時折質問を交え、いわゆる聞き上手である。その間利長を責める言葉を一言もはかなかった。長知にしゃべるだけしゃべらせておいて、したたかなこの老人は、やんわりとこう切り出した。由来前田家に対して、内府はいささかも怨恨はない。とかく周りでいろいろ取りざたされて、そこもとも大いに迷惑でござろう。国をあずかる重職として、さぞかし心痛のことも推察いたす。この疑念をはらすためにも、前田、徳川両家をより強い絆で結ばれてはいかがかな、と言って間を置いた。その方策とは、と長知はせき込んで尋ねた。芳春院さまに江戸入りしていただき、中納言（秀忠）さま二つの姫をご舎弟利常さまに嫁がせることでござる。それを聞くと長知は愕然とした。こともあろうに利長の母芳春院を江戸に人質に差し出せとは——。長知は、正信の言葉にはっきりと家康の意思を読んだ。正信一存で言える言葉ではなかった。家康とは協議の上にも協議のことであろう。利長ならずとも、長知は一戦を覚悟した。ものごとには限度がある、限度が——。

長知は今すぐにでも、さらりとそう言ってのける正信をたたき斬ってやりたかった。

長知の復命は、前田家の家中を結束させた。芳春院の人質をこばめば、そうするしかなかった。前田家の総力を結集して、家康と戦うだけである。それを知って心を痛めたのが、芳春院である。彼女は大坂屋敷にいて彼女なりに考えぬいた。前田家の浮沈に関わる大事である。彼女はまず利長を殺したくなかった。ついで彼女はもう血を見たくなかった。自分さえ犠牲になればすむことではないか。内府が自分を殺すと言っているのではない。自分の娘を利常に与えるとさえ言っている。いわば交換条件だ。前田家安泰のためにも、考えようによっては悪くはないようである。自分の生命と利長の生命とを比べた時、自分がいつまでも利長と一緒におれるわけではない。この長からぬ生命を利長のために使うもよかろうと。

ようやく心が定まると、芳春院は自分の決意を書状に託してこう書いた。母は江戸へ行こうと。しかし利長がすぐにそれに同意するとも考えられなかったので、一つの問いを利長に投げかけた。高台院様が何故に内府に大坂城の西の丸を与えられたか。高台院様のお心になってそれを考えてみよ。それが解ければ、利長も母の江戸行きをあえて反対はできまい。今は前田家の浮沈にかかわる大事な時期。血気にかられず冷静に判断さ

れよと。

利長は芳春院から、この書状を受けると、必死に考えた。高台院については母から常々こう聞かされていた。織田信長の家中にあって秀吉が木下藤吉郎と呼ばれていた時代、父利家は藤吉郎の上司であり住まいも近かった。藤吉郎に高台院を取りもったのも、利家であり芳春院である。芳春院ら二人は気があい、両家の親交が続いた。利家が茶坊主拾阿弥を斬り織田家を一時追放された時も、米や味噌を届けてくれたのが高台院である。やがて信長の勘気が解けたが、それには秀吉のとりなしが与かって力となった。

子供のない高台院にお豪を養女にと望まれて、まだ乳離れもしない幼児を手放す気になったのも、相手が高台院なればこそである。そのお豪も今は立派に成人し、宇喜多秀家のもとにある。利長も高台院には可愛がられよくしてもらった記憶が今に消えてはいなかった。そんな利長には、高台院が家康から大坂城を追い出されたとしか考えられなかったのである。

利長には、もうそれ以上の発想は浮かばなかった。それは無理からぬことで、利長の頭には家康と戦おうとすることだけでいっぱいだった。ただいざ戦うとなれば、芳春院をいかにして大坂屋敷から脱出させるか、である。このことは万に一つも失敗が許され

ないので、利長にはむしろその方が心配だった。

そんな利長の気持ちを見すかすように、再度利長のもとに芳春院からの書状が届いた。それは自分が出した問いかけに対する回答でもあった。

芳春院はその中でこう断定していた。高台院様は、豊臣家を見捨てられた。そうでなければ、大坂城を出られるはずがない。高台院様でさえそうならば、前田家もどうして豊臣家に義理だてする必要があろうか。前田家は、前田家の安泰をはかるのが第一、と結んであった。

それでも、芳春院の江戸行きが決定するまでには、なおも時間を要した。迷いに迷ったあげく、利長も芳春院の執念に負けた。後世の史家は、この時の前田の動きをこう評している。もし利長が戦端を開けば、家康は最大のピンチに立たされたのではなかろうかと。前田と石田とでは信望が違う。本当に天下を二分する戦いになったのではなかろうか。細川忠興（ただおき）なども、そうなればさぞかし去来に苦しんだことであろう。忠興もその時、家康暗殺に連座して、疑惑の人であった。忠隆の妻は、ことわるまでもなく利家の娘千世（ちとせ）である。疑惑を受けると、忠興はすぐ家老松井康之を大坂につかわして、弁明に努めさせた。忠興の父幽斎（ゆうさい）、舎弟興元（おきもと）、康之（やすゆき）が連署して誓紙を差し出し、家康に対し異

心のない証とさえしている。

浅野長政、土方雄久、大野治長の処罰は、慶長四年（一五九九）十月のことである。長政はその領国の甲斐に蟄居し、雄久は常陸の佐竹義宣に、治長は下野の結城秀康（家康の次男）にそれぞれお預けとなった。それ以後の家康は、文字通り我が物顔に大坂城に君臨した。慶長五年正月には、秀頼と同じ作法で、元旦から五日まで西の丸大広間で諸将を閲見した。芳春院が江戸へおもむいたのはその年の五月、梅雨あけの頃であった。こうして前田封じ込めに予定通りの成功を収めた正信は、間断なくその間も工作を続けていた。次の目標は、会津の上杉景勝である。正信のとった常套手段は、まず難癖をつけ、威嚇し、条件をつけて、その幕下におくという方法である。ただ景勝ともなれば、利長のようにはいかぬことを正信も家康も覚悟していた。正信はさすがに用心深くそのことで家康に念を押した。上様には十分お覚悟あってのことでございましょうな。家康はためらいなくうなずいた。慶長五年正月、新年の賀礼に景勝は重臣藤田信吉を代理として上坂させた。信吉は秀頼に拝謁し、ついで家康に賀をのべた。しかし家康はこの祝賀を喜ばなかった。なぜ中納言（景勝）がじきじき上坂せぬかと暗にそれをなじった。

そのあと、帰りかける信吉を引きとめてこれを歓待したのが、正信である。時服と金銀を贈り、使者の労をねぎらった。正信の腹は決まっていた。裏切りまでは期待できぬとしても、上杉家の中に親徳川派を作っておくことは決して悪いことではなかった。正信は気味悪いほど信吉に好意を見せ、露骨な言い回しは避けながらも、時流が徳川家にあることを誇示して暗に上杉離反をすすめてみた。上様にご助力下さることこそ、天下泰平のためつながるものとも言った。それを聞かされて、信吉の臭覚にぞくりと来た。上様という呼び名は何だ。天下泰平のためとは何だ。ひょっとすると、上杉も危ないぞ。

信吉は、譜代の上杉の家臣ではなかった。武田家に仕え、滅亡後、景勝に頼って来て、会津の大森城主となった。戦いが上手だったのが、景勝に買われた。何せ佐渡一国を平定した功績は大きかった。

帰国の途中、信吉は種々思案した。景勝が家康と一戦した場合、家康に勝てるか。むざと負けようとは思えないが、どうしても勝ちが読めないのである。戦いは長期になると見た。そうなれば身代の大小がものを言う。徳川の関東二百五十五万石と上杉の会津の百二十万石ではその持久力が違う。それに両軍に味方する諸将の兵力の差である。大坂城での家康の威光からすれば、家康に味方するものが、景勝に倍するように信吉には

思えてならなかった。

景勝に祝賀の報告をすませたあとで、信吉は、私見をのべた。天下の実権はすでに内府の手の内にあるように見えまする。殿にも、至急、上坂なされてはいかがでしょう。お家の大事にいたらぬうちに――。

上座には景勝がいた。下段には、一人兼続がいた。景勝も無言なら、兼続も無言だった。信吉は、自分の言葉の反応を敏感に感じ取っていた。二人はそれが気にくわぬのである。信吉はその場にいたたまれぬものを感じた。何でもよい、二人のうち誰かから、一言言ってほしかった。

「ご苦労であった」

景勝がこう口を切ると、兼続も言葉を続けた。

「能登（信吉）どの。大坂表では上杉ご謀反でさぞかし騒がしかったことでござろう。天の声、地の利、人の和われにあり。期待に添わずばなるまいのう」

そう言って兼続は笑った。信吉は仕方なしにうなずいても笑えなかった。それに反論しようとして止めた。表情がこわばり厳しいものになった。

信吉が退出すると、景勝はそれを待っていたように言った。

「内府め、増長しおる。上様と呼ばせるとは何ごとであるか」
「もう天下人のつもりでしょう。周りの諸将がいけない。内府を持ちあげすぎる。能登も、内府の毒気にあてられた一人でしょう。早晩、尻尾を出したその時は、殿」
「そちに委す」
主従の意見は一致した。
景勝挙兵の情報は、二つの経路から正信に入手されていた。
羽後（秋田県）角舘の少年城主、戸沢政盛は、帰国の途中、会津の上杉領内を通過した。その時政盛はつぎのことを目撃した。峠には石材が山積みにされていた。道路拡幅工事で、おびただしい数の人夫が動員されていた。また米俵を積んだ車が、延々と会津へ向かっていた。これはどうしたことだと政盛が供回りに尋ねると、気のきいた者が声をひそめて、戦さ仕度と見うけられますと答えた。この少年城主はそれに対し敏感に対応した。内府大事として、上方の家康のもとに急使を出した。大坂出発に際し政盛は家康から親しく声をかけられ感激していたので、家康はあっても景勝は眼中になかった。正信はこの報告を受けると、政盛の配慮をねんごろに謝した。辺境の城主が、そこまでして実意を見せるからには、それを信じてよいと考えていた。

もう一つの情報も、政盛のもたらしたものとほぼ内容を同じくしていた。それは、景勝の旧領地越後の堀秀治からの報告である。秀治は父久太郎の功によって春日山城が与えられ、三十三万石に加増された。秀治は景勝を快く思わなかった。それは景勝というより兼続によってなされたものであるが、上杉家移封に際して、半年分の上納米を越後から会津に持ち運んで来た。秀治にはそれが困るのである。使いを出して秀治は、領米の返還を求めてきた。しかし兼続はその請求を一蹴して応じなかった。これはどこの領主もお国替えの時にやっていることである。上杉だけに限ったことではない。堀家においてもなされたがよかろうと。

それだけに秀治の上杉情報は詳しく、悪意に満ちたものであった。多くの牢人を召し抱えているというのは事実その通りで、山上道及、上泉泰綱、前田利太、小幡将監、岡野左内、斎道二、車丹波などの名が見える。また雪のとけぬ二月から工事を起こして、会津若松西方の神指原に八万の人夫を使って新城を建設しようとしていた。その規模は東西五キロにおよぶものであった。会津の若松城の修復と会津七口の防備にはとくに意を注ぎ万全を期した。会津七口とはつぎのようである。

南山口、背炙越口、信夫口、米沢口、仙道又、津川口、そして越後口である。

新規召し抱えの者の中で異色なのは、前田慶次郎利太（又は慶次）である。利家の兄利久の子であった。剣の腕も立つし文学にも通じていた。その他国風、謡曲、舞踊、囲碁、挿花、点茶とそのいずれも一芸に達していた。「性諧謔（かいぎゃく）を好みて、言行常に人の意表に出でたり」と評されているから、ちょっとばかり悪戯が過ぎた。

年少の頃から利家に仕え戦功をあげたが、京都で利太の名が知られるようになったのは、松風と名づけられた名馬のためである。彼はこの名馬に、烏帽子（えぼし）、赤衣（あかえ）、赤袴（ばかま）をつけて日に一度は、下僕に命じて加茂川へ水飲みにやらせた。馬もよし、この異様な風体は、たちまち京の都の人目をひいた。人々は足を止めて怪しみ、その馬の持ち主の名を尋ねた。その時、下僕は胸をはり、つぎの謡をもってそれに答えた。

赤いちょっかい革袴（ばかま）
鳥のとさかに立烏帽子（えぼし）
前田慶次（利太）が馬にて候（そうろう）

もちろんこれは利太の差し金である。

利家はこのようなことを好まなかった。利太を呼び出して口やかましく小言を言った。この件だけでなく、ことごとに小言を言われ通しで利太も厭気がさしていたので、ぷいと前田家を脱藩した。そして頼ったのが、兼続のもとである。兼続は見所のある男と思っていたので景勝に推挙し、利太は五千石で召し抱えられた。

景勝にお目見えする時がまた振るっている。頭髪を刈りあげ、法衣をつけて目通りした。それを見て、景勝はなぜかと一言も尋ねなかった。ただ、たのもしげな男よと言った。それを聞いた利太は、景勝はそこが利家と違うと思った。

出仕するうちに、利太に追々知り合いも出来た。一夜、志賀与惣右衛門、栗田美濃らと飲み交わすうちに、たまたま林泉寺の丸山和尚が話題になった。林泉寺は上杉家の帰依する名刹である。その和尚ともなれば、格式も高く学識も豊かだった。時の住持は、十四世万安大悦禅師である。その万安大悦がいかにも高慢そうで、小面憎いというのである。和尚を張り倒したらさぞかし気持ちがよかろうと一人が言うと、それに調子を合わせるように、よし、わしがやってみよう、簡単だと言い出した者がある。利太であった。冗談かと思えばそうでもないらしい。できるわけがないし、また殴ったあとがことだという気持ちがあるから、皆は利太を止めた。強がりはよされい。座興じゃ、座興じ

ゃと。しかし利太は引き下がらなかった。貴公らに迷惑をかけぬ、わしには策があると大笑した。

数日後、利太が実際にそれをやってのけたと聞かされると、その場に居合わせた者は唖然とした。利太は和尚を訪ねると、囲碁を所望した。碁好きの和尚はすぐにそれに応じた。和尚もなかなかの名手だった。対局に先だって利太はさらに注文をつけた。勝った者が負けた者の顔を殴るという趣向はいかがかな。はじめ和尚はそれに難色を示した。桑門で人を打つというのはどうしたものかと。それに対し、利太はこう弁じた。敗けるということは、大悟徹底しないことでござる。喝を入れるこそ、求道の道にかなうものと説いた。これには和尚も不本意ながら同意させられた。

一局は利太が負けた。利太は早速頭を出し約束の実行を迫った。いざお殴り下され。これにはその要なしとして和尚は拒んだ。しかしなおも利太が食いさがって頼むので、和尚は人差し指で利太の頬をはじいた。利太は大いにそれを謝した。二局目は利太が勝った。和尚もいざ、約束の通りにと首をのばした。利太も再三それを辞退したが、和尚がそれに応ずるはずがなかった。と、御免と言いざま、利太の右手が和尚の左頬にぱしっと走った。しかし万安大悦も禅僧だった。それに対しいささかも動ずる気配がなかっ

たという。

月が改まって三月十三日、景勝は領内の各城主を若松城に召集し、謙信の二十三回忌の法要を大々的に挙行した。それに参集した諸将の主なるものは、つぎの顔ぶれである。

小峰（現白河）城主安田順易
白石城主　甘糟景継
福島城主　岩井信能
森山城主　本庄繁長
梁川城主　須田長義
猪苗代城主　水原親憲
金山城主　色部光義
鮎貝城主　中条藤賢
藤島城主　木戸源斎
二本松城主　下条駿河守

大宝寺（現鶴岡）城主　志田義秀
大浦城主　松本信濃守
津川城主　鮎川帯刀
須賀川城主　千坂対島守
酒田城主　武藤光安
中山城主　横田旨俊

この法要が済むと、景勝は自分の決意を老臣、宿将に披瀝した。秀頼様をないがしろにしている家康を討つというのである。父謙信の御霊も照覧あれ。これが上杉の義だ。

景勝は多くを語らなかった。佩刀のつかを左手で握りしめ、右肩を心持ち前にした景勝の身体に鬼気がみなぎった。「毘」の大書を後にしたその姿はりんとして、軍神もかくやと思わせるものがあった。

続いて兼続が立ちあがり、とうとうと軍略を述べた。革籠原に家康を引き寄せておいて三方からそれを攻撃する。それを機に三成が背後から挙兵するというのである。それを高ぶりも見せずてらいもなく、兼続は弁説もさわやかに言ってのけた。そして最後に

兼続はきっと言葉を改め、こう結んだ。

「毘」とともにいざ戦わん。諸将は、おうとそれに応じた。

その頃、南山口をめざして急ぐ行列があった。侍、女子供、それに荷駄とその組み合わせが変化に富んでいた。大森城主藤田信吉の一行である。それに同調したのが、栗田刑部とその家来である。もちろん信吉も景勝の召集を受けた。それが法要に名をかりた軍議であることは信吉にもすでにわかっていた。しかし信吉は若松城に伺候するかわりに、会津逃亡の道を選んだ。大森城を十一日に出て、一路南山口の江戸口へ向かった。

信吉国抜けの知らせは、十二日夜、兼続の耳に入った。兼続はただちに七口の閉鎖を命じ、岩井信能に追撃させた。信能の兵は馬にひとむち当てて峠に向かった。

この騎馬隊は、坂道で信吉に追いついた。このままでは逃げ切れぬと判断して、栗田刑部は、斬り死にを覚悟した。信吉に早う落ちられよとすすめると、坂を逆に下って騎馬隊に向かって行った。刑部とて名うての豪の者である。約小半刻を持ちこたえ、騎馬隊とわたり合ったが、ついに力尽きて屍をその場にさらした。こうして信吉はからくも、会津脱出に成功したのである。

江戸では秀忠に景勝謀反を訴え、信吉はその足で大坂城の家康のもとに伺候して、こ

のことを報告した。元来、家康ならずとも、裏切り者は好まなかった。たとえ家康のために旧主を裏切った者も――。一時的にそれを過ごしても、のちしかるべき処置をとっている。信吉はのち下野国西方、十一万五千石の譜代大名に取り立てられたが、彼が死去するにおよんで嗣子なきを理由として改易となっている。しかし今、信吉を得たということは、家康にとって幸いだった。家康は信吉から上杉の人脈、戦略上の要所、戦法などにわたって、根掘り葉掘り問いただし、得るところがあるようだった。家康はいやでも兼続の存在を、意識しないわけにはいかなかった。家康は三成の戦略はみくびっていたが、兼続となるとこれは容易でないと思い知らされた。そうでなくとも上杉の士風には、謙信以来妙に生死を超越したものがあった。それと兼続の軍略とが一体となった時、その戦力がどのようなものになるか、家康にも測り知れないものが感じられた。山城（兼続）とは一口に言ってどんな男かと家康はこの裏切り者に尋ねた。この裏切り者はそれに対し最大の讃辞をもって答えた。山城が主で、中納言（景勝）が従でしたら、天下は山城の手に落ちたかも知れませぬと。

直江状

慶長五年（一六〇〇）四月一日、家康は毛利輝元、宇喜多秀家の二大老と相談し、その臣伊奈図書と増田長盛の臣河村長門を会津につかわし、景勝の上坂をうながし、誓紙の提出を求めた。その時、特に兼続と交友の深かった相国寺の僧承兌の書を添え兼続に差し出した。その書にはこう書かれてあった。中納言（景勝）は多くの過失を犯しておられる。それを犯させた責任は、山城どのにありと内府がお考えのようであるが、それに相違ないか。つまりはすべてを兼続のせいにして善処してほしいと言うにあった。その罪状とは――。それは伊奈図書と河村長門が、景勝に詰問した通りのものであった。

一、中納言（景勝）に異心なくば、内府に起請文を提出せよ。
一、中納言が上坂のうえ内府に申し開きすれば、それで済むことではないか。
一、堀秀治の訴えが誤りであれば、いかようにも弁解せよ。
一、加賀の利長に謀反の風説があったが、あえてこれをとがめなかった（と例を挙

げ、言外に人質を出すようにとにおわした)。
一、ともあれ中納言が内府と直々話し合うことが上策。
一、朝鮮再三出兵のこともあるので、中納言には至急上坂されたい。

図書、長門をして家康が言わしめたことは、ざっとこのようなものである。しかも景勝と家康の間であるから、ことさらに文書にせず、口上をもって申し上げるというのが、表面上の理由であった。しかし真のねらいは、兼続にあった。主従の分離である。承兌の書状を準備し、そのあて名を兼続にしたのには、十分にその理由があったのである。これは正信の配慮であり、承兌が片棒をかついだことになる。

承兌は相国寺塔頭、豊光寺の住持である。兼続とは肝胆(かんたん)相照らす仲であることは先に述べた。承兌は、兼続を殺すことは望まなかった。正信から説かれて、すぐその気になった。兼続のためなら一筆ふるおう。しかしその上書は、もちろん高飛車であってはならなかった。かと言って泣き落としでもいけない。しかも今までの友誼(ゆうぎ)を損なうことは、絶対に避けなければならなかった。ことの重大さを何とか知らせたいものと、一語一句に細心の注意が払われた。拙僧が今さらくどくど申し上げる必要はなかろうが、上

杉家の興廃が山城どのの一存にかかっているので、くれぐれもご熟慮あってしかるべしと結んだ。

この詰問使を迎えるにあたって、景勝は兼続に諮問した。どう応じればよいか。兼続がそれに答えて言うには、殿の存念のままになされませ。あとは山城が、いかようにもしめくくりましょうと答えた。

伊奈図書と河村長門は、語気も鋭く景勝に迫ったが、景勝は動じなかった。今にはじまったことではないが、ただでさえ、景勝の言動は、多分に相手の調子を狂わせるものを含んでいた。それを知らぬ者は、景勝の真意がつかめず困惑し、これを恐れた。図書らも景勝のそれにひっかかった。すぐに返事がないのである。景勝はただ黙ってじっと彼らを見ていた。焦点の定まらぬ目である。図書はいらだち、たまりかねて、中納言さまご返事をと声をかけた。それに対し景勝はやおら姿勢をただし答えた。

「われにいささかも逆意はない」

やはり景勝は、聞くべきことは聞いていたのである。

「何故に景勝が、故太閤殿下のご遺志に逆き奉る必要があろうか。移封後三年間は、治政に専念せよとは、わが意思ではない。これも故殿下のご命令である。それを誰ぞ、讒

訴する者でもあるのか」

　これには図書も困った。密告者の名を出したくなかったが、成り行きでその名を言わざるを得なかった。堀直政であることを告げると、

「ほほお。監物どのとな」

　景勝は別に表情もかえず、けろりとして言葉をついだ。

「疑いの義あれば、じかに景勝のもとに参り尋ねられればよいものを――。得心の行くまで申しきかせいたそう」

　そうできないことを承知の上での発言であった。それを認めては、何のために自分がわざわざ会津まで出向いたのか意味がなかった。図書も必死だった。図書は、しどろもどろながら、なおも食い下がった。

「これはしたり、中納言様。理由はどのようにおわそうと、それほどまでに上坂をこばまれますことは、図書納得が参りませぬ。御身は大老の要職におわすのに、天下の政務をないがしろにしてよろしいものでしょうか。わが主内府も、いたくそのことを心痛でござりまする」

　それを聞くと、景勝はにやっと笑いをもらした。景勝はついぞ笑わない人である。そ

の人が笑った。近侍の者は、その笑いにむしろすごみを感じた。

「いや、その必要はない。景勝、内府どのと朝鮮再三出兵のことなど、語ろうとも思わぬ。内府どのとて、そのことは、とくとご存知でござろう。遠路、ご苦労でござった」

もはや景勝に妥協の気持ちのないことは、その言葉から察せられた。話がことごとにくい違い、よそよそしさが目立つのである。図書がこれで止むなく席を立とうとするのを、それを押し止めて兼続がにこやかに言った。それがしにもいささか存念がござれば、承兌どのに一筆いたそう。一両日の猶予を下されと。図書らもそれに反対する理由はなかった。

兼続の返書の構想は、たちどころにできていた。今まで心に温めていたことを、承兌の書面の順序立てに従ってそのまま書けば、それでこと足りた。その相手はもとより家康である。一つ言いたいことを思う存分書かしていただこう。家康ならば、相手にとって不足はなかった。

まず、ずぶり筆に墨を含ませて、こう書いた。景勝と兼続の意見を若輩の雑説と規定し、勝手なごたくを述べるから、ようく覚し召されよと認めた。時に景勝四十六歳、兼続四十一歳で、決して二人とも若輩とは言えなかった。ついで上坂が延び延びになって

いる理由を述べ、これを不審とする者こそ、かえって不審ではないかと逆襲に転じた。起請文については、数通の起請文をすでに提出している。その上またどうして提出する必要があるのか。もし前の起請文を反古なりとせば、それを反古としたのは一体誰であるのか、と痛烈である。続いて兼続は、こう慨嘆してみせた。権力者の前に、「朝令暮改」するものの何と多いことか。義はどこに行ったのか。このことは、暗に家康の前で右顧左眄する者をなじったものだ。こう前置きした上で、景勝を讒訴した者にその正否をただしもせず、一人景勝のみを糾明するというのは、片手落ちな仕打ちではないのか、と所信を述べた。

前田利長の処置については、皮肉たっぷりに表現した。さすが内府のご威光とほめあげた後、しかし前田は前田、上杉は上杉と一線を画した。上杉は前田と違うぞと決意のほどを見せたわけである。

弓、矢、鉄砲を集めているについては、女々しくこれを弁解しようとはしなかった。上方武士なら、茶碗、炭取、ふくべなど人たらしの道具を集めることを趣味としておられるようであるが、田舎武士とはさてもさても武骨な者よと自嘲してみせた。

道路造成、橋造りについては、よくもまあ、これほどまでにこねまわせると思われる

ほど理屈をこねて相手を愚弄した。道を造り橋を造るのは、交通の便のためである。越後におった時も工事を起こしてきたが、それでもまだ十分とは言えず、工事をし残してきた。そのことについては、堀直政もご存知のはずである。道造りは、景勝領内に止まらず、伊達政宗領内、最上義光領内、その他由利、仙北といずれの領内においてもやっていることで、それにことさら恐れを抱くのは、一人直政だけではなかろうか。よくよく弓矢の道を知らぬ、無分別者と言うべきであろう。もし景勝に逆心があれば、こうはしない。境界、堀切、道路をふさぎ、防戦の準備にとりかかると思われるが、いかが。道が十方に通じているゆえ、これを防ぐのはなかなか容易なことではない。出兵の際にしても、一口ならいざ知らず、二口に相当の軍勢を派遣することは困難である。その兵力は半減する。この上疑念あれば、御使者から直々見分していただくしかない。それならば合点のいかれることと思う。

朝鮮再三出兵については、一笑に付した。家康が朝鮮出兵に一番反対していたことを、兼続はよく知っていたからである。そんなことがあってたまるか。虚説にきまっている。

こう述べたあとで、兼続は開き直って、景勝が間違っているのか、家康が間違ってい

るのか、天下の公論によって決しようと書いた。

景勝罷違候か、内府様御表裏歟、世上の沙汰次第に候

これは、宣戦布告だ。兼続は、手中の球を家康に投げつけた。しかし再度景勝に逆心なしとし、当方からは手出しはしないとことわった後で、それでももし討伐の出師を出されれば、当方とてお相手いたしましょうと、そのことを言外に匂わせた。そして追伸として書き加えたのが、つぎの一文である。

内府様（家康）又は中納言様（秀忠）御下向之由候間、万端御下向次第可レ仕候

これが後世に伝わる「直江状」である。兼続はこれを書き終えると、何もかも言い尽くしたということで、ある満足感を覚えていた。これでもう後戻りできないという悲愴感はなかった。ただこれでよいのだという気持ちはあった。——ああ、書き終えた。あ

とは家康がどうでるか。

これだけ言いたいことを言い、相手を翻弄したのに、皮肉にもこの「直江状」が兼続を救うことになった。その時には、もちろん兼続もそのことを知るよしもなかった。「直江状」の「直江状」たる所以は、実にそこにある。

日ならずして、この書状は家康の手に渡った。家康にしてみれば、これほど無礼な書状は、そうざらにお目にかかれるものではなかった。読み進むうちに家康は、怒りと、またそれと違った興奮とを覚えてきた。兼続の文体の持つ、あやしい魅力がぐいぐいと家康の脳裏を駈けめぐるのである。それに長い長い書状であった。家康は驚きもし、あきれもした。それらがからみ合って、家康の気持ちを一層複雑なものにしていた。読み終わって家康は、正信にそれを差し出し、こう言った。

「山城め、ようも書いたわ」

「まことに」

正信もその書状を手に取ると、じっくり時間をかけてそれに目を通していた。一言半句も見落としせぬように——。正信の眉間に深いしわが寄せられたと見る間に、やがてそれも消えた。

「なかなかの男でござりまするな」

読み終わったあとの正信の第一声はこれである。このしたたかな老人の心をゆさぶる何かがあったことは、はずんだようなその声音にも表われていた。

「やはり上杉を討たれますか」

正信の言外に、もしできるなら上杉と戦いたくないという表情が出ていた。

「討つしかなかろう。山城が待っていると言っているではないか」

これは既定の方針である。天下統一のためには、絶対にその例外は一つとして許せるものでないことを、正信はよく承知の上で言っているのである。正信は再度念を押した。

「なれど、山城は、みずから手出しをせぬと言っておりますが――」

「予の命に従わぬという点では同じじゃ。出陣する」

正信にはこれでよいのである。家康の真意を確かめたに過ぎない。兼続がどのような戦いぶりを見せてくれるか。「万端御下向次第可レ仕候」という言葉の中に、ある小気味のよささえ感じながら――。

五月三日、家康は上杉討伐の議を決した。そうと心を決めると家康の行動はすばやか

った。家康はせっせと諸将に手紙を書いた。直接面と向かって対談できぬ場合は、口上によるか書状によるしかなかった。緊急の場合は口上で、他の場合はもっぱら書状によった。関ケ原の戦いの前まで、家康はまめにこれを実行している。書状を受け取る側にとっては、名と花押が入るから、それが証拠証券の役割を果たした。

まず軍議に先立って、内々で福島正則、細川忠興、加藤嘉明らに先鋒を命じた。続いて上杉領に接している諸将に対して守備を命じ、いつでも出撃できるようにと伝えておいた。あとは家康自身がいつ出馬するかである。

しかしこれに対し、中老、奉行らは、いずれも家康の出陣を諫止した。今回の直江山城守（兼続）の所行はさぞかしご立腹のことでござろうが、何分相手は「田舎人」のことであるから、不調法をおこらえ下されたい。故太閤の不慮以後、いろいろの出入りをめでたく治められてきたのに、今内府が上杉討伐に行き大坂城を去られるとなれば、下々の者からは秀頼様が内府から見離されたように受け取られかねません。来春までお待ち願えませんか。兵糧も道々不作で調達も不如意であろうし、ここ一両年飢饉が続いているので、どうしたものでしょうか。

連署は、堀尾吉晴、生駒親正、中村一氏、増田長盛、長束正家である。しかしこれは

諫止と言っても、来春まで待ってくれというので、討伐そのものを否定しているわけではない。一年待てば周囲の情勢が変わるかも知れないという程度のもので、強硬なものではなかった。これでは家康に一蹴されたとて、けだし当然であろう。

家康出馬についての反対意見は他にもあった。加藤清正、福島正則、細川忠興、黒田長政らである。その理由はもっぱら戦略的視点におかれていた。彼らは使者をつかわしてこう家康をいさめた。

景勝征伐はわれらだけでこと足り申す。わざわざ内府様のお手をわずらわすまでのことはなかろう。それよりもわれらが心配は、内府様の留守をよいことに、治部（三成）がことを起こすことでござる。必ずやきゃつのことであるから、これを機に謀反いたすであろう。

それに対し家康は丁重に礼を述べたが、意に従おうとはしなかった。「直江状」が兵を動かすための絶好の錦の御旗と見た家康は、頑固なまでにかたくなだった。直江状の内容をことさらにひけらかし、宣伝これつとめていた家康でもあった。われ六十歳に近いというに、これほどまでに無礼で厚顔な手紙を見たことがないと。三成のことにも触れ、こう言い切った。治部のこと、もとより覚悟の上である。虚をつかれるのと、備え

ていて攻撃されるのとではまるで違う。治部の器量で、どれほどの兵が集められるか。むしろそれが見物よ。わしには諸将のような、たのもしい味方がいる。今後とも頼みに思うぞ。そうまで言われて、清正らは引き下がるしかなかった。それだけの成算が家康にあると判断されたからである。

六月二日、家康は大坂城内で軍議を開き、景勝攻撃を七月下旬と定めた。西の丸大広間に居並ぶ諸将は、家康の側近と秀頼の側近、それに増田、長束ら奉行のほか、伊達政宗、最上義光、細川忠興、大谷吉継、黒田長政、蜂須賀豊雄、池田輝政、浅野幸長、堀直政、有馬則頼、山内一豊らである。

軍議は最初から会津攻めの部署割りに入り、表情もきびしく家康はこう告げた。

白河口には家康と秀忠、それに上方諸将
仙道口には佐竹義宣を配し、
信夫口は伊達政宗
米沢口は最上義光と仙北の諸将
津川口は前田利長、堀秀治と諸将

間を置かず、家康はさらに言葉を続けた。秀頼様側近の方々は、この城に残っていただかなければならぬ。三奉行の方々も同様である。政務に一日たりとも渋滞なきように――。

この決定に、家康方の諸将はいぶかりを感じた。彼らには三成との関わりから、この布石に一抹の危惧と不安とをぬぐい切れなかった。佐竹義宣から家康、秀忠の本隊の側面をつかれたらどうなるのか。大坂城に三奉行を残すということは、大坂城を勝手にせよと言うに等しい。それを知らぬ内府でもあるまいに、あえてこの決定を下した内府の真意はどこにあるのか。しかしこのことは、表立って問いうることではなかった。言えないからこそ、勝手な推測も出るし、流言も飛びかう理である。直観的には第一に三成の大坂城入城が考えられる。若い秀頼を擁して、家康を逆賊呼ばわりをする。出師の兵を進めて家康を討つ。これで家康が万一敗れることがあれば、それまでである。しかし家康が勝った場合はどうなるか。これが、第二である。秀頼とて征討の名目人であるから、ただですむとは考えられなかった。家康がどのような処置をとるか。どうあっても秀頼の生死は、家康の手中に握られたことになる。当然、豊臣家の滅亡もありうるのだ。

秀吉恩顧の諸将の危惧も、実にこの点にあった。

出陣を前にして、家康は秀頼に伺候し別れを告げた。家康はにこやかに秀頼の機嫌をとり結びながら言った。じいは、会津の上杉をこらしめに行って参ります。留守中おすこやかにと。秀頼は淀君と側近の片桐且元から教えられた通りに家康を励ました。そのあとでちらりと幼い質問が出た。上杉はそんなに悪いやつなのか。これは家康も予期せぬことのようだったが、大笑してよいご質問をなさるとほめあげ、狼みたいに人に噛みつくので困りますと言い抜けた。このことは、いみじくも、家康自身のことを言いあてたと言えよう。家康狼は牙をむいてどこまでも秀頼を追い回し、ついには秀頼を噛み殺している。

三成挙兵

慶長五年（一六〇〇）五月十六日、家康は、麾下の将士三千余名を率いて大坂を出立し伏見城に入った。十七日に軍令して、伏見城の留守役を定めた。すなわち、鳥居元忠を主将とし、内藤家長とその子元長、松平家忠、松平近正らである。

家康は鳥居元忠一人を従えて奥の千畳敷に入ると、しばらく四方の風景を眺めていた。と、家康の顔に笑いが浮かんだ。家康は何を思い、何を笑ったのか。この城を取り囲む三成の大軍を垣間見たのか。あるいは、秀吉が愛惜したこの伏見城が、その子飼いの三成の手によって炎に包まれるのを予見したからか。しかしその笑いはすぐに消えると、家康の表情が痛ましいものに変わっていた。家康は後にひかえた元忠を返り見ると、こう言わずにはおれなかった。元忠、今宵は心ゆくまで飲もう。元忠は、それを進んで受けた。元忠も、望むところであったからである。

二人だけの酒は、とかくしめりがちなものである。それを振り払うように、家康は努めて明るく切り出した。

「こたびの戦さは、家康の命運をうらなうものになろう。天運われにあれば、勝つ。無ければ死あるのみじゃ」

ここで死という言葉が出た。

「わしとて、必勝の信念と軍略はある。むざとは死なぬぞ。元忠、あとを頼む。一日でも長く持ちこたえることがそちの使命ぞ。死ぬにはおよばぬ。名利を捨てて生きよ」

「上様」

と元忠は目をしばたたいた。家康より三歳年上なのに、十歳以上も年長者のように、元忠は顔をしわくちゃにして答えた。

「元忠も、三河武士でござる。拙者はつねづねこう考えており申した。死に場所だけは誤りたくないものと。長いようで、短い六十年でござった。上様が、ようご立派になられて——。元忠、これにまさる喜びがござりませぬ。戦いは上様のご勝利。元忠には、そのことがよくわかります。元忠、守護神となりて上様をお守りいたしますれば——」

そう言うと、元忠は落涙した。

人間は、今生の別れの時、どのような言葉をはくものであろうか。押しつけがましくてもいけない。気負いがあっても駄目である。後に残る者に感謝するのはよい。祝福

するのもよかろう。そのことによって自分も救われるのだから。

「家康、決してそちの志を無にいたさぬ」

家康は、元忠の手を握りしめて言った。その頬を涙が流れるにまかせて――。元忠は、家康が今川義元の人質として駿府へ行った少年の頃からの付け人であった。それからざっと五十年、家康は、報いることの少なかった自分が今さらのように責められていた。

その夜は家康も元忠もしたたかに飲んだ。先に酔いが回ったのは、元忠の方である。酔いに託して、元忠はこんなことも言った。この伏見城は元忠一人が守れば十分でござると。しかし家康は、それに同意を与えることはできずにいた。家康は無理にそれを聞き流すしかなかった。あまり遅くなっては明日にさわりがでましょうと元忠が言い出した時には、宵も大分ふけていた。元忠が近侍に抱きかかえられるようにして去った後、家康一人がしばらくそこにいた。あれほど飲んだはずなのに、家康はどうしても酔えぬ自分を意識していた。

翌朝はやく、家康は伏見城を出立した。元忠は、大手門の外まで出て家康を見送った。家康の駕籠が大地を離れると、元忠は家康に目礼した。家康もそれに応えた。これ

が二人の別れであった。元忠の表情には、ただ武将としての厳しさがみなぎっているだけだった。

一方その前日――。

佐和山城の奥の間で、二人が密議を交わしていた。三成と家老の島左近である。再三の失敗にもめげず、左近はまた家康暗殺を三成にすすめていた。

その計画というのは、こうである。長束正家を利用して、家康を刺そうというのであった。正家の居城は琵琶湖の水口にあり、東海道を東下するためには必ず通過する地点にあたっていた。

さぞかし反対されると思っていたのに、この度は、三成にあっさりと賛成されて、左近はいささか拍子抜けの感もないではなかった。今までの三成ならば、奇道を用いることを好まぬことで押し通してきた。しかし今は違うものがあった。心境の変化である。佐和山城に蟄居するうちに、その心が芽ばえた。今までは家康を倒すことで、自分を天下の覇者たらしめようとする気持ちがあった。そのためには、家康と三成指揮下の大軍を用いて雌雄を決することを要した。それが秀頼の年少をよいことに西の丸に入り込み、家康の思うがままに政務を行なっているのを聞くにつけ、秀頼のために一日も早く

家康を倒さなければならないと思えてきた。このままでは、豊臣家そのものもどうかされてしまうという危機感である。悪く考えれば考えるほど、三成のそれはつのるばかりであった。このままで行けば、家康は秀頼様を弑しかねない。そうさせてはならないし、そうなってからでは遅いのである。熟慮の末に三成がたどりついた帰結は、そのためには自分も名利を捨て、悪名をかぶっても止むを得ないという覚悟であった。つまりなり振りかまわず、どんな手段を用いてもよいから家康さえ殺してしまえば、その結果、自分の身はどうなってもかまわないとする自己犠牲である。

左近の襲撃計画はつぎのようなものであった。長束正家から家康の宿所に出向いてもらって、朝餉を差し上げたいからとすすめてもらう。左近は手足を五十人選び、牢人、山伏、商人に変装させて水口城に入れて隠しておく。家康がうかとこの策に乗れば、左近とこの五十人は、たとえ全員が斬り死にしても、家康を倒せるというものであった。そしてこれを成功させるためには正家の協力が必要であり、それを絶対条件とした。

「大蔵少輔（正家）がうんと言うか」

実際決行するとなると、三成は細心だった。

「無理にも承諾させまする」

「決して無駄には死ぬな。大蔵少輔は腹のない男だ。そこを心してかかれよ」

左近から来意を告げられると、正家はすっかり当惑してしまった。正家の気持ちは、三成、家康の二者択一に苦しんでいた。どちらを選んで味方すべきか。家康を自分の城に招き、朝餉を差し出すことは決して悪いことではない。口実さえつけば、自分から進んでそうしたいとさえ考えられることである。しかし自分の城での暗殺は困った。それに成功したにせよ失敗したにせよ、家康の兵三千が黙っていようとは思えなかった。まず水口城の老若男女共、皆殺しであろう。かと言って左近の申し出をことわることも大変困難だった。家康が大坂城にいてくれれば、また事情は別である。今、上方を去ろうとしている時、うかつにそれをことわれば、三成がどのような動きを見せるか、それがこわいのである。ことわったことを口実に、三成がこの水口城を攻撃しないとは、どうして断言できよう。このような大事をあかし協力を求めて来たからには、三成がそのまま自分を無事に済ましてくれるとは、とうてい考えられない正家であった。

なおも左近から説得されて、正家も左近に荷担せざるを得ないはめに陥った。うやむやにことを済まされない立場に落ちて、正家の明敏な頭脳はめまぐるしく回転した。——とりあえずこの急場を切り抜けよう、急場を。この急場を切り抜ければ、あとは何とか

なるようになるだろう。左近の言う通りになったとみせかけて、その裏をかく方法だってあるのだ。たわけめ、左近の自由にはならぬぞ。わしにも才気と舌力とがある。

十八日晩頃、伏見城を発した家康は、大津城に入った。大津城は京極高次の居城である。太閤の死後、高次は旗幟を鮮明にし、内府の幕下と心得えてくれと家康に申し入れていた。

京極家は、佐々木源氏の嫡流で、名家であった。それに豊臣家とも徳川家とも、強い絆で結ばれていた。高次の妹は、秀吉の側室となった「松の丸殿」である。高次の妻おはつは、淀君の妹である。そのおはつの妹が、中納言秀忠の妻、小督であった。高次は閨閥の点で、両家にまたがっていた。

家康もこの高次には頼むところがあった。三成が挙兵したとなれば、この大津城は家康にとって重要な戦略上の拠点となる。ここも伏見城と同じように、三成軍の攻撃をもろに受け、それにどれだけ耐えうるかが勝負である。いうなれば、高次の役割は、いかに時間をかせぐかにあった。それがあるから家康も、この貴公子のもとにわざわざ立ち寄り、一声言葉をかけておく必要があったのである。晩食を終えるとすぐ密議に入り、元忠にも伝えたように名目にこだわることなく進退を決するようにと言った。十日も持

ちこたえられれば、それで上々とも言い、死守せよとは命じなかった。

家康が大津城を出て、石部の宿営地についたのはまだ陽も沈まぬ時刻であった。そこには、平服でわずかの供回りを従えた、一人の大名が家康を待ち受けていた。水口城主長束正家である。正家を見て、家康はおやと思った。全く予期せぬ、正家の出迎えだったからである。額面通りにとれば、あらかじめ家康の行程をはかり家康を出迎えるほどの、忠勤ぶりと解されることである。しかし家康はなぜか、警戒心が先に立った。

家康から目通りを許されると正家は、家康の遠征の労をねぎらい、朝餉など差し上げたいと願い出た。家康はそれを謝して承諾し、当座の引出物に大刀を与えた。腹に一物ある正家は、家康の対応に奥歯にもののはさまったような感じを受けた。

その後正家は、求めて本多正信としばし対談した。ここで正家は承諾のお礼をくり返しながらも、哀願するようにこんな言い方をした。今水口には、内府様に差し上げる泥鰌はおりません。ご賢察下されいと。

泥鰌は水口の特産物の一つである。正家からそう言われて、正信は考えた。正家が自分から招待を申し出ておいて、自分から言わなくともよい泥鰌を持ち出して差し上げるものがないという。おかしな話ではないか。水口から泥鰌が捕れなくなったとも、正信

は聞かされていなかった。これでは正家が泥鰌を食わせたくないようにもとれる。それに冴えない目の色である。賢察願いたいという言葉も気になった。これでは、気にしないでおりたいと思っても、おそらく気にせずにはおれないだろう。どうしてでござるか、と問いかけようとした時、正信の胸にはたとひらめくものがあった。――読めた。そうであったか、正信は思わず、膝を打ちたい衝動にかられた。泥鰌を差し上げたくないから、来るなという訳である。それならそのように、はっきりと言えばよいではないか。しかしそうも言えない事情が正家にあることがはっきりした。家康に害意を抱く者が、正家に圧力をかけているものと見て、まず間違いがなかろう。三成の手の者か。形の上では、三成の生命を救った者が家康であるから、その恩義を知れば、まさか三成が家康を襲撃させようとは思えぬが――。だが、そのまさかが禁物である。現に家康がねらわれているのであるから、一応そう疑ってかかるのが、賢明であろう。正信は首を振り振り、正家にこう答えた。なるほどのう。捕れぬ泥鰌は、食えぬ道理でござった。上様（家康）には、よしなに言上つかまつると。

正信がそのことを家康に言上すると、家康のわかりは早かった。大蔵少輔め、さぞかし困っていることだろう。まだ二股を捨て切れずにいると見える、と苦笑した。正家が

帰ってから約二刻半（五時間）後、家康は軍令を発して石部宿を出た。できるだけ早く、水口城下を離れるためである。家康の駕籠は、先鋒にいた。小人数である。しのびやかに速度は速かった。本多忠勝の大部隊が水口城下に入った時には、家康はそこから二里（約八キロメートル）以上も離れていた。忠勝の軍馬はいななき、軍兵の足音は、城下町の人々の眠りをさまさせた。忠勝は、鉄砲組の水野、酒井、成瀬らに命じて、銃卒に火縄を点火させ、腰にぶらさげさせた。千にも余る、おびただしい数である。それが夜目にもしるく、曲線を描いて延々と街道に連なった。

これには島左近も、手の下しようがなかった。むなしく佐和山城に帰り、ありのままをわるびれず、三成に復命した。内府にしてやられたと。いや、大蔵少輔（正家）がもらしたかも知れぬと、三成は左近をなぐさめた。苦にせぬものぞ。内府の命運、いまだつきずか。しかしわしには正道がある。

その正道とは——秀頼を盟主とし、毛利輝元を総大将に据えて、家康と決戦することだった。このことは、家康、正信がすでに見越した通りである。三成は毛利輝元を動かすには、安国寺恵瓊の力を借りるのが、最も有効であることを知っていた。その恵瓊に密書を送り、佐和山城に来てほしいと頼むと、恵瓊からも返書があり、よいとあった。

輝元から命令を受けて景勝征伐に出陣するから、必ず七月十一日頃参上いたすというのである。三成はこの恵瓊の来訪に期待するものがあった。

安国寺恵瓊は、その名の示す通り、僧にして大名であった。伊予和気郡（現松山市付近）を所領として秀吉から与えられ、秀吉の外交官であると同時に、毛利家の顧問であった。僧としては、安芸の安国寺と、京の臨済禅の大本山、東福寺の塔頭退耕庵は彼の寺であった。

恵瓊の名を天下に広めたのは、その予言である。当時毛利は、織田信長の進攻作戦にどのように対処すべきかについて、情報分析と戦術に没頭していた。恵瓊の予言は、まさに時宜を得たものであった。それによれば、信長の時代は、二、三年は続こう。たしかに来年にも信長は、公家となり高貴な地位を得る。しかし、そのあとがいけない。がくんと地に落ちるというのである。彼は、そのことをこう表現した。

高ころびにあふのけにころばれ候

事実信長は右大臣に任ぜられ、その臣明智光秀に反逆されて、京本能寺において生命

を失っている。その明たるや神にも近い。それで終わりではなかった。まだ木下藤吉郎と称していた秀吉の名をあげて、「藤吉郎、さりとてはの者にて候」と、次の時代を担う者であることを示唆していた。

恵瓊の栄達の道は、秀吉とともに開けた。信長の毛利征伐派遣軍司令官は、秀吉であった。備中高松城を取り囲んでいた時、秀吉は信長の死を知った。その急飛脚に接すると、秀吉は恵瓊を通じて、急ぎ毛利方と講和した。それに成功するや、秀吉は夜を日についで大軍を東上させた。信長の弔い合戦のためである。この時、錦の御旗は、完全に秀吉にあった。明智光秀を山城（やましろ）の山崎で破り、秀吉は首尾よく目的を達することができた。

その講和の直後、毛利方も本能寺の変を知った。秀吉追撃の意見も、当然に出た。光秀の要請に応じて秀吉を挟撃すれば、毛利にも勝機があった。しかしその群議をおさえたのが、毛利宗家の後見役、小早川隆景であり、恵瓊であった。彼らは、秀吉を先物買いした。秀吉に恩を売っておくことこそ、毛利家繁栄の道であると。これがまたずばり的中した。後日秀吉が毛利に感謝することの大きかったことは、言うまでもない。恵瓊に対しても彼を大名に取り立て、その労に報いた。

その秀吉が死んで、恵瓊は豊臣家の危機を敏感に感じた。家康の台頭である。彼が予測したのは、家康政権の樹立か、あるいは彼の予告の誤りであろう。恵瓊は、豊臣家滅亡を喜ばなかった。彼には彼なりの自負があった。豊臣政権を作りあげたのは、この俺だ。この俺も六十を過ぎた。ここらあたりで、もう一度死に花を咲かせてみるか。

僧侶にはまま恵瓊のようなタイプが見受けられるが、彼も言うなれば、反骨者であった。よく言えば、自分の信念に従い、自説をまげない。おそらく恵瓊のしたかったことは、自分のこの手で、天下の檜舞台をお膳立し、演出したかったのではなかろうか。その恵瓊が三成の要請に応じて、佐和山城に来るというのである。

この恵瓊を迎えるにあたって、なすべきことが山積していた。その中でも大事なことは、大谷吉継に、今こそ大事を打ちあけようと決心したことである。吉継は通称紀之介。近江に生まれ、三成とは長浜城時代の小姓仲間で、越前敦賀の城主と、刑部少輔の地位にあった。吉継ほどの友を得ることは困難として、三成も吉継には一目置いていた。

本来ならば、誰を差し置いても三成が、第一番目に相談し協力を求めなければならぬのは、吉継だった。しかし三成はそれをしなかった。吉継を巻きぞえにしたくなかった

ためか、それとも彼から断わられるのを恐れたためか。

惜しむべきことに、吉継には業病があった。癩である。これさえなければ、吉継は秀吉にもっと活躍の場を与えられていたに違いなかった。その病いが年とともに嵩じ顔にもそれが現われると、人目につくのを嫌い、白頭巾でそれを隠した。

朝鮮出兵の時も、吉継の病状は悪化するばかりだった。それを知って秀吉は吉継に出兵を命じなかった。吉継はそれを残念がり、無理に願い出て朝鮮に渡ったが、すぐに帰国させられた。その頃秀吉は、大坂城山里丸の数奇屋で茶会を催し、吉継もその客の一人となった。

次客から回された井戸茶碗の濃茶を作法通りすすり終わった時、不覚にも吉継は鼻水を茶碗の中に落とした。四席の小西行長に回すに回せず、吉継は処理に困った。血がかっと顔にのぼり、危うく茶碗をその場に落とそうとした。あせればあせるほど、その方策は容易に見つからなかった。そうでなくとも吉継の業病を知る者は、彼のあとで茶を飲むことを嫌い、ただ飲むまねをして次に回していたので、その時茶碗を回されれば、行長とてもそうしていたかも知れなかった。それを目ざとく見つけた秀吉は、すかさずこう声をかけた。ああ、喉が渇いた。待ち切れぬわ。刑部（吉継）、その茶をここに持

って参れ。慮外ながら、亭主が所望いたす。そして秀吉は、さもうまそうに音を立てて、一滴も残さずその残り茶を飲みほしてしまった。屋敷に帰ると、吉継は泣いた。

家康から上杉征伐を命ぜられた時、吉継は現地において和議を成立させたいと願った。これは豊臣家の内紛ではないか。家康の、秀頼様を疎略にせぬという言葉を信用するなら、これは大老同士の喧嘩だ。将士も民衆も、もうこれ以上血を見ることは、沢山である。せっかく豊臣政権下で平安を得ているのだから、わざわざそれをこわす必要がどこにあろうか。互いにその戦争目的を、秀頼様のためによかれとしてするのなら、どこかに妥協点が見出せるはずである。その理を説いて、まず両者に当たってみることだ。その努力もしないで駄目というのは、早急である。自分にやれるだけのことをやって、それでもらちがあかなければ、別の手段を考えればよかろう。それで決して遅くはないという吉継の判断だった。しかし、この吉継の目論見は、極めて成功率が低かった。むしろ駄目だと言った方が早かった。それでも自身を信ずるが故に、最後までチャンスを生かそうと努力するところに、三成と一脈通じ合うものがあった。

吉継は、兵一千余名を率いて居城を出た。七月二日美濃の垂井に着くと、かねて三成から依頼のあった三成の子の重家を同道しようとして使者を佐和山城に送った。三成は

家康をあざむくため、この度の会津征伐には自分の代理として重家を従軍させることとし、それを家康に願い出る一方、吉継に対しても是非連行してほしいと連絡してあったからである。

この使者を受けると、三成は家臣の樫原彦右衛門を通じて、吉継に佐和山城にお越し願いたいと懇願した。吉継もそれに応じた。早速二人だけになると、三成は吉継にこう説いた。内府の所行を見るに、故太閤の遺命にそむき、秀頼様をないがしろにすることばかりである。これを放置しておけば、豊臣家の天下が徳川のものになることは、疑いもない。わしにはこのことはとうてい傍観できない。子供の時からわれらを可愛がって下さった故太閤の恩に報いるためにも、これを機会に内府を討つべきであると。

これに対し、吉継はしばし考えた後、こう口を開いた。治部（三成）の申す通りである。内府のやり方はよくない。ただ一点ひっかかるのは、内府が秀頼様を廃するとは言ってはいないことだ。秀頼様を決して疎略にせぬという内府の言葉を信じている者も多かろう。それが問題だ。

治部が兵を挙げたと聞けば、豊臣家恩顧の諸将は二つに分かれよう。加藤主計（清正）、福島左衛門太夫（正則）、黒田甲斐（長政）などは、必ずや内府に与し敵となろ

う。ことを起こすのは、内府の真意をつかんでからでも、決して遅くはあるまい。

しかしそれでは遅すぎるとして、三成は一歩も譲らなかった。内府の正体はすでに割れている。これほどはっきりしていることが、他にあろうか。内府はとにかく嘘つきだ。故太閤への誓紙をいとも簡単に破るこの一事だけを見ても十分だろう。刑部（吉継）よ、内府を信用してはいけない。内府は豊臣家の破壊者だ。

その日は平行線のまま二人は別れた。垂井に止まること二日、その間吉継は、平塚為広を佐和山につかわして三成を諫め、自分もまた考えに考え抜いた。それに対し、三成も自分の信念を守り通した。刑部の生命をわしにくれ。一緒に死のうとも言った。そうまで聞かされるうちに、吉継の心も次第に傾いてきた。――自分の死に際は今かも知れぬ。これほどに望まれて自分の身体を与えぬことは、男の本分にそむこう。

遂に意を決して吉継は佐和山城に赴くと、歯に衣を着せず三成にこう言った。そこもとはへいくわい者だ。それでは敵をつくるばかりである。今後止めてくれ。つまり三成の態度が横柄だときめつけたのである。そのあとで、ことを挙げても治部が表面に出ることは好ましくない。大老の毛利輝元や宇喜多秀家を表看板にし、治部はその下で働かれるのが賢明であるとした。これは、三成に荷担するという間接的な意思表示である。

三成がうなずくのを見て、吉継は決意を告げた。わが生命、いかにもそこもとに預けようと。瞬間三成の顔が輝き、それがくずれて涙と変わった。

七月十一日、三成・吉継は、佐和山城で安国寺恵瓊と会した。恵瓊はすぐさま大坂にとって返し、安芸にいる輝元の上坂をうながすと共に、毛利一族の有力者吉川広家に働きかけて、家康討伐を勧めた。だが広家は、恵瓊と逆行動をとった。椙杜元縁を安芸に急行させ輝元の上坂を阻止しようとすると同時に、家康の家臣榊原康政に通報して、三成挙兵計画をぶちまけた。

にもかかわらず輝元が大坂城に入城したのは、恵瓊の謀略の成功であった。輝元の上坂をうながす、前田玄以、増田長盛、長束正家三奉行連署の手紙が、元縁に先立って安芸に届き、七月十六日には輝元は船で大坂に着き、木津の私邸に入った。そしてその翌日には、家康の留守居役として西の丸にあった佐野綱正を追い、そこに座った。そればかりではなかった。長子秀就を本丸に送り込むと、「内府ちがいの条々」と題する家康の弾劾状を発表し、副書の一通は三奉行連署、他の一通は輝元、宇喜多秀家連署の、手回しのよいものであった。その弾劾状に言う。

一、前田利長の母芳春院を人質としたこと
一、景勝に何の科もなきこと
一、伏見城を占拠したること
一、西の丸に居住していること
一、政務を一人で勝手にやったこと

等々である。この文書に添えて諸侯に対し、檄を飛ばして言った。景勝討伐は、家康の誓紙、故太閤の御置目に背き、秀頼様が見捨てられたことであるから、諸侯は秀頼様に忠節を尽くすのが本筋であろうというにあった。

ここに至って、広家も止むなく表面上は西軍に与せざるを得なかった。しかし広家はそれで初志を断念したわけではなかった。広家の謀略は、そこから発したと言ってもよかった。周囲の情勢からそれに負けて、余儀なく西軍に従う者は他にもあった。当面をごまかし、成り行きを見定めようとする者もあった。十万の大軍を擁したとは言え、その十万が一に心がまとまったわけではなかったのである。二股者も当然その中に含まれていた。

三成もそれを知らぬわけではなかった。三成は情勢に応じて、彼らが味方にもなり、敵にもなることを承知の上で、あくまでも強気だった。味方になるような状況をつくればよいのである。そして三成はそれを為しうるという自信があった。

三成が久々に大坂城本丸に伺候して秀頼に目通りして挨拶すると、淀君はやや憂いをその眉に見せて三成に尋ねた。こたびのこと、秀頼様の御名を持ち出して、内府を怒らせぬかと。三成はそれに対し、微笑して答えた。内府を征伐すれば、内府が怒ったとてそれが何になりましょうかと。

戦機うごく

関ケ原戦で、重要な役割を果たした男が、三成の他に二人いる。小早川秀秋と島津義弘である。その一人小早川秀秋が、今、京三本木の高台院（ねね）を訪ねて彼女の前に伺候していた。秀秋は今こそ小早川家にいるが、かつては秀吉の養子であり、高台院とは、叔母、甥の関係にあった。秀秋の父木下家定は高台院の兄である。

高台院は早い方がよいというので、まだ乳離れせぬ秀秋をもらいうけて彼を育てた。下ぶくれした可愛い子だった。しかし彼は高台院の期待を裏切った。妙に癇を高ぶらせるところがある。自分の気にいらぬことがあると、狐つきのようになって一点を凝視してぶるぶる身体をふるわせた。学問をさせても駄目だったが、武道や相撲は好んでやった。自然腕白で手のつけようのない暴れ方をして、侍女たちの手をやかせた。こんなことがたび重なるうちに、高台院の愛情も薄れていった。

しかし秀吉は、そんな高台院を叱った。男の子なら、それくらいは当然である。ほっとけ、いずれは、分別も出てこよう。それをよいことにして秀秋の我儘はつのるばかり

だった。ただぽんぽん口やかましく言う高台院のあけっぴろげな人の好さを、秀秋は嫌ってはいないようだった。彼女に甘えているから、ことさらに彼女の意に逆らったのかも知れなかった。

官位が次第にのぼり中納言になった翌年、秀頼が生まれると、秀秋の身に変化が生じた。秀吉は、秀秋を子のない毛利輝元の養子にしようとした。黒田如水に命じて、内々で小早川隆景にその話をもちかけた。それは毛利家にとって大問題であった。秀秋が毛利本家におさまるというのである。とっさに隆景は、それを分家の問題にすり替えた。かねがね秀秋を小早川家に迎えたいと思っていたが、聞き届けいただければ幸いであると。隆景にはもちろん実子はいた。隆景はのっけからそれを犠牲にしていたのである。秀吉がこのことを喜ばぬはずがなかった。

秀吉の秀秋に対する期待は、それからしばらく続いた。朝鮮への第二次出兵に際し、秀秋を自分の名代として総大将に命じた。彼に従う諸将は黒田如水以下四十二人、兵数十六万三千の大軍団であった。だが秀秋は秀吉の配慮を誤解した。今度の命令は、自分を死地に追いやろうとするものであると。このことは、何の苦労もなしに、絶対の権力者の下でぬくぬくと育った者の持つ、共通の欠点である。彼が現に手にしている権力

は、自分の器量でかち取ったものではない。権力者から与えられたものである。この朝鮮出兵軍の総大将となったということは、自分の力をためす、絶好の場ではないか。戦場に赴くからには、生命を失うこともちろんあり得る。しかし秀秋も武将だ。それを理由にして尻ごみしては、武将ではない。むしろ彼が感じていたことは、その能力なきものがその地位にあることで受ける不安ではなかったか。自分の能力を信ずることができないが故に、彼をいらだたせ、常軌を逸した行動に走らせたのであろう。――死んでやろう、死ねばいいじゃろうが。

その機会は来た。遠征十か月目、加藤清正のたてこもる蔚山城が、明軍四万に包囲された。清正危うしの報を受けると、参謀の黒田如水は、諸軍に命じて明軍を逆包囲した。その時が、秀秋の初陣だった。秀秋は家老の山口宗永の止めるのもきかず、三万の軍勢を率いて清正救出に向かった。この総大将自身の出陣で諸将は大いに勇気づけられ、明軍を打ち破ることができた。秀秋は、自分の想像以上の戦功に有頂天になり、これで秀吉も自分を見直してくれるだろうと得意だった。

ところが帰国した秀秋を待ちうけていたものは、秀吉の怒りであった。総大将ともあろうものが抜け駈けするとは、何事であるか。その逆の結果がでていたら、どうする気

だったのか。きつく謹慎を命ずるというのである。これには秀秋も唖然とした。それに追いうちをかけるように、筑前、筑後五十二万石から、越前北ノ庄十五万石へ転封の命令が出た。これではいかな秀秋でも納得がいかなかった。なぜに自分がそうされるのか。謹慎ならば話はわかる。しかし自分の行動が、これほどの減封の理由になるとは、とうてい理解できることではなかった。秀秋は秀吉を怨み、自分の直観の正しさが裏づけられたように感じた。——太閤は自分が生きて帰って来たことが気にいらないのだ。秀頼が産まれたばかりに、秀次や自分がこけにされる。

その転封が行なわれないうちに秀吉が死んだ。そうすると家康が、大老の職権をもって、転封におよばず、と助け舟を出してくれた。秀秋にとっては、この措置が本当に有難かった。秀秋はそのことを謝し、家康に恩義を感じた。

ところが運命は、あくまでも秀秋に皮肉にいたずらを繰り返した。毛利輝元が西軍の総大将におされたことで、秀秋も家康を敵に回さざるを得なくなったのである。これには、秀秋も困惑した。家康に恩義があるからと言って、毛利本家に楯つくことも、それ以上に困難だった。悩んだ末秀秋は高台院に相談する気になり、三本木へ使者を立てた。彼女から折り返し返事があり、久々に秀秋の顔を見たいとあった。秀秋は取るもの

も取りあえず、高台院を訪れた。

その頃、高台院は目を患っていた。ときどき目が霞むのである。だが日常の生活に支障をきたすまでにはいたっていなかった。

高台院は秀秋に会うと、秀秋のあまりの変わりように驚かされた。あのふくよかな頬がこけてみえた。顔色も冴えなかった。目がすわらず、態度も落ちつきに欠けているように感じられた。あのきかん気の秀秋は、どこに行ったのであろうか。しいてかんぐれば、転封騒ぎがこうまでに秀秋の心を痛めたのだろうか。これでは自分に自信を失った者の姿である。高台院は、秀秋にふびんさを感じていた。

「秀秋どの。さぞかし心労も多かろう」

自然、高台院の口からいたわりの言葉が出た。

「はい」

と答えて、秀秋は弱々しい視線を彼女に向け一通りの挨拶を述べた。その挨拶がすむと、こう切り出したのは、高台院からであった。

「こたびの戦さ、そなたはどのように対処されるおつもりか」

「そのことでござる」

と、秀秋は現在不本意ながら西軍に属している事情を打ち明け、高台院の意見を問うた。

「内府と戦わずにすむ方法はありますまいか」

「あります」

彼女の意見はいつも明快だった。

「治部（三成）と戦えばよいのです」

「そのようなことが、できましょうか」

その問いを、高台院は、さらに問い返した。

「そなたの軍勢は何人ですか」

「一万六千です」

「それならば、可能でしょう。この尼は、今すぐにと言っているのではありませんよ。時機を待つのです。時機を――。戦場でなら、困難ではないはずです」

あとは言葉を切ってじっと秀秋の反応を待った。秀秋は目を伏せて思案していた。これでは裏切り者になれと言わんばかりであった。秀秋は、自分が思い起こした裏切者という語感に、たまらない嫌悪を覚えた。彼の心のつかえは、深まりこそすれ、一向に晴

れる気配は見えなかった。

この秀秋の他にもう一人、心ならずも西軍に加わっていた武将がいる。島津義弘である。

義弘の勇武は、朝鮮出兵の際の、泗川の戦いでいかんなく発揮された。その泗川に義弘が野戦築城して敵の来襲に備えていると、明軍の将董一元が二十万の軍勢をもって攻め寄せて来た。その時の島津軍は、約一万である。その寡兵をもって自己に二十倍する敵を破ったというのだからすさまじい。まさに信じがたいことである。そのため明軍は、島津軍を日本最強の軍勢として恐れた。

この島津家にも、泣き所はあった。家老の伊集院忠棟の我儘である。彼を信任した結果が彼を増長させた。義弘の子家久はこれを喜ばなかった。いずれは島津家を害する者として、逆心をあらわそうとしてその機会をうかがっていた。

一日家久は、三成の招きを受けて三成邸に出向いた。一室に通されて待つほどしばらくして、隣室の話し声が彼の耳に入ってきた。一人は疑いもなく三成である。他の一人はと耳をそば立てて聞いていると、どうも聞いたことのある声である。それにその話の内容が容易ならぬものであった。自分の名前が出て来たのである。島津家で内政をほし

いままにしているのは、家久である。困ったものだというところで、家久は三成の相手が伊集院忠棟であることを確信できた。いずれ家康が豊臣家に歯向かうことになろうが、家康の味方をして大坂城を攻めることになるのが家久であろうとまで忠棟から言われて、家久は怒りで心が煮えたぎった。まさか三成邸で忠棟を面とむかって罵倒することもならず、家久は歯ぎしりして口惜しがった。

忠棟が帰ると、三成は家久の待つ部屋に入ってくるなり言った。おわかりいただけたか。ただ今の客は、伊集院どのでござった。

話としては、上手くでき過ぎている。真偽のほどはわからない。このことによって、家久は忠棟誅伐を決意したと言われている。

慶長四年（一五九九）三月、家久は恩賞について相談したいことがあるとして、忠棟を伏見屋敷の茶室に招いた。

茶室の中では、もとより二人きりである。家久は、終始微笑をもって通した。大した演技力である。話も簡単に終わり、茶を飲んだ。別れを告げて庭に出た時、椿の花が忠棟の目にとまった。よい色ですなとそれに見とれている一瞬、家久の後に従っていた小姓の仁礼小吉が、かねて茶室の縁の下に隠していた家久の大刀のさやを払うや、忠棟の

背後から斜めに斬り下げた。忠棟は抵抗する間もなく、どうとその場に倒れた。

忠棟誅殺の報は、ただちに飛脚によって都城に届いた。忠棟は罪あるによって誅したが、妻子、家来はこれを咎めないという処置に対して、子の忠真は猛然と反抗した。いかに主とは申せ、大功ある父を殺すとは何ごとであるかとその理不尽を怒った。本城と領内の要塞を厳重に固め、徹底抗戦の構えをとった。

この戦いに際して、家康は肥前唐津城主寺沢広高、日向城主高橋右近、高城城主秋月種長らに命じて島津家を支援させる一方、自身武具・武器を数多く送っている。この戦いは、攻める方も守る方も、壮絶な戦いを展開した。両者とも、名だたる薩摩隼人であった。血が雲を呼び、雨がその血を流した。どうにか島津勢の勝利に帰し、都城に入城したのは、関ケ原の戦いの半年前のことであった。

この内紛が終わると、義弘は手勢二百人を率いて上坂し、西の丸で家康にお礼を述べた。家康もこれを喜び、義弘に上杉征伐の大事をもらして、こう依頼した。家康が大坂を留守にするとなれば、伏見城は孤立しよう。その時、何分のご助勢を願いたいと。義弘は快諾し、義弘の一身にかえてもお守りいたすと約束した。急ぎ島津家の当主義久に書を送り、兵力の増強と兵糧、弾薬の補強を求めた。しかし島津家の財政は、朝鮮出兵

と伊集院の乱で、極度に窮迫していた。とても大軍を上方に送り込める状況になかったのである。しかも薩摩から大坂を見れば遠隔の地にあったので、義久も家康の上杉征伐を私闘と見、情報分析を誤り、義弘を孤立させるはめに落とした。

それでも義弘は、家康との約束を守り、伏見城に使者を送って、内府とのお約束により入城いたすと申し入れた。しかし鳥居元忠はこれを頑として拒んだ。家康からそのような命令を受けていないというのが、その理由である。家康もこのことを一言元忠に伝えて行くことを失念したとしか見えない。入れろ入れないで問答をくり返しているうちに、城兵の疑いは次第に濃いものになっていった。この島津の様子はただ事ではない。敵の回し者ではないか。そう判断すると、元忠は鉄砲隊に命じて、一斉に威嚇射撃に出た。それには島津勢も手の下しようがなく、大坂に帰るしかなかった。

しかし毛利輝元や三成が大坂城に入り、家康の弾劾書が回されると、当主義久もようやくことの大事を知った。上方で大乱があり、義弘軍が小人数で立往生しているという噂が広がり、将兵の士気を奮い立たせた。われもわれもと志願する者が続き、上方へ向かった。これが薩摩隼人の心意気というものである。どうして大乱の渦中にある義弘軍を見捨てられるか。主家で援軍を出さなければ、俺たちが自費でも行く。彼らがこうし

て島津の大坂屋敷に集結した結果、義弘の軍勢も増え、一千人を数えるまでに漕ぎつけることができた。

そこへ三成からの使者が来た。家康の非をならし、秀頼様を守り立てていただきたい。故太閤殿下のご恩に報いるのは今ぞというのである。それを聞かされて、義弘は複雑な気持ちを味わわされていた。秀吉恩顧の諸将と違って、義弘はその恩を深く感じてはいない。三成と家康とを比較した時、親しみを感じていたのは家康の方である。その家康から、納得のいかぬ仕打ちを受けた。伏見城の元忠に命令が通じていないばかりか、鉄砲までうちかけられた。せっかくお味方しようとしていたのに、そんなことが起ころうとは。なぜだ、なぜそうされたのか。義弘が田舎者だからか。田舎者は、口一つであしらえると考えたのか。義弘には、家康が自分を軽視しているとしか思えなかった。内府がそんな気持ちなら、こっちもそのつもりで相手してやろう。そこへ三成に加勢してもらいたいという勧誘である。ええ、ままよと義弘はその奨めに乗った。ただそうは言っても、義弘の状況分析の中に、つぎのことがあったことは否定できまい。九万とも十万とも噂される大軍のひしめきあっている大坂で、いかな義弘でも反対の旗印を掲げることは、まず不可能であったろう。そのことは、即島津軍の自滅を意味したから

である。

ともかくも大坂城の軍議に参加してみて義弘が不満を感じたことは、三成が参謀としてしゃしゃり出ることだった。戦って不敗の義弘である。輝かしい戦歴を持たぬ三成の一言一言が義弘の癇にさわった。したり顔にわしに指図するとは片腹痛い。その感情を殺すのに、義弘はせいいっぱいだった。その間にも軍議はどんどん進められた。三成は言った。東軍（家康軍）に与する者の妻子を人質とする。そうすれば、人質に関わりを持つ諸将の士気は半減しよう。伏見城は、東軍の拠点である。まずこれを攻撃目標と定めて占拠すると。

その時西軍（三成軍）の主なる諸将の顔ぶれは、つぎの通りである。

毛利輝元とその養子秀元。吉川広家。宇喜多秀家。島津義弘。鍋島勝茂。長宗我部盛親。小西行長。蜂須賀家政。生駒親正。小早川秀秋らである。

安国寺恵瓊、増田長盛、大谷吉継は言うを待たない。長束正家もこの状況におかれては逃げるわけには行かなかった。

七月十七日、増田長盛らは、使者を大津に立て、京極高次に人質をさし出すようにと迫った。しかし高次はかねて覚悟の上だったので、それに応じなかった。だがそれで

屈する三成ではなかった。秀頼、淀君の名において再度その命令を発した。前述したように、高次の妻は、淀君の妹である。止むなくこれを承諾し、その長子熊若を大坂城に送った。もしものことがあっても、淀君ならば熊若の生命を助けてくれるだろうとの配慮あってのことである。

大洲にある藤堂高虎の屋敷にも兵を派遣し、弟の高清を人質にしようとしたが、これは留守の家臣に拒まれて、その目的を達しなかった。伊達政宗の長子秀宗の場合は成功した。宇喜多秀家の屋敷におき、それを人質にした。加藤清正の妻は、その家臣大木土佐の機転で、無事大坂を脱出することができた。さて問題は、細川忠興の妻ガラシヤ(玉)の場合である。

夫人は信仰の人であった。彼女の運命は、まさに数奇の言葉につきる。その出生を明智光秀に受けた。光秀が主信長を弑したことから、彼女は逆賊の子という汚名を着せられた。彼女が信仰の道に走ったことも、なるほどとうなずけるものがある。

それにまた、夫忠興は嫉妬深かったと伝えられている。あまりに彼女が美貌に生まれついているために――。このことが彼女にとって幸か不幸かはわからない。忠興は上杉征伐に従軍するに際し、その臣小笠原少斎にこう命じていた。もし彼女が人質にとら

れるような事態になったら、彼女を殺せと。厳しい命令である。少斎はこれをつつしんで受けた。

三成の手の者がガラシヤ夫人の引き渡しを迫った時、彼女に覚悟はできていた。しかし、死はいとわぬが、自殺はできなかった。キリスト教の教義に従ったまでである。侍女のしもの記録によれば、つぎのようであった。

小笠原少斎は、最後の時が近づくと、そのことを直接夫人に伝えることができず、彼女の前にひれ伏すと号泣した。賢い夫人は、そのことで一切を悟った。静かにゼウスを安置した奥の間に入ると、燭を点じ祈りを捧げた。主よ、わらわをハライソ（天国）へお導き給えと。そして少斎を振り返って言った。わらわはキリスト教徒であるから、自殺は禁じられています。そなたの手で刺してたもれと。そう言うと夫人は、自分でその長い黒髪をきりきりと上へ巻きあげると、その胸を開かれ、目を閉じてこの世の救い主キリストと聖母マリアの称号を称えはじめた。心得た少斎は、ひるむ心を励まして、彼女の胸を深々と突き刺した。時に夫人は三十八歳であった。

それから少斎は、用意の火薬を奥の間と屋敷内にまき火をつけた。その火勢が屋敷に回るのを確かめた後、誇り高き主君のみ台所が、なんでおめおめと敵の擒になろうやと

言うと少斎はつぎの間で切腹して果てた。

このガラシヤ夫人の死は、西軍の作戦に一部挫折と変更を与えた。人質というものは、それを生かして擒にしておくからこそ有効である。それが死なれては、元も子もなかった。その相手を、われとわが手で敵にまわす結果になった。逆効果と言うべきであろう。その愚をおそれた三成は、人質作戦を中止し、西軍の諸将の兵に命じて屋敷外に配置し、それを監視する態勢をとった。

この人質作戦こそ変更を余儀なくされたが、西軍の大勢は、あくまでも家康に対する積極的攻勢にあった。これを強く主張したのが、宇喜多秀家である。兵力に差があるならいざ知らず、敵と同数あるいはそれ以上の兵力がある場合、何も守勢をとる必要はない。すすんで敵を撃破すべきである。この副大将の発言は、よく軍議を一決させた。

この秀家が積極策を打ち出した背景には、大老としての家康への対抗意識もあったろう。しかしそれ以上に、宇喜多家の内紛に際して、家康のとった処置が、秀家の感情をひどく害するものであった。

秀家の岡山五十七万四千石の筆頭家老に長船紀伊守がいた。秀家は少年大名の頃からの習慣で、政務の一切を紀伊守にまかせていた。紀伊守は有能な、忠誠心の厚い老人で

あったが、ものごとを処するに好悪の情が強かった。ということは、そこに派閥ができ、その閥に属する者は陽の目を見、その閥に入れぬ者は、一向にうだつがあがらなかった。

その紀伊守からとりわけ信任を得ていたのが、中村刑部である。刑部は秀家夫人（お豪）が前田家から嫁いできた時、付人として宇喜多家に臣従した者である。刑部は前田家を背景にした強みを生かし、一方たくみに紀伊守の機嫌を取り結んで、短期間の間にその片腕にまでのし上がってしまった。そうできたということは、刑部にそれだけの才覚もあり仕事もできたということであろうが、閥外の重臣たちにはきわめて受けが悪かった。

その紀伊守が病死すると、情勢は一変した。当然の成り行きである。筆頭家老に宇喜多左京亮が任ぜられるや、閣僚人事を、反長船派で押さえてしまった。刑部と長船閥は、いわゆる「乾された」わけである。

しかしそれで退く刑部ではなかった。刑部には、まだ秀家夫人という強い後ろ楯があった。そこから刑部の巻き返しが始まった。彼は秀家に目通りを願うと、左京亮の名をあげて、紀伊守が彼から毒殺されたと讒言した。これには秀家も信じがたく、ただちに

近侍に命じて事実を調査させたが、どうしても毒殺を裏づける証拠は見出せなかった。そこで秀家は刑部を呼び、二度とそのようなことを口にするなと叱りおいた。

ところが、このことが左京亮の一派の耳に入った。彼らは騒ぎ出して、刑部をそのままにしておけぬ、斬ると息巻いた。一方刑部の方も負けてはいなかった。そっちがその気ならば、こっちもこっちだと感情をむき出しにして対抗した。こうして宇喜多家は、大坂玉造を拠点とする刑部派と、備前島を拠点とする左京亮派の争いによって、一触即発の危機にさらされた。

これを憂慮したのが、三成である。家康嫌いの秀家の内紛は、直接自軍の戦力低下に繋がる。大谷吉継に会い、その調停を依頼した。吉継はそれを承知すると、榊原康政に協力を求め、二人で調停にあたることになった。康政は、ことわるまでもなく、家康譜代の臣である。康政を引き入れたのは、家康から邪魔が入るのを配慮してのことであった。しかしこの配慮も無駄になった。案の如く家康から横槍が入り、康政は手を引かざるを得なくなった。

これを調停不能と見て、左京亮派は、秀家に対し、刑部引き渡しを迫った。秀家はそれを拒否して言った。それはできぬ。私怨を去って予に仕えてくれ。同じ宇喜多家の者

ではないか。それをきき分けられるくらいの者たちならば、最初からそのような要求を主君にするはずがなかった。殿のおおせとは申せ、従いいたしかねる、武士の意地でござれば、こちらは刀にかけても頂戴いたすまでのこととして備前島屋敷に籠城した。その数五百である。

ここにいたって秀家も困った。反逆者として攻めることは知っていた。それをしたくないからこそ、家康にすがって見ることにした。恥をしのんで家康に調停を依頼すると、家康はそれを快諾した。家康は大老の名において、左京亮らを有罪とし、その主謀者に関東の地へ蟄居(ちっきょ)を命じた。

当時の武士道からすれば、主君への反逆罪は、当然切腹である。この意識があるから、秀家もそのつもりでいた。しかし家康はあえてそれをしなかった。これで事件は落着をみてほっとしたものの、秀家はこの処置に釈然としないものを感じていた。家康にいらざる手数をわずらわせた上に、手前勝手な狭量と思いながらも、秀家は家康に素直に感謝する気持ちになれずにいた。

伏見城攻撃が決定すると、秀家はすすんで攻撃の任についた。総大将が秀家で、皮肉にも小早川秀秋、島津義弘らがそれに従った。秀秋にすれば、この戦いには参加したく

なかった。できるならば、他の諸将に代わってもらいたかった。家康の臣の鳥居元忠を攻撃するような事実は作りたくなかった。しかしそのことを知らぬ三成ではなかった。だからこそ三成は、秀秋の手で伏見城を攻めさせ、東軍（家康軍）に寝返りできぬように歯止めをかけておきたかった。そうする一方、三成は秀秋に、甘い餌を与えておくことも忘れなかった。西軍大勝利の暁には、中納言（秀秋）を関白に推挙申し上げると。これには、秀秋はまんざらでもない反応を示した。自分にはその資格があるとうぬぼれていた秀秋でもあった。秀秋の心は、大いにゆれ動いた。情においては家康にひかれ、実においては三成に期待するものがあった。伏見城落城後、秀秋は黒田長政を通じて家康に書状を送り、伏見城を攻撃せざるを得なかった理由を述べて謝罪している。これに対し家康からすぐには返事がなかった。そのため秀秋はいらだち、関ケ原の戦いにいたるまで病気と称して戦わず、鷹狩りなどにその日その日を暮らし、各地を回っていた。

伏見城攻防は、七月十九日に始まった。伏見城は秀吉の築城になる堅城である。東南に川が走り、東北には谷が口を開き、守るにやすく、攻めるに難しい城であった。薄暮から銃撃戦が展開され、日夜それを連ねて、二十四日におよんだ。あけて二十五日、秀家は軍議を開き、諸将の部署を定めると、そこから力攻めに入った。これ以上攻撃が長

びくことは、西軍の威信にもかかわり、士気の低下をまねくと判断したからである。それでも元忠は、よく防戦につとめ、以後一週間を死守した。落城にいたる直接の原因は、城内甲賀者の内応である。これには長束正家の軍功に負うところが大きかった。

正家もここに至って意を決した。正家にとっては、自分の周りはこれ皆西軍である。算盤侍といわれここまでのし上がってきたが、正家も武士であった。迷いに迷ったあげく、ようやくその迷いを捨てた。迷いを捨てると、正家の明智は、鋭く回転しはじめた。決して凡庸の質ではなかったのである。

伏見城にこもっているのが、元忠の手勢だけでなく甲賀衆も混じっているのを知ると、正家は一策を案じた。正家は自ら書状をしたため、これを矢文にして城中に射させた。その内容はこうである。

城中の甲賀の者共に告ぐ。甲賀にいるお前たちの妻子は捕えた。このまま抵抗を続ければ、彼らを張付にする。しかしわが軍に内通して放火すれば、妻子の生命を助けるのみか、多くの恩賞を与えよう。

近江水口は、甲賀郷の首邑であった。正家はその領主であるから、甲賀衆を利用しようと思い立ったわけである。そして味方の甲賀衆のはなった矢文が幸いにも、城内の甲賀衆の手に渡った。

それを見て、山口宗助、堀十内ら四十人が、夜半城内に放火し、城壁の一部を破壊した。彼らにとっては、正家の誘いが、渡りに舟だったのかも知れない。このまま戦ったとしても、落城は時間の問題であったし、あたら生命を捨てるよりは、妻子の生命も助かり恩賞を得た方が、はるかに有利な条件であることも事実であった。正家の軍勢も、これに勢いを得て城門を破り、秀秋の軍もこれに続いた。城中の火勢は強まり、もはやそれを消す術がなかった。

その時秀秋は、休戦を命じ兵を止めた。元忠に使者を立て、降服を勧告した。もちろんそれに応ずる元忠ではなかった。元忠は返事してこう言った。元忠の生ある限り戦う。遠慮召されるな。その言葉通り、元忠の奮戦は、すさまじいものがあった。寄せ手を撃退すること三回。身には数創を負い、その手兵の大半を失った。元忠が本丸に退いた時には、彼に従う者、わずかに十数名を数えるのみであった。寄せ手は彼の周りに増すばかりである。元忠は石段によりかかって呼吸を整えていたが、そこへ槍を突きかけ

て来た者があるのを見ると、これまでと覚悟を決め、元忠は自分の名をその者に告げ、介錯を頼んだ。こうして元忠は自分の首を、雑賀重朝に授けた。

この自己の身を捨てても主君のために尽くそうとする気持ちはどこから来ているのか。一人元忠のみに限らず、三成の場合の、島左近においても同じことが言える。それは決して打算として片づけられることではない。彼らの意識の中には、自分が死んでも、自分の子孫の繁栄を願う気持ちのあるのは否定しない。しかしながらそれだけでは、人間は簡単に死ねるものではなかろう。彼らの心の中に流れるもの——それは信だ。

臣の道

慶長五年（一六〇〇）六月十日、景勝は麾下の諸将に書状を送り、再度諸将の意思を問うた。その草案は、兼続が作った。

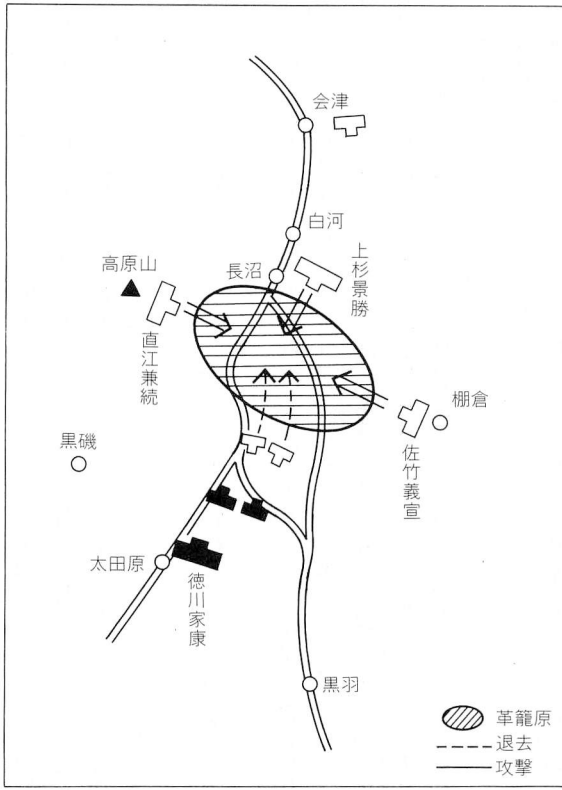
これを額面通りにとれば、家康から難癖をつけられて征討軍を受ける羽目に落ちた。このままでは、あらぬ疑いをかけられたまま、上杉家が滅亡するしかない。座してそうなることは、いかにも心外である。それよりは、あえて一戦しよう。これは正当防衛である。戦うからには、ゆめゆめ不覚の振る舞いなきように――。もしこれを非とする者は、遠慮なく申し出られよ。ただちに暇をとらせる。右約束する。

自然無分別理不尽之滅亡と述懐に存ずる者は、何者成共、相違無、暇を出す可く候

この草案を一読して景勝は、よしと兼続に答えた。これで開戦の口実はできた。景勝

はあくまでも、戦いを好まぬのである。仕掛人は家康だ。この期におよんで上杉家を去りたい者は去れというのは、景勝の心そのものである。この文は、わが意を言いえて、妙である。景勝は満足だった。

日を改めて数日、景勝は兼続と微行で、白河へ出向いた。地形の偵察のためである。二人の関心は、自ずと白河口に向けられた。おそらく家康勢の主力はここに集中しよう。この推測は、まず誤りがあるまい。軍略はすでに兼続の胸にあった。兼続はまず一万の軍勢を率いて南山口より下野に出て高原山麓にひそむ。佐竹義宣は、家康軍が鬼怒川を渡ったあとで西方で行動を開始する。景勝の本隊は兵八千をもって革籠原長岡口で家康を迎えうつ。その後詰には、新津続家、沢根高継の兵六千を待機させ決戦に備える。主決戦場は革籠原で、その広さにおいて不足はない。景勝の先鋒がするすると前に出て、家康軍の先鋒と交戦する。戦うことしばらくして、わざと敗走し原の中央に誘い込む。勝ちに乗じて家康は追撃に移るだろう。そこをねらって銃火をあびせて先鋒をたたきつぶす。先鋒危うしの報を聞いて、家康はそれを救うために主力を動かす。その主力が革籠原に入れば、もうしめたものである。上杉、佐竹勢は総攻撃に転じ、三方から家康の殲滅をはかる。もしそれで戦いに利がなければ、白河口で死ぬまでだと兼続は思



▲兼続の「革籠原」戦略図

った。それもよいではないか。男子と生まれてきて、本懐であろう。この偵察から帰ると、三成からの書状が兼続を待っていた。家康が六月十八日にいよいよ伏見を出発した旨の報告に始まり、かねての手筈通り存分に戦われるようにと励まし、七月初めには三成も佐和山を出発するとあり、輝元、秀家も当方のお味方であるからご安堵あるようにと結んであった。

それに対し兼続も書を認め、三成に送った。成算われにあり。治部どのの勝利を信じていると。

それから日ならずして若松城の兼続のもとに、次々と家康の情報が寄せられてきた。家康の前衛徳川秀忠軍は、太田原に着陣を終わった。家康の本隊は間もなく、小山に到着するであろうと。機を失せず、兼続は使者を佐竹義宣に立て、その出陣をうながした。義宣もその要請に応じて、その老臣梅津半左衛門、戸村豊後守に兵五千をさずけて、南関から進撃させた。ついで義宣自身も常陸の水戸城を発して棚倉にその陣所を定め、その数七万と称した。

家康が小山に到着した七月二十四日夜、三成挙兵の飛報が届いた。そのことに対しては別に家康には驚きはなかった。かねての読み筋の通りであり、その時がいつであるか

が分からぬだけだったからである。ただ家康が一番気を使ったのは、豊臣恩顧の諸将の動向である。もっとてっとり早く言えば、従軍した諸将中最大の兵力を持つ福島正則がどういう動きを示すかである。そしてこの家康の直観は正しかった。

明日軍議を開く旨諸将に伝えると、家康はひそかに本多正信と協議した。それを短時間で済ませ、正信は急ぎ黒田長政に伺候するように使者を立てようとした。と、その当の長政が家康に目通りを願い出て来た。

ことが好都合に運ぶとは、このことであろう。期せずして、家康、正信、長政のねらいは一致していた。いかにして正則を当方の味方に引き入れるかである。そこで三者が改めて協議したが、時間を要するまでもなく長政が正則の意中を探ることになった。

福島正則は、加藤清正とともに、秀吉子飼いの者である。豊臣家の将来を担うべき両翼として高台院に養育された。柴田勝家との賤ケ嶽の戦い以来数々の武功をあげ、その勇猛ぶりは諸将によく知られていた。尾張の清洲城主であり、西軍の主力に最も近い地点に位置していた。性格は直情で、好き嫌いの感情が激しかった。

とりわけ正則は、三成の台頭を喜ばなかった。自分より後で秀吉に仕えたくせに、大きな顔をしくさってと三成に小面憎さを感じていた。平たく言えば、先輩として立てろ

ということである。三成に輝かしい武功のないのを常に軽蔑し、三成がいかにも口先一つで秀吉に取り入っている茶坊主のようにしか思えなかった。その気持ちは、黒田長政にもあった。三成のことになると、正則も長政も、不思議なほど気持ちが合った。長政は秀吉の天下取りの参謀として活躍した、黒田如水（孝高）の子で、豊前中津城主である。

その長政が訪ねて行くと、正則は酒杯を重ねていた。正則も長政の来訪を喜び、すぐ二人だけで飲み交わし始めた。話題は三成挙兵についてである。正則も正則なりに、心を痛めることがあった。

三成だけならば、正則の力をもってすれば、すぐにも一蹴できよう。治部（三成）め、血まようたか。身の程知らず、戦さなど仕掛けおって——。しかしその挙兵の内容を知るにつけ、正則も簡単にそうとばかり言えないものを感じとれてきた。盟主が秀頼で、総大将が毛利輝元、副大将が宇喜多秀家、長宗我部盛親、大谷吉継らである。それに目の前にいる上杉景勝も決してあなどり難い敵である。武将としての正則の神経は、鋭くその全貌を瞬時にして把握していた。これは、天下の大乱だ。内府とてもこのあとはどうなるかわからない。どちらが勝っても不思議でない陣容なのである。正則は、思

わずふうっと、大きく息をはいた。正則の性格からしてそれを隠しておけず、感ずるままに正則はそれを長政にぶちまけた。長政とても同感である。内府最大の難儀となろうと答えた。おぬしはどうするかと言い出したのは、正則の方からであった。それを待っていた長政は、さらりと答えた。三成づれに名をなさしめることはあるまい。頼まれても、御免こうむる。正則は、うなった。長政のはなった一矢が、正則の意中を射たのだ。長政はじっと正則を凝視し続けた。長政はしめたと内心ほくそ笑んだ。もし気に入らなければ、泡をとばしてすぐに反論してくる正則だったからである。それから正則は黙って酒を飲みながら、何かを思案しているように見えた。長政もあえて口を開かなかった。正則に調子を合わせて酒をついでやり、自分も飲んだ。

秀頼様はどうなるかの、とやおら正則の口をついて出た言葉がこれである。内府が勝てば、こうして名乗りをあげた以上、ただでは済むまいと思われたからである。そのことよ、と長政は答えた。心配はいらぬ。秀頼様を決して疎略にはいたさぬ、とつねづね内府が言っておられるではないか。長政はここぞと語気を強めて言った。秀頼様は、ご幼少でおわす。それをよいことに私利私欲をほしいままにしようとしているのは、治部だ。君側の奸はこれを除かなければならない。このことがわれらの、秀頼様へのご奉公

と言うべきであろう。それを聞くと正則は充血した酔眼を異様に光らせて、こう長政に言葉をたたきつけた。内府の心底、この正則にはまだわからぬ。内府の口からじかにそれを聞きたい、じかに――。このことがその夜のうちに長政から正信に報告されたことは言うを待たない。

明けて二十五日、軍議を開き、家康は一世一代の大演技を披露した。この家康、秀頼様を決して疎略にあつかわぬ。これは大嘘である。大嘘は、抜け抜けとこれをつくのがよい。福島正則も、これでころりとだまされた。天下国家のために大嘘をつくことも必要だし、大嘘をつけるのもその人の人間の大きさを示すものだというが、私はそれをとらない。家康のずるさだけが強く印象に残って、どうしても消えないのである。

さて、そう前置きして、家康は人質に触れ、深い同情を見せて言った。諸将には、さだめし大坂に残された妻子のことが気掛かりでござろう。心中お察しいたす。妻子の無事を図りたいものは、この陣から遠慮なくお立ち去り下されてよい。決して恨みには思わぬ。家康の領内通行の際は、その安全を保証いたす。

家康がそこで言葉を切ると、陣屋は水をうったように静まりかえった。諸将もすぐには言葉が出ないのである。と、その中でやおら立ちあがると、胸をそらして正則が言っ

た。今さら人質にひかれて、武士の道を踏みはずしては、正則の男が立たぬ。正則、内府のために、身命をなげうってお味方つかまつる。その証(あかし)にせがれ正之を内府にお預けいたす。これをきっかけに、黒田長政、浅野幸長(よしなが)、細川忠興(ただおき)、池田輝政らが、それにならった。家康の満悦さは言うを待たない。家康は諸将に対し謝辞と微笑をもってした。

その上で東すべきか、西すべきか家康によって問われた。すなわち、景勝をたたきつぶすのを先にすべきか、それとも景勝をそのままにして上方に兵を進めるべきかである。このことについては、諸将の見るところは、ほぼ一致していた。全力をあげて、三成、吉継を討つべしである。景勝は枝葉であっても、根元ではない。根元を切れば、その枝葉は自然に枯れよう。家康の腹も、もちろんそのつもりであった。どう考えても、それ以外はないのである。わかっていながらあえて家康がそれを問うたのは、諸侯の共通意識を得るためだった。

このことが軍議で決すると、家康は一路きびすを返して江戸に向かった。諸将も同じである。その先は上方の決戦場である。その場所がどこであるのか、その時はわからなかった。しかしこれだけは、諸将にはっきりとわかっていた。それは東西両軍の接するところである。西へ、西へ――。これが世に伝えられた、家康の大旋回であった。

出発に先立って家康には、景勝の追撃が予想された。これを阻むことは大変難事である。攻める場合と引くのとでは、士気がまるで違う。その勢いの前には、なまじっかの防備ではたやすく破壊されてしまう。最悪の場合は、全滅もありうるということだ。これがはっきりと予想されるだけに、家康もここに誰を残すかには苦慮させられた。側には正信が、家康につかず離れずに座っていた。家康は、誰を残したらよいものかの、と言った。それを待ちかねたように正信は答えた。秀康様でしょうな。他に適任者がございましょうか。

結城秀康は家康の次子である。秀吉の養子となり、のち結城家を継ぎ、下野宇都宮城を居城としていた。正信の進言を聞いて、家康もなるほどとうなずけるものがあった。秀康がよいかも知れぬ。自分に忠誠を示してくれる諸将の手前もある。伏見城に残して来た鳥居元忠と同様、場合によっては見殺しにする覚悟で、家康はそう心を定めた。

すぐに秀康が呼ばれ、残留を命じたあとで、こまごまと注意を与えて言った。景勝が戦いを仕掛けてきても、宇都宮城にこもって、打って出るな。景勝が鬼怒川を渡りきったところで、はじめて兵を出し、後続を断て。景勝が会津に軍を引き返そうとしたら、それこそ絶好の機会である。これを追撃せよ。そして家康は自分の鎧を取り出し、涙し

ながら秀康に与えて言葉を続けた。この鎧はわしが若い時着用したものである。多くの戦いにのぞんだが、一度も不覚をとったことのない、験のよいものである。秀康よ。これを着て、よい戦さをして天下にその名をあげよと。

一方その頃、伊達政宗は、家康の命を待たず、信夫口の要所白石城に襲いかかっていた。城主甘糟清長の留守を知り、急襲したものである。その攻撃の前に城代登坂式部はもろくも政宗の軍門に下った。

伊達政宗は、奥羽の雄将である。政宗は米沢城主伊達輝宗の嫡子として生まれ、母義姫は山形城主最上義光の妹である。天正十七年（一五八九）六月五日、会津の名門芦名義広を磐梯山麓の摺上原に破り、奥羽の覇者となった。

秀吉の小田原城攻めに参陣を命ぜられたが容易に従わず、家康のすすめもあって、ようやく腰をあげた。その時政宗は危機にあった。もしそれに従わなかったら、政宗の生命も保証の限りではなかった。小田原攻めに加わって、政宗は秀吉の力をまざまざと見せつけられた。天下は秀吉に傾きつつあり、政宗がいかに秀吉を過小評価していたかの誤りを修正させられた。

天正十九年の秋、長井（米沢地方）を中心とする伊達、信夫、田村、安達、刈田の旧

領を没収され、代わりに現宮城県の所領が与えられ、岩出山（現玉造郡玉造町）を居城とした。のち仙台に居城を移している。

豊臣秀次謀反に連座して、この時も政宗の生命は危なかった。秀吉との関わりの中で、政宗ほどそうしためぐり合わせになった者もそう多くなかった。秀次と鷹狩でしばしば行動を共にしたことが秀吉の強い疑惑を受けた。帰国のとき、秀次から餞別を受けたことも、大坂の施薬院全宗から詰問された。政宗はそれに対し、ひらき直ってこう答えた。いかにも自分は秀次様と親しい。太閤殿下の明智をもってしても秀次様を見誤ったのであるから、片目の自分が見損じたのは、当然ではないか。まして太閤殿下から関白をゆずられた秀次様と親しくして、何の罪があろう。それでも殿下の疑いが解けぬとあれば、いざ首をはねられたい。その一方政宗は、家康に再度、取りなしを頼んだ。家康もそのため秀吉に朝鮮出兵中のことでもあるし、政宗が京で斬り死にするような内乱は好ましくないと進言した。折しも伏見の家康の邸前に、政宗と最上義光謀反の高札が立てられた。その報告を受けた秀吉は、すぐに政宗の赦免状を与えた。支配者とは、なんとデリケートな神経の持ち主であろうか。

秀吉の死後、政宗の家康への傾斜はその度を増した。家康の子忠輝と五郎八姫と婚約

を結んだことは、さきに述べた。政宗の意中には、家康はあっても秀頼はなかった。家康の上杉征伐にあたって、政宗の気持ちに動揺はなかった。政宗は、自分の旧領を取り返す、絶好の機会と見た。白石城攻撃も、そのあらわれである。政宗は白石城を取り囲むと、登坂式部に矢文をもって降服を勧告し、三万石の好餌を約束した。それを聞くと式部は、武士の誇りを捨てて、それに乗った。式部は政宗の大軍をみて、完全に戦意を失っていた。城というものは、その守りを固くして防備につけば、そうそう二、三日で落城するものではない。敵中の孤城ならいざ知らず、上杉領内の出城の一つである。式部はあくまで抗戦し、景勝の援軍の来るまで持ちこたえればよかったのである。城将甘糟清長がその城にいさえしたら、よもやこのように無様なまねはしなかったはずである。

清長は、越後の上田から出て、謙信、景勝の二代に仕えた。清長がその勇武をあらわしたのは、永禄の川中島の戦いの時である。清長は千五百の兵を率いて、武田信玄（しんげん）の勇将馬場信房、山県昌景の軍三千六百の兵と渡り合い、約二時間一歩も後に退かなかった。謙信もその武勇を激賞し、その名は武田方でも高く評価された。

景勝の会津移封にともなって白石城主となったが、清長がその城を景勝の許可も得ず

留守にしたについては、つぎの理由がある。それは、清長の妻が、会津で病死したからだ。その知らせを受けると、清長は会津に帰り、その葬儀を行なった。ところがそのことを、政宗に内報する者があった。この機をつかんだ政宗の行動は早かった。夜を徹して軍勢をくり出すと、政宗はあっという間に白石城を落城させてしまった。清長が白石城にとって返した時には、後の祭である。伊達の旗印のひるがえる城をみて、清長はほぞをかんだ。ああ、何ということだ。自分さえこの城を留守にしなければ。

景勝はこれを怒った。切腹を申しつけよと兼続に命じた。しかし兼続は景勝を諫めて言った。非は清長にあり、その罪は死に価する。しかし清長は、謙信公以来の忠節のもの。死一等を減じて、閉門を命ぜられるようにと。あとは景勝がどのように怒ろうと、兼続は頭を縦に振らなかった。後、許されて福島城へ加勢等命ぜられたが、景勝の清長に対する遺恨は生涯消えることがなかった。

しかしながら、清長には後日談がある。関ケ原戦後、家康は清長が不遇にあるを知り、畠山義貞に命じて、二万石で清長を迎えようとした。これに対し清長は涙して謝した。白石城を奪われたのは、わが非にある。景勝様からどのような仕打ちを受けようとも、仕方のないことである。わが身は、謙信、景勝に仕えて久しい。今さらどうして、

二君にまみえることができようか、とそれをことわった。それを聞かされた家康は嘆息して言った。だからこそ自分は清長を自分の家臣に欲しかったのだ。

白石城占拠に意気あがる政宗は、家康に書を送り、山形の最上義光とともに景勝を挟撃する策を献言した。しかしこれは、小山における軍議が決定した後だったので、家康の取るところとならなかった。折り返し家康から返事があり、みだりに兵を動かさぬよう政宗に申しつけるとともに、景勝所領のうち七か所を与える旨明記してあった。いわゆるお墨付きである。その石高は約五十万石にもおよび、政宗の現石高とあわせると、百万石を越すことになる。その命を受けて政宗は景勝攻撃を一時中止し、白石城を修築し、石川昭光を城番にして北目城に帰った。

同じ頃、最上義光のもとにも、仙北の諸将がぞくぞくと集結していた。羽後角館の城主戸沢安盛の兵二千五百、陸奥の南部利直の三千、秋田実秀の二千、小野寺光直の八百、本堂源七の三百、小笠原勝俊の五百、二階堂政乗の三百などである。このため山形城内の意気が大いにあがった。

ところが、とんでもない流言が飛んだ。それは、挙兵した三成軍のために家康が殺されたというのである。この噂は、たちまち諸将の間に拡がり、動揺が起こった。せっか

く山形に集った諸将が、米沢城攻撃を前にして、主力の南部利直が引き揚げると、それにつられて他の諸将も領国へ帰りはじめたのである。これには義光も大いに落胆させられた。ここでもし景勝の攻撃を受ければ、最上軍約一万で戦うしかない状況に置かれたことになる。

そこで義光は一策を案じ、景勝の鋭鋒を政宗に向けさせようとした。義光は景勝に書を送り、上杉に対して害意のないことを伝え、その証拠には、上杉領内に足軽一人入れたことのない事実をあげ、景勝に対し、今後自身については家臣同様お取り扱い願いたいというのであった。このことは、いわば一石二鳥の手である。これで上杉との戦いが回避できるなら、上々である。時と周囲の事情によっては、時間かせぎにもなるし、そのまま臣従する場合もありえた。こうした考えは、どの諸将においても力の絶対者でない限り、自分の一身を保全するためにはありうることで、一人義光を責めるのはあたらない。

景勝は、その書を見て、すぐに兼続に回して言った。

「本心ではあるまい」

どうするかとは問わない景勝である。

「義光は策多き男でござりまするからな」

と、兼続も同感だった。兼続は義光が白鳥十郎をだまし討ちしたことを知っていた。

白鳥十郎は、最上の谷地（現河北町）の城主である。十郎は天正五年（一五七七）、家臣の槇清光を上洛させ、織田信長に白雲雀という名馬と鷹二羽をおくって、出羽の主は十郎なりと強調した。これを知った義光は、怒り、いらだった。自分こそ出羽の主と信じていたからである。義光も負けじと氏家尾張守を信長につかわし、白の大鷹と長槍十本を献上した。そして以後数年の間、二人は最上川をはさんでにらみあった。

それを憂いた長谷堂城主志村伊豆守は、義光の長子義康に、十郎の養女を嫁がせることに成功した。これで一触即発の危機が去ったように見えたが、実はそうではなかった。十郎はあくまでも義光の配下になることを嫌い、また一方、義光は、十郎を従わせようとした。これはどこの世界でもあることで、両者のうち一方が折れなければ、いずれは対決して決着をつけねばならぬことである。その時は、意外に早く、義光の仕掛けによってもたらされた。義光は十郎に使者を出し、山形城にお越しを願いたいと申し出た。自分は今病床にあって、そう長くはない。十郎どのにお会いして、修理太夫（義康）が立派に城主としての任にたえるようになるまで、最上家の系図をお預かりいただ

き、国の仕置きを願えまいかと。天正十二年（一五八四）六月七日、十郎は大きな期待と野心とをもって山形城を訪れた。訪れるにあたっては、十郎も事前に注意深く探りを入れた。その報告によると、山形城内では加持祈禱が行なわれ、殿医も城に出入りしている様子である。固く秘められているようだが、義光は奥深い一室にとじこもって城内の者たちにも顔を見せないようだ。どの報告もその点では一致していたので、十郎もついにその気になった。案のごとく山形城本丸の門を入った中庭で十郎は討たれた。十郎の血汐が桜を朱に染めた。

「義光を呼び寄せて見ますか、会津へ――」

そう言って、兼続はくすりと笑った。義光がどんな顔をするか。おそらく義光は自分がしたことを思い起こし、さぞかしおじけを振るうことであろう。来れるはずがないと兼続は読んだ。景勝は、面白いと一言言った。しかしその時上杉家も、重大な岐路に立たされていたのである。

家康が小山を去り江戸へ向かったという報が、若松城を出てその前衛が長沼に達するや、景勝は急ぎ軍議を開いた。これを機に家康を追撃すべきか、止まるべきか。軍議の中心は、言わずもがな、その点に集中していた。

兼続が立ってこう主張した。絶対に家康を追撃すべきである。このような機会は、めったにめぐって来るものではない。挟撃はもとよりわれらの作戦である。挟撃をする側とそれを受ける側とでは、生と死の違いがある。これが軍法にいう心を奪うということだ。十の力をもって敵にあたれば、敵これを百として心気が乱れる。勝利はわれにあり。上杉勢の総力をあげて、内府を攻撃すべきであると。

これに対し、反論が出た。これは当然のことである。これでは、会津の守りはどうなるのか。信夫口に伊達政宗あり、米沢口には最上義光がいる。上杉が全軍をあげて家康を攻撃したと知れば、彼らが黙っていまい。これを好機に、若松城を襲うであろう。この点いかにと。

このことは、とっくに兼続の読み筋に入っていた。兼続はずばりこう答えた。今さら何をためらう必要があるか。会津がほしければ、くれてもやろう。めざす大魚は、内府ぞ。大魚さえわが手に入れば他はいらぬと。

兼続の言っているのは、大局観のことだ。局地戦で勝ったとしても、それは何もならない。全局を勝つに越したことはないが、大局観を誤ったために、一部の局地戦に勝ったとしても、全局において敗ける場合もある。相手の力が互角かそれ以上の場合には、

まず一方的な勝利はあり得なかった。そこには犠牲も必要であるし、最後の勝利を得るものは、よく捨て、よく収めるしかない。その戦略観から、若松城は与えてもよいという言葉が、兼続の口をついて出たのである。

いつもならば、ここで景勝の決裁を求め、ほとんど兼続の進言通りにことは決着していた。しかしこの度に限って、その予想は覆された。景勝は、首を横に振った。ここは逆に最上義光を攻撃し、その領地を手中に収めて、再度家康の来襲を待とうというのである。

これには兼続も自分の耳を疑った。こうした前例は、絶えてなかったことである。どうして景勝は、こんなことを言い出すのであろうか。

兼続は、納得のいかぬままに、こう発言した。

「殿、ここのところを、よくよくご思案下さりませ。治部（三成）と内府（家康）が戦えば、おそらく勝利は、内府のものでありましょう。治部が勝てるとすれば、それは殿のお力があってのこと。挟撃以外に、その策はござりませぬ。なにとぞご賢察下さいますように――」

それでも景勝は、遂に頑として兼続の進言を退けた。

「わしの決意は変わらぬ。治部がこと、山城の言うように敗れるとは限るまい。治部には、毛利もついておる。宇喜多、長宗我部もいる。そうそう簡単におくれを取るとは思われぬ。治部が勝ったら、山城はどういたすか」

「殿のために上々にござりまする」

それを聞いて景勝は、満足げにうなずき口をつぐんだ。それで軍議の終わりである。景勝の背後には、「毘」の旗印があった。これある限り、主君の決定に対して一度は異を唱えることはできても、二度とは許されなかった。

その時景勝の意中には、つぎのことがあった。第一には、この戦さは長期にわたるという判断である。秀吉の名参謀黒田如水とてもそうであったから、その可能性も十分にあり得た。第二には、景勝が最上（現山形地方）を欲しがっていたことである。景勝の領地は、会津（福島県）、置賜、庄内（山形県）、佐渡（新潟県）にまたがり、それぞれ孤立していた。これは治政の上でも軍略上もマイナスの面が多く、置賜（米沢地方）と庄内（鶴岡地方）を結ぶためには、どうしても内陸部の最上を領土に加えることが必要だった。この景勝のねらいは、まんざら捨てたものではなかった。戦時下でなければ、立派に通用する見識と言えた。だがその時は、大局を決する限界状況の中にいた。この

時に要求される着手は、大場を占めることよりも、急場が先行した。この手順を誤ると、生命とりになりかねなかった。ただこのために景勝を愚将とするのは、当たらない。兼続の進言をのんで、一度は革籠原で一人家康との決戦を決意した景勝である。そのことのできる景勝は、やはり並の武将ではないのである。

景勝の断がもはや決定的なものとなると、兼続は嘆息して思った。ああ、勝機は去った。けだしこれは、天運というものであろう。これは人智をもって如何ともできないものだ。ここにいたっては、もういたしかたがない。この上は、どうして殿のお生命をお守りするかだけである。山城の生命は、はじめから捨てている。山城の一念、これに尽きる。そう思ってはいても兼続は、眠れぬ一夜を過ごさねばならなかった。殿さえお心を変えてくだされればと念じながら——。しかしこの兼続の願いも空しく消えた。

もう一つの関ケ原

慶長五年（一六〇〇）九月三日、伊達政宗も景勝に講和を申し入れて来た。それも最上義光と考えは同じである。家康が小山を去った今となっては、政宗も景勝の強大な軍事力を恐れたからである。

その時景勝は、本庄繁長に命じて、先に失われた白石城に代わる砦を梁川に築かせていた。政宗の戦術的講和をのむことにした景勝は、その繁長に仙道口で政宗に戦いを仕掛けぬようにと注意を与えるとともに、くれぐれも政宗の不意の襲撃に備えて防備を怠らぬようにと軍令した。

その間兼続は、米沢口に兵力をぞくぞくと集結させていた。めざすは最上攻略である。義光に使者を送り、九月七日までと期限を切って義光の米沢城来城をうながした。しかしながら義光には、それに応ずる気が全然なかった。その頃には義光にも家康が無事で、西軍との決戦のため、上方へ向かったことがわかっていた。景勝から会津へ来いと言われても、義光にはそれができなかった。行けば殺されるとそれしか考えようがな

いのである。疑心が先に立ち、自分がそうしたように、景勝からもそうされると考えると、とうてい会津まで出向く気になれなかった。それにまた兼続からの催促である。それに応ずる気のない以上、いやでも義光は自分の取るべき道を決しなければならなかった。上山城主里見越後守の子民部にその死守を命ずると、援軍として草苅志摩守を派遣し、長谷堂城はじめ諸城に対しても、同じ軍令を出した。上山は、米沢、山形を結ぶ、いわば最短距離の線上にある。義光がこの地を重視したのも、当然であった。もしこの城が落ちれば、山形城はたちまち危機にひんした。これで十分とせず、義光はすぐその子義康を政宗に遣わして援軍を求めている。

義光から何の応答もなく過ぎて、米沢城の兵馬の動きは、にわかにあわただしさを増した。軍監水原親憲は、上山城を攻略し、山形の本城を一挙に攻めることを上策とした。しかし兼続はその逆を選んだ。備えあるを避け、取り易きを先にしようとして、荒砥から畑谷にいたり、狐越街道越えで長谷堂を経て山形城に向かう攻撃軍を本隊とした。それを指揮する者は、兼続である。その兵二万。その右翼には、木村親盛を配した。赤湯を経て上山、山形にいたる羽州街道軍である。その兵四千。左翼軍は、庄内から六十里、狐越街道を山形に攻め上る兵三千である。本庄繁長を主将とした。この三方

面作戦をとると、兼続は必勝の信念をもって、軍扇をかざした。

その時の山形城の兵力は三千人足らず。長谷堂、畑谷、上山、寒河江、谷地の支城をあわせても、総勢は一万にすぎなかった。まさに義光の命運もここに尽きるかと思わせるものがあった。

戦いにあたって、陣所を定める時、自軍の進むところは易に、敵の進むところは険に、が兼続の軍法である。兼続が特に注意を払ったのは、地の利である。これを知らぬ者は、自滅につながる。したがって敵陣が地の利を得ている時は、自軍を引いて有利な地に移すことが肝要とされる。

軍を編成する時には、兼続は常にそれを三分した。第一が正兵である。それには武勇にすぐれた者を選んだ。敵を殲滅させるのは、この正兵である。第二に身体の丈夫な者をそろえて、奇兵とした。じっとたえることのできるものたちである。奇兵の性質上、時には終日を山野に伏し、夜間に行動することも多かったろう。耐久力のないものは、駄目だ。第三には、前鋒（先鋒）である。これは、軽足でなければならない。さっと進み、さっと退くことのできるものである。つまり、行動の敏速なものたちが選ばれた。

さらに兼続が重視したのは、鉄砲隊である。鉄砲隊の威力をまざまざと見せつけたの

は、織田信長の、長篠の戦いである。鉄砲の前には、武田勝頼の名だたる騎馬隊も、その武勇を発揮することができずに敗れた。ただ火縄銃の欠陥は、連続撃ちができないことである。一発発射したあと次の玉を撃つ時に、やや時間を要する。信長は鉄砲隊も三段構えとすることで、この欠点を克服した。第一陣が撃つと、第二陣に代わる。以下同じようにして、第三陣が撃ち終わった時には、先の第一陣が撃てる状態を作りあげた。この時の信長の大勝利は、以後の戦法を変えたというのが、一般的な見方である。兼続が、それに着目しないはずがなかった。

兼続は景勝の会津移封後、近江の国友村と和泉の堺に手をまわして、多くの鉄砲の入手に努めた。関ケ原戦の直前には、急ぎ国友鍛冶に依頼して、大砲十五門を作らせている。飛び道具は卑怯なりとか、鉄砲などは足軽の技で武士の手にするものではないなどという流説は、兼続の前には通用しないし、家康にしても兼続に劣らずその重要性を認めていた。後年徳川幕府が鉄砲の取り締まりを強化し、ことさらに「鉄砲強化無用」の内意を伝える一方、関所改めには、「入り鉄砲と出女」に意を用い、江戸府内への鉄砲持ち込みを厳禁している。

九月九日、兼続は米沢城を発し、その陣容は、第一陣に色部光長、春日元忠、上泉

泰綱、水原親憲、溝口左馬助、第二陣は木村親盛、松本善右衛門、横田旨俊、篠井泰信らであり、兼続は第一陣にあった。長井を経て、白鷹山塊の狐越街道を通り、畑谷城に迫ったのは、十二日のことである。

畑谷城を守備するのは、江口五兵衛とその兵三百である。この城は自然の要害に建てられた難攻の砦であった。当時この城は楯山を利用して構築され、この山を取り囲む一面は湖沼だった。沼の広さは約五ヘクタールで、鵜川をせきとめて湖沼とした。楯山の西北は深い谷地である。

兼続は、その南約一キロの片倉山に本陣をかまえ、十三日未明、色部光長を先鋒にして攻めかかった。城兵は静まりかえってそれを迎えた。射程を見定めた上、ころ合いを見て四方の矢倉から鉄砲を撃って出た。そのため兼続軍に多くの死傷者が出た。しかし何分にも畑谷城は小城である。われ勝ちに攻め寄せる直江軍のために、たちまち城中に攻め入れられてしまった。こうなっては、降服するか、死かは、時間の問題であった。

城主五兵衛は、かねて討ち死にを覚悟していたので、鎧の上に経かたびらを着、十文字の手槍をさげて、敵陣におどり込み、その子小吉と甥の忠作と家の子郎党が一斉に打って出た。その勢におされて兼続勢も一度は後退を余儀なくされた。

そこで兼続は銃兵三百余人を城の東方、黒森山にあげて、そこから城内に一斉射撃をあびせるのを合図に総攻撃に転じた。五兵衛と生き残ったその一族は、今はこれまでと腹かき切って果てた。攻撃開始から二時間の後のことである。

翌十四日には、兼続軍は、山形城から六キロの地点、戸上山（富神山）東方の高台まで進出し、長谷堂と上山城と山形城との連絡を断った。この地点に立って山形城を見おろす時、村山盆地の広がる中、山形城はいかにも底地にあった。史書の伝えるところによれば、その時霞が村山盆地にたなびいて山形城を蔽い隠したという。稲穂が黄色に色づき、見はるかす四方一面に波うっていた。

ここで作戦は、二つに分かれる。第一にはこのまま攻撃を続けて、民家に火をかけて焼き払いながら山形城を攻撃する方法である。長谷堂などは一部の兵にまかせて打って出るのを攻撃するに止める。これも上策である。しかしこれは短時間にことを決するを要する。第二策は、長谷堂を攻めると見せて、義光をおびき出す。畑谷城を見殺しにした義光としては、またまた長谷堂まで見殺しにすることはできまい。長谷堂が危うしと聞けば、いかなる義光でも、山形城から主力をもって救援部隊をくり出すに違いない。その機をとらえて大包囲戦をとろうというのである。いずれの策にしても、地の利は兼

続の方にあった。兼続は、自信をもって第二策を選んだ。ここにおいても兼続の強運が感ぜられる。もし第一策を選んで山形城の攻略に手こずっている最中に関ケ原の敗戦が伝えられたら、あまりに敵中に深入りしすぎていたため、兼続は米沢へ生還できなかったかも知れなかった。

案のごとく、義光は弟楯岡甲斐守光直と三子清水氏満に兵八千を授けて長谷堂救援に向かわせた。おそらくこの兵は、義光が動員できる最大の兵力であったろう。白岩、寒河江、谷地の各支城から戦わずして山形城に兵を引いたので、それくらいの兵力はあった。しかし本城はそのためがらあきに近かった。それでも義光は自ら出馬することをしなかった。長谷堂城を守るのは、志村伊豆守高治とその兵三百である。

こうした中でも、義光に悲観材料ばかりがそろっていたわけではなかった。義光の頼みを受けて、伊達政宗がようやく援軍を笹谷峠まで差し向けてきたからである。この援軍を差し向けるについては、つぎの経緯があった。政宗はそれを理由にして、兼続から自領に攻め入れられるのを嫌った。だからこそ、政略的講和を申し入れた矢先である。救援をしばらく差し控えるべきことを、片倉景綱からも進言を受けた。兼続の山形城攻略後、戦力の消耗した兼続を討てば、戦さは容易であるし、最上領も政宗の手に落ちる

であろうと。それも一理がある。政宗の気持ちは大いに動いたが、その策は取らなかった。叔父の伊達政景を名代として三千の兵を派遣した。家康を裏切るわけにはいかないとしたことと、山形が兵火に見舞われれば、山形の南館にいる自分の母保春院（義姫）の生命の安全も保証しがたいというのが、その理由であった。

それではなぜ岩出山城主伊達政宗の母が山形にいたのか。かつて秀吉から小田原攻め参陣を命ぜられた政宗は、出発の前日、旧所領会津の黒川城内西館から招かれてそこへ出かけた。そこで接待を受けた食事の中に、毒物が混入されていた。たちまち激しい腹痛が起こり、急ぎ本丸に帰って撥毒丸（はつどくがん）を服用して、政宗は一命を取りとめることができた。このことは保春院が片目で自分の言いなりにならぬ政宗を嫌い、弟の小次郎を伊達家の当主にしようとして起こされているものとされている。その背後には、保春院の兄最上義光（よしあき）が、秀吉の怒りに触れた政宗を除くことにより伊達家の安泰をはかり、小次郎を擁立（ようりつ）してその実権を握ろうとするねらいもあったという。

もちろん保春院は、政宗毒殺を否定した。親がどうしてその子を殺そうとするかと。しかし政宗はそのことを信じなかった。弟に罪はなくとも、母を害することはできないとして、政宗は自らの手で小次郎を斬った。保春院は、その夜義光を頼って山形へ落ち

た。母を信じられぬ政宗は、自分の子供ではないと言葉を残して――。政宗はあえてその後を追わせなかった。

上山城の里見民部と草苅志摩守の両雄も、頑として抵抗を続け、期待以上の戦果をあげていた。

本庄繁長の右翼軍は、三部隊に分かれて羽州街道を上山に向けて北上して来た。だが、この三部隊の間が、ややあきすぎていた。最上軍は高松の山麓から赤坂にかけて陣を張って待ちかまえる一方、志摩守は三百の兵を率いて小穴の細道から物見山へ出て第一軍の背後へ回った。この地区の地形は実に複雑であり大軍の利を生かすには適していない。前後から挟撃されて、第一部隊はたちまち混乱に落ちた。物見山からは、大石が落ちてくる、鉄砲を撃ちかけられるで、木村親盛、椎野弥七郎はじめ上杉軍は多くの将兵を失った。

一方それに先だって長谷堂救援におもむいた楯岡甲斐守と清水氏満の精兵は、兼続の本陣を討つべく、夜襲をかけようとしていた。兼続の本陣が戸上山（富神山）の南、菅沢の北、山崎にあったので、闇の中をひそかに東方から須川を渡ろうとした。八千の最上軍は息を殺し、馬のいななきを止めて川の中を進んで行った。ちょうどその時であ

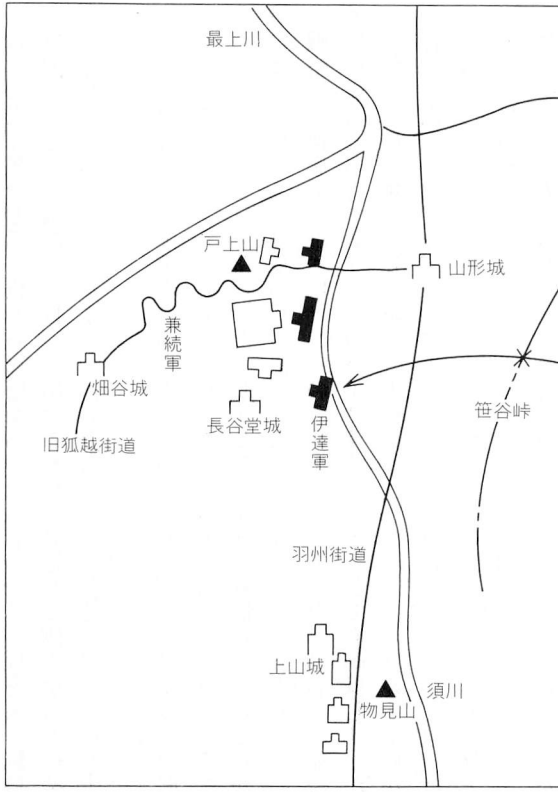
る。地鳴りのような轟音とともに、彼らめがけて雨のように銃弾があびせかけられた。このため最上軍はばたばたと倒れ、須川の水を朱に染めた。戦列を乱し、兵はあらそって敗走した。これは兼続が菅沢山からその地形をみるに、あらかじめ夜襲あるを予期して、水原親憲をその地に配備していたのである。

その間、援軍の伊達軍は、ようやくその兵を須川西岸に進めた。それに力を得て義光も出陣に踏み切り、軍を再編成し、楯岡甲斐守、延沢能登守を大将とする主力を門伝に、また伊良子弾正ら支軍を門伝舘ケ崎に陣取らせた。

一方兼続も、長谷堂攻略に手こずった。城は標高八十五メートル、平地に亀のように突き出た城で、西側には広々とした田んぼがひらけていた。その背後には大森山、見駒山がひかえ、堀も深かった。攻め寄せるためにはこの田んぼを越えて進むしかなく、城兵から見れば絶好の銃撃の的にされるので、このまま手をこまねいていれば、持久戦になるばかりだった。

そこで兼続は一策を案じ、堀をくずせと人夫を動員し、弓、鉄砲隊の援護のもとに二の丸に迫ったが、城兵の銃撃が激しく、その目的を達することができなかった。

第二策として、兼続は城兵を城外におびき出させる策を取り、残月の夜、田んぼの青



▲兼続軍攻撃図

田苅りをはじめた。果たして城内から反応があった。せっかくの稲を馬の飼料にしようとするのは憎しとして、城内から打って出た。それを見越して側面から兼続勢が襲いかかり城内になだれかかろうとしたが、これも城から一斉射撃にあって行く手を阻まれた。

最上、伊達の連合軍が本陣東方に陣を張ったのを知ると、兼続は城攻めを断念し、鶴翼の陣をかまえて、ひたすら決戦の時を待った。長谷堂城は、その兵力三百である。それを力攻めにすれば、これを落とせた。しかし全軍死守を覚悟しているとわかるので、その攻撃によって払われる自軍の兵の損傷の大きさを考えた。長谷堂城はその位置から見ても、戦略上、地形上、畑谷城とはその意味を異にしていた。畑谷城は兼続軍と米沢を結ぶ狐越街道の一要害であり、そのパイプラインはどうしても確保しておかなければならなかった。それに対し長谷堂城は、決戦を前にした時、その重要性は低かった。もう城兵が打って出たとしても、戦いの大勢を決する力は持っていないと兼続は計算していた。あとはどこまでも最上軍の仕掛けを待つか、兼続から仕掛けるかだけであった。その時である。景勝からの悲報が届けられたのは——。関ケ原の敗戦の悲報が——。西軍は一日にしてもろくも壊滅した。景勝は、兼続軍の総引き揚げを命じていた。九月三

十日のことである。この知らせは遅く、関ケ原の戦いから、もう十五日を経過していた。

この知らせは、兼続を落胆させた。その敗北があまりに早く、また西軍の勝利に期待する気持ちも強かったからである。兼続は、自分の描いた軍略が、空転し無残にも長い光芒をひいて地に落ちるのを感じた。ああ、何としたことだ。誤報ではないのか。これが現実か。このことは半ば予測されていたことであるにせよ、今はっきりした形で胸元につきつけられると、兼続のこたえ方もおのずと違っていた。

それから、兼続の真価が如何なく発揮された。何をおいても急がれるのは、この軍勢をいかにして無事に米沢の居城に帰すかということである。ここに思いいたると、兼続の目は、らんとして光った。もう敗報を知った時の兼続の姿はそこになかった。遠征軍の諸将に軍議の命令を伝えると、一人地形図に焦点を置いてじっとそれを凝視し続けていた。そしてしばし、兼続は心にふっ切れたものを感ずることができた。

諸将を前にして兼続が西軍の敗北を告げると、さすがに諸将たちも心の動揺をかくせなかった。上杉がどうなるのか。そして自分たちは——。悪い方に悪い方にと心は走った。どう考えても、悪い材料はあっても、良い材料は思い浮かばなかった。極論すれ

ば、自分たちが今戦っていることすら、何のために戦ってきたのか、わからなくなりかけてきた。諸将たちにも、関ケ原の敗戦という大きな代償を払って、その戦いの意味するものをはっきりと摑むことができたのである。それを見てとり、兼続は言葉を励まし、米沢の居城に帰ることを告げてこう言った。十月一日、撤退を敢行する。旗印を立て、総攻撃の態勢をとれ。兵を動員し、今日中にも時を惜しんで道路を整備せよ。水原親憲、溝口左馬助の両隊は、鉄砲隊三百をもって戸上山山麓西にかくれ、最上軍をできるだけ近づけて撃て。一発も無駄にするな。鬼越には鉄砲隊五百を伏勢とする。山城の命令を待て。しんがりは、この山城がつとめると。

この兼続の最上陣の撤退は、旧日本軍参謀本部の「日本戦史」で取りあげられているほど見事なものであった。また一史家は、どのようにしてこのように狭い土地から、二万に近い大軍を一挙に撤退できたのかと、率直にその疑問を提示している。無傷で撤退することが、いかに至難なわざであるかは、誰にもわかる。兵を引くということになると、その兵はもはや戦力と見ることのできないのが、普通である。われ先にと先をあらそって逃げる羊の群れにも似ている。そうさせぬことが、撤退を成功させる、第一の条件であった。そのためにも、兼続がしんがりに残ることを絶対条件とした。しんがりの

役割は、最後部を意味するように、いつにてもその場に止まり、敵の攻撃をくい止め、場合によっては玉砕を覚悟しなければならなかった。兼続が最後部にある限り、兵たちは安堵して米沢に向かうことができたのである。

義光の手許に関ケ原の勝報が届いたのは、兼続に遅れること、一日である。その報に接すると、義光は小踊りして喜んだ。事態はまさに、逆転したのである。それまで義光に重くのしかかっていた暗雲が、一気に晴れたような心地だった。義光は、勇んで兼続軍の追撃を命じていた。義光自身も馬を飛ばし、門伝の最前線に出た。しかしすぐには攻勢に出ず、兼続軍の撤退の気配を待って攻撃を仕掛けていった。

霧が深く、陽がまだ周りの山頂に顔を見せぬ朝であった。義光と兵六百が戸上山麓の西方に進んだ時、そこにひそんでいた水原・溝口隊から銃撃を受けた。その銃撃は間断なく続き、ために義光の出足がぴたりと止められてしまった。義光もかぶとを撃たれ、危うく生命を落とすところだった。そこでやむなく義光は策を転じ、新手一千をもって側面の柏倉から、水原・溝口隊の退路遮断に出ようとした。それを察知した直江軍は、ここで見切りをつけ畑谷に向かって引き揚げを開始した。

それを合図に、兼続が義光軍に打ちかかった。それに従うもの、上泉主水、前田利太

ら兵三百である。利太は朱柄の槍をふるって義光軍に割って入った。

朱柄の槍とことさらにことわったのは、上杉の家法として、武勇衆にすぐれている者でなければ、その槍の使用が認められていなかった。それを利太は許しも得ずに使用した。それでおさまらないのが、兼続の家中の者たちである。韮塚、水野、薬田、宇佐美の四名が兼続に訴えて、利太の非をなじった。われらは武勇の者である。多年殿に使用を願い出てそのお許しが得られなかった。それを利太は勝手に使用している。利太の使用を禁じていただきたいと。兼続は苦笑した。これは、稚気に見えて、そうではない。士風である。これが許されれば、公認の勇者となれる。それを武士たる者が欲しがることは、決して悪いことではなかった。兼続は苦笑のうちにもそれを考えて、彼らにも朱柄を許した。この戦場においても、その槍は誇らしげに四人の手にあった。

頃合を見て、兼続はさっと軍を返した。小気味のよい戦いだった。しかし兼続はこの時、上泉主水を失った。上泉主水は、新陰流の始祖、上泉伊勢守の舎弟と伝えられている。武田家に仕えていたが、武田滅亡後、京の相国寺にこもっていた。兼続がそれを知り、景勝に推薦して会津移封の時に三千石で彼を召し抱えた。義光の首実検が山形城三の丸稲荷口で行なわれた時、主水は歯をくいしばり、目が見開かれたままで、ものすご

い形相だったという。義光は行蔵院住持に頼んで丁重に回向のうえ熊野神社に埋葬させた。

兼続が引き揚げると、義光はすかさずそれに応じて追いすがった。進むにつれて、霧も次第に晴れあがってきた。鬼越に達した時、またも義光勢は兼続の伏兵にあい、鉄砲の一斉射撃を受けてばたばたと倒れた。地の利は、はじめから兼続勢にあった。入れ替わり立ち替わり間断のない兼続勢のねらい撃ちは、義光勢を苦戦と混乱に陥れた。義光勢もよく応戦したが、それにも限度はあった。劣勢をはねかえせぬまま、義光は歯ぎしりして後退せざるを得なかった。この戦いを最後に、兼続も兵をまとめて畑谷城に入った。それを追いかけるように、秋の日の早い夜のとばりが、両軍を黒く蔽いはじめていた。

追撃戦というものは、敵の浮き足立った心理をついてこそ効果がある。そのためには間を置かず敵を攻め立て、圧迫感を与えていなければいけない。撤退軍にゆとりを持たれてはそれまでである。こうしてみると、午前の戦いの二、三時間が、両軍の明暗を分けたと言えそうである。それに義光の兵も疲れた。兼続が畑谷城に入った時、直江軍の大半は、すでに無事長井に引き揚げを完了していた。こうして、義光は長蛇を逸した。追撃を断念せざるを得なかったのである。

その夜兼続は、畑谷城で一夜を明かした。義光の出方をうかがっていたが、義光にもはや追撃の意思なしと見定めると、畑谷城を焼き、静かにそこを去った。「最上記」に言う。直江は古今無双の兵（つわもの）なりと。

関ケ原

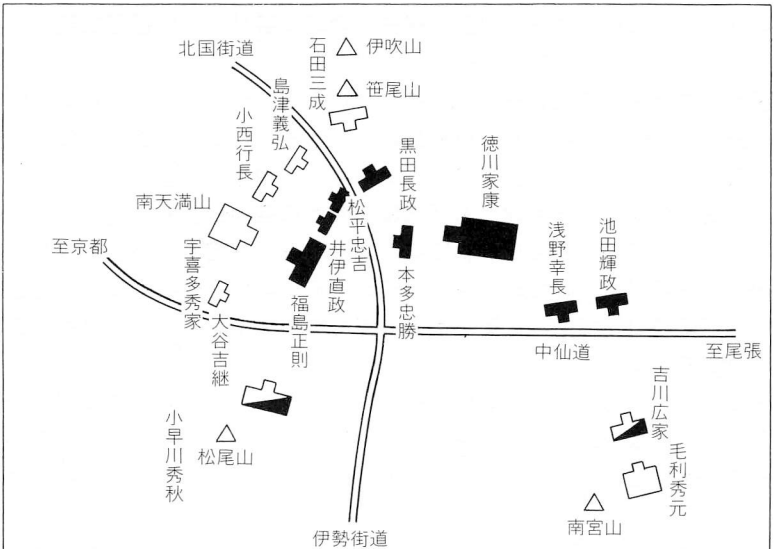
関ケ原の戦いは、家康の外交戦略の勝利に終わった。このことを簡単に言えば、裏切り者が家康を勝たせてくれたということである。裏切り者の代名詞に小早川秀秋の名をあげるのが常だが、秀秋はまことに損な役割を押しつけられたものである。西軍の中にあって裏切り者は他にもいた。吉川広家、毛利秀元、長宗我部盛親、安国寺恵瓊、脇坂安治、朽木元綱、小川祐忠、赤座吉家らである。島津義弘は彼らとやや性格を異にするが、戦いに参加しても戦わなかった。義弘が戦ったのは、戦場からの脱出のためであり、勝敗の帰趨が決したあとであった。それらの諸将が死力を尽くして戦ったら、西軍はあながち敗北したとは限るまい。このことは、いわゆる結果論としての結果論に留まるものではなさそうである。

明治十八年（一八八五）、日本陸軍は、ドイツ参謀本部のクレメンス・メッケル少佐を陸軍大学校の教官に招聘した。近代戦術の作戦を学ぶためである。少佐は当時世界的な戦術家だったモルトケの愛弟子の一人である。彼は学生たちを連れて関ケ原の古戦

場に学習にやって来た時、東軍、西軍の配置図を見て、即座に断定した。これは石田方の勝ちだと。しかしそれでは史実と逆だ。それを知っている学生たちは反論した。家康方の勝ちで、歴史がその証明ですと。しかし少佐は、何度も自分の判断を強調した。そんなはずはない。石田方は負けるはずがない。

東軍の陣形は、中央突破形である。それに対し、西軍のそれは鶴翼の陣形である。西軍が大坂から近いだけに、有利な先制布陣ができた。東軍が関ケ原の山峡に集結しているのに対し、西軍はほぼ高地にあって、それを包囲していた。伊吹山南の笹尾山に石田三成、それから西、南へと順に、天満山の島津義弘、小西行長、宇喜多秀家、戸田重政、木下頼継、大谷吉継らである。陣形の南端松尾山には、小早川秀秋、朽木元綱、脇坂安治らがひかえ、遠く離れた東方南宮山には吉川広家、毛利秀元、長宗我部盛親、安国寺恵瓊らが東軍の後詰と対峙した。その総勢約八万。

これに対し東軍の総勢は七万五千。最左翼に福島正則、藤堂高虎、京極高知、田中吉政ら、右翼には黒田長政、竹中重門、細川忠興、加藤嘉明、筒井定次ら、中央中仙道一帯を固めるのは家康ゆかりの者——井伊直政、松平忠吉、本多忠勝らの顔ぶれである。その後詰には、有馬則頼、山内一豊、浅野幸長らがいた。


北国街道
石田三成
伊吹山
笹尾山
島津義弘
小西行長
南天満山
至京都
宇喜多秀家
大谷吉継
小早川秀秋
松尾山
松平忠吉
井伊直政
福島正則
黒田長政
本多忠勝
徳川家康
浅野幸長
池田輝政
中仙道
至尾張
吉川広家
毛利秀元
南宮山
伊勢街道
西軍
東軍

▲関ケ原の陣営

慶長五年（一六〇〇）九月十五日朝、東軍の福島正則によって戦端は開かれた。それを迎えうつのが、宇喜多秀家勢である。その数一万八千と称した。

この朝関ケ原は昨夜来の雨がようやくあがったが、ここも朝霧につつまれていた。正則勢は、秀家勢に一斉射撃を加え、この射撃が期せずして東軍の攻撃開始の合図となった。この正則勢の銃撃に対し、秀家勢もそれをもって応戦し、戦いはすさまじい白兵戦を展開した。地形を見るに正則勢は天満山麓を登り斜面を攻撃する形になったので、秀家勢に有利だった。秀家勢の前衛の将明石全登は、よく正則勢の攻撃を支え、二度、三度共それを押し返した。これに比べて、小西勢はあまりにもろかった。寺沢広高勢の攻撃を受けて、当初激しく抵抗したが、前衛が敗れると、それがそのまま支え切れず本隊はずるずると後退した。

三成勢をたたいてくれようとかねてから目をつけていたのが、黒田長政である。長政は、直臣の中でも勇猛をもってなる十五人を選び、それに手勢をつけて別動隊を組織し、三成のいる笹尾山の側面に向けてこっそりと進発させて言った。三成の首をねらえと。

その頃三成勢の島左近は、自分の手兵を二手に分けて、一隊を柵の前に置き、自ら残

る一隊を率いて黒田勢に対し攻撃を加えていった。しかし左近には鉄砲隊がなく、後方本隊に備えさせていた三成の総勢は六千である。それを見た長政の将菅六之助は急ぎ鉄砲隊を引きつれ小高い丘に陣所をかまえて左近の近づくのを待った。あえて繰り返すが、鉄砲は戦術を変えた。銃撃戦に始まり、白兵戦に終わるのである。それをしなかった左近は、その最期におよんで不覚であった。

六之助隊は、じりじりと散開して長政勢の正面に進んでくる左近勢に対して側面から銃撃の機会を待った。引きつけるだけ引きつけて撃つのである。頃はよし、すさまじい銃声とともに硝煙がのぼった。左近勢はこの一斉射撃にあってばたばたと倒れた。六之助隊の猛射はなおも続いた。その中の一弾が馬上の左近の胸を貫いた。その痛手にたまらず、左近はどっと落馬した。それを見た長政の前衛は、この機とばかりに肉迫してきた。指揮官を失った左近隊は、戦意を失い、敗走するしかなかった。軍略家としても豪勇の者としても名をとどろかせていた左近も、自分の力を出し切ることなく、こうして無念の最期をとげた。

本隊に遅れてはならじと黒田の別動隊が、三成の本陣めがけて斬り込みをかけた。それに続くものは、細川忠興、加藤嘉明、田中吉政の諸軍勢である。しかし左近を失った

とは言え、三成の鉄砲隊は無傷だった。前面には柵をめぐらし、長篠の戦いそのものを思わせるものがあった。その一斉射撃は、敵兵を後退させ、その威力は十分に発揮された。

こうして一刻（二時間）は流れた。この激戦の中で、三成勢の南隣にあって一兵も動かさぬ軍勢がいた。島津義弘である。その総勢はそう多くなかった。千五百である。しかし義弘が西軍に荷担せざるを得なかった事情は別としても、いささか三成に対して含むところがあったからである。もともと義弘は、三成の軍略を軽視していた。三成づれに戦いの何がわかるかという気持ちである。これは先に述べた。その感情に加えて関ケ原戦の前日、義弘が先鋒をつとめるから、後詰を三成か秀家になってもらって、赤坂虚空蔵山にいる家康に今晩夜襲をかけてはどうかと、甥の豊久を通して三成に進言させた。ねらいは家康ただ一人である。家康さえ討ちとってしまえば、それまでであると。それに対し島左近が今までの左近と違ってそれに反対した。夜襲というものは、寡兵が多兵を相手にする場合の策だ。ところがわが軍は多く、敵は少ない。奇策によらず、正々堂々の大野戦によって雌雄を決すべきであると。三成もこれを是として、夜襲に頭を振らなかった。せっかくの進言が取り入れられず、義弘の憤懣は倍加した。もう絶対

に三成のためには動かぬと。それを関ケ原の戦いにおいて実行したまでである。こうと思いつめると、義弘はもうてこでも動かなかった。

これを見かねて三成は、八十島助左衛門を使者に立て義弘の出陣をうながした。乱戦に気の立っていた助左衛門は、自分の姓名をなのり、馬上から義弘に対してうかと声をかけた。島津公に申しあげる。お味方苦戦にござる。ご出馬あられますようにと。それがまた義弘の頭にかちんと来た。馬上からもの申すとは何ごとか。わが島津を何と心得ているか。

たまりかねて、三成は島津の陣営を訪れた。しかしことは同じだった。義弘は無言である。代わって答えた豊久の言い分が振るっている。本日の戦さは各人の戦いぶりによって力を尽くすという申し合わせである。島津はそれに従って動くのみ。三成はあきれたというよりは腹が立った。しかしそれを押さえて再度出馬の要請をした。臨機応変ということもある。いざご出馬を――。それに対しても豊久はせせら笑うように答えた。島津家の兵法と治部どのの兵法とは、違うようでござるわと。

なんと見事な言い訳であろう。組織体の中では、このような例は、随所に見られる。他に関わって、自分の職務をおろそかにされては困る。見て見ぬふりをする場合も生ず

る。しかし緊急事態にこれでは通用しない。火事を発見した場合、これを消すか消防署に通報するのは、誰だってそうすべきなのである。バリケードをはりめぐらし、自己のコラムにたてこもる者のなんと多くなったことか。

この時西軍で実際に戦っているのは、石田、小西、宇喜多、大谷勢などで、他は戦っていない。東軍でも家康は後方に控え、まだ参戦していなかった。戦況は一進一退である。三成は機を見てかねての打ち合わせに従い、小早川秀秋と毛利秀元、吉川広家らに攻撃に移るよう狼煙を打ち上げた。だが、その反応は見えなかった。なぜに——。三成の面上にあせりと焦躁とが濃くなった。一方家康は、桃配山の本陣を進めて、現関ケ原駅に出、諸勢の督励にあたっていたが、その時は家康をもってしても、勝敗の帰趨を見定めがたかった。そして正午過ぎ——。

さすがの家康も爪を噛み始めた。吉川広家からは誓書を得ている。毛利一族は決して家康に対し、戦うようなことはしないと。その代わり広家の求めたものは、毛利一族の領土安堵であった。しかし小早川秀秋の場合はそれと違っていた。家康の心づもりとしては、中立だけでは駄目である。秀秋には東軍に寝返って、西軍を攻撃してもらわなければならなかった。秀秋さえ参戦してくれれば、それでこの戦いはけりがつく。ところ

がその肝心の秀秋が、居座ったままで動く気配が見えないのである。早く、早くと、家康のいらだちはそこにあった。

たまりかねた家康は、ついに久保島孫兵衛、福島正則の鉄砲隊に命じて、秀秋のいる松尾山を銃撃させた。それと同時に、家康の臣奥平貞治と黒田長政の臣大久保猪之助が山上にかけのぼり出陣を迫った。それを受けて叫んだのが、秀秋の老臣平岡頼勝である。殿、何を猶予なさる。いざ、ご決断を――。それを聞くと、秀秋はつかれたように、大谷吉継の陣営を指し、出陣を下知した。それを合図に、その数一万数千は、怒濤のように吉継めがけて松尾山を下って行った。

それを知った吉継は、為すすべがなかった。吉継の兵力は、秀秋の十分の一である。果敢に応戦したが、長く秀秋の軍勢に対抗することはできなかった。全軍が潰滅状態に落ち、今はこれまでと覚悟を決めた吉継は、太閤殿下のお迎えが来たと言って腹を切り、湯浅五助に命じて首を刎ねさせた。この忠実な五助は主君の首を抱きかかえ、人知れぬ場所を選んで地中に埋め自分も切腹して果てた。

この秀秋軍の攻撃の前には、小西行長軍もひとたまりもなかった。これを見てとった家康は、自信にあふれて軍扇を振った。その数三万の大軍は、ときの声をあげて大地を

けった。勝負はここに見えた。

秀秋の裏切りによって、吉継、行長軍に続いて宇喜多秀家軍も敗れ、秀家自身も戦列を離れていった。残るは三成と島津義弘のみである。三成軍はよく善戦したが、衆寡敵しなかった。やがて乱戦にまぎれて、三成も伊吹山中に落ちのびていった。

その場に来て、義弘軍は行動を起こした。敵中を突破して伊勢へ出ようというのである。この脱出計画は、島津豊久の進言による。そのためには家康の本陣を、突くと見せて、牧田川へなだれこむ策である。義弘はこれを上策としてただちに兵をまとめ、島津の旗印を捨てさせた。あとは一斉に突撃を敢行するだけである。

この島津勢の攻撃を受けて、家康の本陣は一時動揺におそわれた。よもやと思っていた、虚を突かれたからである。それを左手に見て義弘の騎馬隊は駈けに駈けた。東南へ、東南へ——。この動揺がおさまると、すぐ島津勢の後を家康麾下の騎馬隊が追いかけて来た。それを見てとると、豊久とその一隊はその場に踏み止まり、これを迎えうった。もとより豊久はその時、生還を期待してはいなかった。自身が敵を食い止めることによって、敵の追撃をいくらかでもかわそうとしたのである。そして豊久は華々しく斬り死にした。井伊直政と松平忠吉はそれからもしつこく義弘を追いかけた。牧田川沿い

の谷川道まで追いつめた時、家康から追撃中止の命令が届いた。こうしてからくも死線を脱した島津勢は、義弘ほか数十名に過ぎなかったという。時に午後二時半であった。

九月十九日、家康は小早川秀秋、脇坂安治、朽木元綱らに命じて、三成の居城佐和山城を攻めさせた。佐和山城には三成が入ることができず、父の正継、兄の正澄、三成の子重家らが守備していた。その攻撃軍に寝返り者を差し向けることは、常套手段である。一方家康は、篝尾口の三成方守将津田清幽を通じて降服を勧めた。兄の正澄はこれを了とし、自分が腹を切って城を明け渡すから、城兵の生命を助けてほしいと願い出た。家康もこれを承諾したが、そこで思わぬ手違いが生じた。田中吉政隊の兵が天守閣の下の門を破って城内に侵入すると、三成方にそれに呼応する者がいて、本丸に火をはなった。ために正澄一族は天守閣に集まり、妻子を刺し殺して自刃し終わった。佐和山城はこの時灰燼に帰し、家康の取りこわしもあって、今にその痕跡をとどめていない。

西軍の敗北によりあわてたのが、大坂城西の丸にあった毛利輝元である。直接戦わなかったとはいえ、輝元は西軍の総大将であった。輝元は今にも家康が大軍を率いて、自分に攻撃を仕掛けてくるのではとおびえた。事実、この考えは家康にあった。敵将をそのままにしておくという法はないのである。ここでも本多正信は、戦力によるよりも謀

略によるべきことを家康に具申した。吉川広家からも申し出のあることである。これを利用すべきである。輝元を偽って、まず大坂城から帰国させることだ。毛利の名称と所領の安泰を保証してやれば、輝元も動こう。そうなれば、もうしめたものである。輝元を料理する手はいくらでもあると。家康はそう聞かされて、大きくうなずいた。家康の考えていることと一致していたからである。家康はこう考えていた。輝元が大坂城に居る限り、大坂城を攻めることは、すなわち秀頼を攻めることになる。しかも大坂城は、難攻不落を誇っていた。当然戦いは長びくに違いなかった。秀頼を攻めるとなれば、豊臣恩顧の諸将が黙っていまい。家康はそこを読んだ。そうした時に確実に勝てるか。それは家康にも確実に勝てるという判断がつきかねた。確信がつかめなければ、それを実行しないのが、家康の主義である。ここは一歩さがって、輝元を大坂城から追い出すのを第一とした。そのためには、もとより手段を選ばなかった。権力さえあれば、あとはどうにでもなるという気持ちだった。広家に甘口をかけ、その点おさおさ怠りがなかった。

こうして正信と意見の一致を見ると、家康は福島正則と黒田長政を正使として、輝元へ和議を求めた。輝元はうかつにも、渡りに舟と家康の策に乗った。その陰には、広家

があずかって力となった。輝元も好人物なら広家も好人物と言えた。輝元は西の丸明け渡しを声明し安芸の吉田に帰国した。そのあとに家康が入ったのは、言うまでもない。家康は抜け目なく自身を表明し、宣伝にこれつとめた。この度の戦さは、三成のよこしまに発するもので、秀頼さまには何の関わりもないことであると。その効果は、てきめんに表われた。東軍の諸将は、誰一人として家康をほめそやさぬ者はなかった。家康はそれを耳にして会心の微笑を浮かべた。してやったりと――。このことは輝元も広家も、家康の真意を見抜けなかったことに尽きる。そのあと毛利家は、好意に対するに逆意をもって家康に報いられる。その恥をそそぐためには、毛利家は明治維新にまで、約三百年を費やさなければならなかった。

関ケ原から脱出のあと、三成は生命を惜しんで大坂城に向かった。秀頼と輝元とを楯にして、家康にもう一戦するためである。将は生命を惜しむ。一度や二度の敗戦が何だ。最後に勝利を得れば、それでよかろう。項羽と劉邦（前漢の高祖）の例があるではないか。そのためにはとりあえず佐和山城へ行こう。三成は伊吹山を越え、関ケ原と反対側の麓にかくれていた。この二、三日ろくな食事をしていないので体力も衰え腹具合も悪くしていた。北近江の高時村古橋にある岩窟に身をひそめ、身体にはぼろをまと

い、腰には米袋をつけ、鎌をさして、樵夫をよそおっていた。そこを田中吉政の配下の者に発見された。三成の顔を見知っている者がいたので、逃れるすべはなかった。

吉政は三成を生け捕りにすると、これを丁重に扱って言った。この度の戦さは治部どのの智謀によるもので、あれだけの大軍をよく指揮なされた。感服のほかはない。ただ勝負は天命のいたすところ。人力のおよぶところではないと。三成の顔に苦笑が走った。いやと軽く否定して、この度のことは、故太閤殿下の高恩に報いるため、秀頼さまの将来の禍いを取り除こうとしたまでのこと。武運つたなくこのざまだと言って、秀吉からもらった切刃政宗の脇差を形見として吉政に贈った。

三成を捕えたという報告を受けると、家康は喜びをかくさなかった。満面に微笑を浮かべ上機嫌だった。吉政の労をねぎらい、大津の陣屋に三成を連れて来るようにと命じた。折り返し吉政から三成を引き渡されると、家康はちょっと思案していたが、保護せよと本多正純を選んで三成を預けた。正純は正信の子である。正純は最近とみに切れ者としてその頭角をあらわし始めていた。彼は冷笑して三成をなぶろうとした。秀頼さまがご幼少なのをよいことにして、無益の戦さを起こし、何たる愚か者めと。三成ははったと正純をにらみ返して言った。この戦さは、秀頼さまがご幼少だからこそ、内府をそ

の君側から除こうとしたまでのこと。見方の相違に過ぎない。裏切り者が出たので、こととはならなかった。この口惜しさは否定しない。天運が逆に動いていたら、内府をこうしておったものを――。かの九郎判官（源義経）でさえも、天運に見離され衣川で討ち死になされたではないか。正純はそれを聞くと、ふとそれを鼻先で笑って言った。曳かれ者のたわごとよ。武将たる者は、縄目の恥を受けぬと聞く。治部、死ぬのがこわかったのか。三成も負けてはいなかった。それは武略を知らぬ、葉武者の心掛けよ。将たる者の道ではない。うぬには、頼朝公が土肥の杉山で朽木の中に身をひそめられた心境などわかるまい。教えてやったとて、うぬにはとうてい理解できぬ。あとは言わぬと口をつぐんだ。

家康も三成に会った。家康は治部どのとにこやかに三成に話しかけた。勝負は時の運じゃよ。昔からためしのあることで仕方がないことだ。恥となされる必要はないと。三成もそれにうなずき、この上は一日も早く首を刎ねられよと答えて悪びれなかった。あとで家康は三成を評し、平宗盛とは大違いだ。将たる者は、そうでなければならぬと言った。そこから家康の三成に対する最後の仕上げが始まった。反逆者はこうなるという見せしめである。家康の本陣の門外に畳を敷き、縄目の三成を座らせ人目にさらした。

福島正則は、そんな三成を見るや、こう罵倒した。正純とほぼ同じ内容である。いわれなき戦さをして何というざまだと。三成はそれに対し、一歩も譲らなかった。その方を生け捕りにできなかったことこそ、残念。内府はうぬを信用しておらぬ。それがわからぬか。正則はふふんとせせら笑い、通って行った。

次が黒田長政である。長政は三成を見ると馬から降り、武運つたなく、そのような姿になられたか、と言って、自分の着ていた着物をぬいで三成に着せかけた。三成は無言で、されるままにまかせていた。

それから諸将が三成の前を通った。その中に細川忠興（ただおき）がいた。忠興は三成をちらとみると馬首をそのまま視線を正面に返し、歩を進めていった。

小早川秀秋との対面こそ、まさに見物（みもの）であった。よせばよいのに、秀秋は三成の側に寄ると、いらぬ言葉をはいた。治部、身の程を知ったか。三成はこの時を、どれ程待っていたことであろう。三成の毒舌は火をはいた。この裏切り者め。うぬの悪名は古今に残ろう。うぬの所業、太閤殿下にちくいち報告いたすと。秀秋はその勢いにおされ、返す言葉もなく引き下がった。それはもちろん他人も知っている。それ以上に秀秋自身が裏切ったという意識を持っていたためである。

秀秋は関ヶ原の論功行賞で、宇喜多秀家の旧領五十一万石を所領し、岡山城主に栄進した。しかしその治政は短く、二年後の慶長七年（一六〇二）十月、二十一歳の若さで死んだ。三成や大谷吉継の怨霊に悩まされ狂死したと伝えられるが、真偽の程はわからない。相続者なきため、岡山藩は改易（お家断絶）となった。

そのあと、家康は三成と同様生け捕られた小西行長、安国寺恵瓊らに小袖を与えた。小袖を与えるについての言い分はこうである。彼らをそのままの姿で京を引きまわせば、将たる者に恥を与えることになり、ひいてはそうさせた自分の恥になるから。三成はその小袖が「上様」から下されたと聞かされると、上様とは誰のことか、と反論した。その家来は、家康さまのことだと答えた。すると、三成はこう訂正を加えた。上様とは秀頼様ただお一人だ。用い方を誤られぬなとあざ笑った。この三成も、慶長五年十月一日、京六条河原で首をはねられ一生を終えた。四十一年の生涯であった。

不惜身命

今、毛利輝元と上杉景勝とは、その生涯のうち、最大の危機を迎えていた。勢いに乗る家康に、生殺与奪の権を握られてしまったからである。家康に従うも、家康に逆らうも、死と隣り合わせにあった。

九月末、吉川広家は輝元あて、井伊直政、本多忠勝、榊原康政連署の書状を受け取った。届けてくれたのは、福島正則、黒田長政である。その書状を読んで、広家は頭をかしげた。広家が予期していたことと、何か違うのである。それはまぎれもなく、家康の命令書である。しかもその内容が気に入らなかった。その内容とは——。秀忠が薩摩征伐のため広島を通るから、故太閤の時と同じように沿道を整えよ。輝元自身も薩摩征伐の先鋒をつとめよ。先にも述べたように、臣従を誓ったものが、次の戦さで先鋒に立たされるのは決してめずらしいことではなかった。ここまでは、まだしもよかった。ひっかかるのは、その後である。輝元の嗣子秀就に対する家康の引見は、そのあとで許されるだろうという点である。それを見ると、広家は不吉な予感にかられた。これは薩摩

征伐にことよせて、実は毛利を威嚇（いかく）しているのではあるまいか。広家には悪くとれば、そう考えられてならなかった。事実はその通りで、広家の読みは正しかった。しかしその時にはまだ、広家にも家康の真意がつかめていなかった。自分があれほどまでに家康に誠意をつくしているのだから、よもやそれが裏切られるとは考えられなかったし、家康の善意を信じる気持ちが強かった。

ところがこの広家の願いもむなしく消えて、広家は窮地に立たされた。十月二日、広家は今度は黒田長政から、またも書状を突きつけられた。これには広家も、われとわが目を疑った。家康の意向として伝えられたことは、あまりに一方的で、手前勝手であったからである。その書にはこうあった。

一、輝元が西の丸に入り、諸侯に回状を回した事実が、この程判明した。これは大罪である。毛利の所領は、没収する。

一、広家の律義さは、井伊直政もよくご存知で、中国のうち二国が広家に与えられる。

一、井伊直政から呼ばれたら、広家は三、四人のお供を従えて伺候されるがよかろ

う。槍などは、無用である。長政としては、いかなる場合でも、広家の身の安全を守る所存であるから、お心を安んぜられよ。

輝元が西の丸に入り回状をくばったのは、家康とて先刻承知のはずではなかったか。それを今になってぶり返してくるのは、どのような魂胆があってのことか。それに今になってこれが大罪で、毛利の所領が没収だなどとは、どうしても広家には、納得がいかなかった。もし家康が本気でそう言うとすれば、家康はとんだ大嘘つきだ。これではあまりにもひどすぎる。これには広家ならずとも、家康を怨む気持ちが湧いた。家康のためにいろいろ腐心して来たことが、広家には莫迦らしくなってきた。その報酬がこれか。広家は煮え立つ思いで、うかと家康を信じていた自分の不明を後悔した。

その人の真価というものは、その限界状況においてあらわになるものである。ただ後悔しているだけの広家ではなかった。自分の追い込まれる立場をはっきりと意識すると、広家は自分を一転させた。もうここに至っては、何を言っても無駄である。思い切り自分の身を屈して家康に哀願するのだ。何と言われてもよい、何と思われようがかまわない。毛利家の安泰を得られればそれでよいのだ。広家は見栄もてらいも捨て、正則

と長政にひたすら願い出た。輝元に罪ありとせば、それはこの広家とても同罪である。どうして広家のみ知行を拝領できようか。もし今後輝元が内府に対し害意を抱くようなことがあれば、たとえ本家と言えども、この広家の手で輝元の首をとり内府に献上いたしましょうと。

家康も、手心の加え時を心得ていた。広家にこれだけ言わせておいて、広家に与えるとした長門、周防の二国を毛利に与え、輝元、秀就親子の生命を保証する旨のお墨付きを広家に渡してよこした。その結果、毛利百二十万石は、三十六万九千石の外様大名に転落した。

この処置を最も喜ばなかったのが、毛利秀元である。秀元は関ケ原の戦いでは、南宮山東、広家の後方にあって戦うことなく終わった。秀元には、あの時戦っていたらという意識がある。こうした家康の措置を受けるにつけ、秀元には家康も憎ければ、広家も憎かった。広家にそそのかされたという気持ちもあるから、どうしても広家に対する風当たりが強かった。毛利支藩筆頭の秀元は、当主に代わった秀就が年少のためその執政となり藩の実権を握ると、広家を退け、彼の意見に二度と耳を貸そうとはしなかった。広家はこのことをあまんじて受け、無用の弁解をせずその晩年を終わった。

その頃――東北ではなお、関ケ原の余波戦が続けられていた。十月十五日、伊達政宗は上杉の会津、米沢間のルートを遮断するため信夫、伊達両郡（福島県）に出陣し、国見山に陣をしき、片倉景綱、石川昭光らには伊達郡の梁川城、桑折城の攻略に向かわせていた。政宗は軍勢を二手に分け、福島城を挟撃する策に出た。福島城を守るのは、岩井信能である。その反撃は鋭く、政宗はその目的を達することができず、北目城にむなしく帰陣する他はなかった。

この戦いにおいて前田利太は、またまたその名を両軍に知らせる機会を得た。いわゆる「一番槍」を試みたのである。この銃撃戦の時代にそぐわない感じを受けるが、源平の合戦以来、一騎打ちに生命をかける武風は、未だ残っていたのである。まず作法に従って利太が名乗りをあげて、政宗軍に槍による一騎打ちの相手を求めた。それに応える者がいないということは、政宗軍の恥である。政宗も武勇の者を選んで相手を差し向けた。二人を除き、両軍の将兵は、しいんとなりをひそめ、観戦者と変わった。しかし考えてみれば、戦う二人にとっては容易ならぬことであった。負ければ死だ。不幸にして強い相手にあたれば、弱い者は負ける。この強弱は、必ずしも武術や体力だけのものではなかった。それは精神力の強弱に支配される度合いが大きかった。数回場数をふんだ

者でなければ、気持ちが落ちつかず、相手の動きを正視できなかったと言われている。その相手こそ、災難だった。政宗の指名を受けると、彼は誇らしさとことの重大さを意識した。腕には自信があったが、肝心の利太を目の前にすると、利太の姿がぼやけてかすんで見えた。これはまずいと思っているところを、利太の槍で頭をうたれた。彼は不覚にもその場に気を失って倒れた。こんな莫迦なことがあってたまるかと思いながら——。そこで両軍の間に緊張感が流れた。あとは利太が、その者の首級をあげる順序である。しかし利太はその代わりに、彼にいばりをかけ、それが済むと彼の槍を小脇にかかえて自陣に帰った。両軍から期せずして笑いが起こった。その笑いは利太の寛容さに対する、称賛の笑いであった。

十月二十日、兼続は会津の若松城に入り、軍議を開いた。上杉家の岐路に立って、どう対処すべきかを決するためである。

この軍議は、最初から上杉の面目にかけて徹底抗戦を叫ぶ者が多かった。上杉は未だ敗れてはいないのだ。大坂城には、毛利輝元がいる。水戸の佐竹義宣とはかり江戸の虚を突くべしというのである。軍議はこれに決した。

しかし兼続には、別に考えるところがあった。伏見屋敷留守役の千坂景親から上方の

状況を知らせてきた。毛利輝元の帰国である。どうしてそうなったのかは定かでないが、これは輝元が戦意を捨てたということである。大坂城に立てこもって徹底抗戦を続けるとなれば、家康が秀頼を攻めることになるから、東軍に味方した豊臣恩顧の諸将も、どう動き出すかわからなかった。逆に家康にその槍をつきつけることも、十分にあり得た。機を見るに敏なる兼続は、その先を読んだ。それが事実なら、もう戦っても意味がない。無益に上杉の将兵を殺すだけである。ただ輝元が大坂西の丸を出たことが事実かどうかについては、ただ一抹の疑問は残っていた。

ついで承兌からの書状が届けられると、兼続はそのことがまぎれもない事実であり、輝元に代わって家康が西の丸に入ったことを知った。その書状は好意にあふれていた。自分が内府に対し仲介の労をとるから、和議を考えられてはどうかと。これだけはっきりと承兌がすすめる背後には、家康か正信の意思が働いていることは、まぎれもなかった。兼続はそうにらんだ。

水戸の佐竹義宣にも、一戦を辞せずという動きはあった。佐竹もまた無傷であったのである。ここでも父義重が佐竹の前途を憂い、義宣を説得して、慶長六年（一六〇一）四月、自身が西上して家康に謝罪した。家康はその義重の気持ちをくみ、彼の生存中は

現状維持としたが、その没後、封をけずり義宣を秋田に移した。

ここに至り、兼続も景勝に進言した。家康と和平を求められてはと。だが和平と言っても、その実は降服である。今まで家康と同列であった景勝が、家康に臣従を誓わなければならなかった。しかも生命の保証はない。さればと言って、今の家康を敵にまわして一戦した時、景勝が勝てるという確証は、兼続には持てなかった。兼続の全智をもってしても、勝てるというめどは打ち出せなかったのである。

これに対し、景勝も即決断した。景勝の読みも兼続と同じである。どう検討を加えても、勝てるという計算が出てこなかった。それに景勝にも、ようやく敗北の意識が生まれて来ていた。そうなったのは、もとはと言えば、自分の判断による。そのことで景勝は誰も怨む気持ちはなかった。こうなったことで、むしろ景勝は兼続に負目さえ感じていたのである。敗軍の将なら敗軍の将らしく振る舞うのが、武士である。今さらじたばたしたところで仕方がない。かえって生き恥をさらすだけである。さて家康が、どのような裁量を下すか。

景勝の意を受けて、兼続は本庄繁長に命じて上洛させ、結城秀康、本多正信に和平のための裏面工作に乗り出した。承兌にも書を送り、兼続はその真意を告げた。今回の戦

いに関して、わが主景勝には一切の責任がない。この戦いを進めたのは、一人兼続の専断によるものである。その証拠には、内府が小山の陣営を去られる時、その進撃を兼続が謀ったが、景勝は反対してこれを許されなかった。もし処罰されるならば、この兼続に対してなされよ。それに対し、兼続はいささかも異存はないと。

景勝のそうした動きを、伊達政宗は半ば予測していた。この機会に自分のかつての旧領をできるだけ自分のものにしたいものと考え、政宗は仙道から梁川の砦へ猛然と攻撃を仕掛けて来た。この戦闘は攻防よく戦い、政宗も危うく生命を落としかねない状況に見舞われた。

政宗とそこまで戦ったのは、岡野左内である。左内は蒲生氏郷に仕え、しばしば軍功があった。氏郷没後、景勝が会津に転封の際、左内もまた兼続の推挙により景勝に召し抱えられた。左内も個性の強い男で、上杉家の家中の者に名を知られたのは、その吝嗇のためである。言うなれば、けちに徹したということだ。倹約を好んで、左内は極度に出費をおさえた。武士にあるまじき銭侍などと陰口されたが、左内は一向にそれを改めることがなかった。そんなことはどこ吹く風と、左内は聞き流したのである。ところが左内は、またまた人々を驚かせるような行動に出た。それは景勝が会津で決戦しよう

とした時、左内は、今まで、貯えた永楽銭一万貫を景勝へ献上し、戦費の一部にあててほしいと願い出た。このことがあってから、人々の左内に対する評価はたちまちにして一変した。

梁川の戦いでは、両軍入り乱れての乱戦となり、伊達軍の先鋒木幡四郎左衛門を倒すと、左内は思いもかけず、政宗自身の攻撃を受けた。しかしながら左内は、自分の戦っている相手が政宗とは知らずにいた。両者とも、死力を尽くして戦うこと、約十五分あまり。政宗が左内に斬りつけること二回、左内もまた政宗の冑を打ち、その鎧錏をそいだ。そうするうち、政宗が斬りつけるのを左内が払った時、政宗の太刀が折れて飛んだ。すかさず政宗は馬首を返して逃げた。左内はそれを追わず、去るにまかせていた。後でその相手が政宗であったことを知らされた左内はそれを残念がった。政宗と知っていたら、どこまでも追いすがったものを――。

景勝が米沢減封と決した時、新規召し抱えの者の去就は、その者の自由にまかせた。左内は上杉を離れた。それを聞いた政宗は、左内を高禄で召し抱えようとした。だが、左内は、直接上杉が戦った相手からの誘いだったので、景勝の気持ちを推しはかって、これに応じなかった。その後、蒲生秀行が会津へ六十万石で入部した時、その要請に応

じて一万石を受け、猪苗代城主となった。

なお時を経て、左内は再び政宗に見える機会を得た。その場がどこであるかは、さだかではない。左内の名乗りを聞くと、政宗は膝を乗り出して言った。梁川での戦いを覚えているか。おことを二度にわたり斬りつけたのは、この政宗であると。左内はこれに対し、にっこりして答えた。どうして忘れておりましょうか。左内にとって、一生涯の光栄にござる。あの時の戦袍（戦闘服）はわが家の家宝として代々子孫に伝えましょうと。政宗はそれを聞いて、上機嫌であった。しかし左内は、なおも言葉を続けた。政宗公には、つぎのこと、ご記憶あられるか。わが一刀も、公の胄から前鞍と錣（胄の左右、後ろを蔽っている部分）の一部をけずり取っているはず。よもや、お忘れではあるまいと。政宗の眉にちらと不興がわいたが、さすがに政宗だった。忘れはせぬと笑い、おことこそ丈夫と左内をほめそやした。

家康から景勝に、上方への出頭命令が出されたのは、慶長六年（一六〇一）六月のことである。

出発に先立って兼続は身辺を整理し、遺漏なきを期した。七月一日、会津をたった主従二人は、七月二十四日、伏見の上杉屋敷に入った。

お船の方とは、久々の対面である。七月二十六日に大坂城へ伺候するまで、兼続は彼女と今生のなごりを尽くした。何といっても、兼続は戦いの主謀者である。これだけはっきりとお船の方に話しておいた。大坂城へ出向けば、そのまま城に留め置かれ、処刑されることも予想された。もとより死は恐れぬ。しかし、むざとは死なぬぞ、と覚悟していた。どうせない生命なら、景勝の生命と引き換えに死のう。これなら心おきなく死ねると思った。いたずらに、兼続の死を嘆くのを止めよ。くれぐれも身体をいとい、長生きせよと。

大坂城では秀頼に謁した後、景勝と兼続は家康と会った。景勝は型通りに挨拶を述べ、こうして引見を許されたことを謝した。家康がその気になれば、すぐさま二人を捕まえることもできたからである。家康はそれをふんふんと聞いていたが、以前よりは底光りをました視線をじろりと兼続に向けて言った。

「山城守。おことには煮え湯を呑まされた。そのままで済むと思うてか」

「思いませぬ」

兼続はわるびれずに答えた。

「そのためにこそ、こうして伺候いたしました。その責めは山城にあり、今さら言い逃

れはいたしませぬ。いざ、存分にご処分を――」

この期におよんで、ありきたりの言葉は通じなかった。兼続もそのことを知っておれば、家康もそれを知っていた。兼続が自分の腹の中を家康にぶちまけ、家康がどう応ずるかだけである。

「山城め。よう言いよるわ」

家康は心地よげに叫んだ。本多正信は、それを無表情で受けた。

そのあと、別間で景勝、兼続に対し、尋問が行なわれた。吟味役は正信である。

正信は、景勝、兼続の上座に座り、役目柄、言葉を改めるとことわってから、こう切り出した。

「山城守に聞く。その方、石田治部とはかり、ことを起こさんとしたること、相違ないか」

「相違ございません」

「内府公が小山の陣から江戸に帰らんとした折、これを追撃せんとしたのは、山城守その方か」

「それがしにござる」

正信は、家康を上様と呼ばず、内府公と言った。上様とは、大坂城におられる秀頼様以外にないと言った石田三成の言葉が、正信の念頭にあった。その言葉が兼続に与える影響を考慮してのことである。

「ならば聞く。なぜにそれを断念したか」

「わが主(あるじ)景勝のご命令にござる。それがしは内府公と一戦つかまつりたかった。内府公は天下一の弓取りで野戦上手。公とお手合わせ願うことは、男子の本懐(ほんかい)。この世に生をうけた武士にして、それを願わぬ者がありましょうや」

兼続にしては、偽らざる本心であり、また計算しつくされた言葉だった。景勝の戦争責任を解除し、自分を表面に打ち出すことが、この場合における最善の策と兼続は考えていた。以心伝心とはこのことである。正信は最初から兼続に応答は求めても、景勝には一言もそれを為さず、それで押し通した。正信にしても、兼続からこれだけ聞けば、それでこと足りた。あとはどのようにでも処分はできる。正信は兼続の言葉に、うなずきながらこう思った。この男、腹を切る気でいるなと。そこで一本釘を刺した。

「山城守。追って沙汰をいたす。みだりに勝手な行動は許されぬ。以後、内府公の指図を待て」

景勝の所領会津百二十万石がけずられ、米沢三十万石のみが安堵と決定したのは、八月十七日のことである。景勝、兼続の身柄はおかまいなしとされた。兼続はその日すぐに、景勝に詫びた。主家の領地を減封されたことに心苦しさを感じたからである。その不忠、万死に価すると。しかし景勝は顔を横に振って答えた。山城、もうよい。景勝とても同罪じゃ。

十月三日、景勝、兼続は、秀頼に謁し帰国の挨拶を行なった。その時、秀頼に大刀一振りと白銀百枚、淀君には白銀五十枚が献じられた。

●「直江兼続」関係年表

年代	西暦	事項
永禄　三年	一五六〇年	越後の国、魚沼郡坂戸城下に生まれる。幼名は与六。
永禄十一年	一五六八年	上杉謙信の養子、上杉景勝の近習となる。
天正　六年	一五七八年	謙信が没す。上杉家の相続をめぐって御館の乱が起こる。
天正十四年	一五八六年	景勝と兼続が大坂城の関白豊臣秀吉に伺候する。
天正十八年	一五九〇年	景勝と兼続、秀吉の小田原征伐に出陣。
文禄　元年	一五九二年	文禄の役。諸大名が朝鮮に出兵する。
文禄　四年	一五九五年	景勝が五大老のうちに列する。
慶長　三年	一五九八年	景勝が越後九十万石から会津百二十万石へ転封される。兼続は米沢三十万石を領する。
〃　〃	〃　〃	秀吉が没する。
慶長　五年	一六〇〇年	兼続が「直江状」を発し、徳川家康を弾劾する。
〃　〃	〃　〃	関ヶ原の戦いで西軍が敗れる。
慶長　六年	一六〇一年	景勝が三十万石に減封され、米沢に移される。
慶長十九年	一六一四年	徳川秀忠の命により、兼続が大坂冬の陣に出陣。
元和　元年	一六一五年	景勝と兼続、大坂夏の陣に出陣。大坂城落城、豊臣氏滅ぶ。
元和　五年	一六一九年	兼続、江戸で死す。享年六十歳。

あとがき

慶長三年（一五九八）正月、上杉景勝は豊臣秀吉の命により、所領越後国（新潟県）から陸奥国（福島県）会津へ百二十万石で移封された。そのとき直江山城守兼続も秀吉の特命により、出羽国（山形県）米沢三十万石（一説には三十二万石）を賜った。このことは、陪臣にしては異例中の異例である。当三十万石を超える大名は、兼続を含めて十二人しかいない。たしかに秀吉は兼続に惚れていた。小田原城攻めのとき、秀吉は兼続をこう評した。兼続に二十万の大軍を預けて高見の見物をしたいものよのう、と。

慶長五年（一六〇〇）九月の関ヶ原戦の仕掛人は石田三成であり、景勝、兼続である。彼らには密約があった。徳川家康を日本の東西から挟撃しようと。戦後、家康に敵対した景勝と兼続はその責任を問われた。兼続はそのとき、責任の一切を自分が被り、景勝を擁護した。家康も兼続の気骨に惚れた。景勝に米沢三十万石の存続を許し、二人をおかまいなしとした。

いうなれば兼続は、主君を主君とし、臣を臣とした人である。兼続は死を覚悟して事に当った。その結果、景勝を救い、自身を救った。兼続のこの生き様には、日本人が古来、美徳の最高典型としてきた「自己滅却」に通ずるものがある。

兼続と正室お船の方の墓は、林泉寺（米沢市）境内の南方、愛宕羽山を望むところにある。この林泉寺はもと越後高田にあって、代々長尾家の菩提寺であったが、元和三年（一六一七）、

現在地に移されたものである。以後、上杉家の奥方、子女、上杉家支侯の廟所となった。兼続夫妻の墓は上杉家の奥方の墓所の上座にあり、兼続がいかに厚く上杉家から遇されていたかがうかがえる。

昭和十三年（一九三八）二月、当時の市長登坂又蔵は米沢市制五十年記念として、兼続を松岬神社に合祀されるよう請願した。同年四月十四日にこれが認可され、市は四月三十日の市制記念日に年々「直江祭」を行なうことに定めた。

一方、兼続の越後時代の居城のあった与板でも、平成元年（一九八九）十一月二十一日、兼続の銅像が建立された。建立地は与板歴史民族資料館の庭で、建立主催団体は与板城山保存会、製作者は茂木弘次氏である。

与板城は山城で、その城跡は城山と呼ばれ、三島丘陵のほぼ中央部に位置し、東前に信濃川を配し、本丸、二の丸、三の丸から千人溜まで、自然の城郭をなしている。現在、この城山は新潟県の文化財指定を受けている。

与板でも毎年七月、城山と徳昌寺で「直江祭」が行なわれている。徳昌寺は直江家の菩提寺で、直江家の祖、法名昌山一徳の開基である。「直江祭」には米沢からも多数の参列者があるという。

平成七年三月

中村　晃

《参考文献》

『直江山城守』（福本日南著　歴史図書社）
『近世日本国民史』（徳富猪一郎著　明治書院）
……ほか

☆本書は、かつて叢文社から刊行された『大軍師直江山城守』（昭和六十一年六月）を、再編集したものです。

著者紹介
中村　晃（なかむら・あきら）
作家。昭和３年、山形県寒河江市に生まれる。
東北大学文学部卒。
『雪女』『怪物登場』（以上、月刊やまがた社）、『修羅鷹最上義光』
『黒衣の宰相天海』（以上、叢文社）など、多数の著作がある。

ＰＨＰ文庫　直江兼続
——宿敵・家康も惚れた名軍師

1995年５月15日　第１版第１刷
1996年５月22日　第１版第11刷

著　者　中村　晃
発行者　江口克彦
発行所　ＰＨＰ研究所
東京本部　〒102 千代田区三番町３-10
第一出版部　☎03-3239-6221
普及一部　☎03-3239-6233
京都本部　〒601 京都市南区西九条北ノ内町11
☎075-681-4431
印刷所　図書印刷株式会社
製本所

© Akira Nakamura 1995 Printed in Japan
落丁・乱丁本は送料弊所負担にてお取り替えいたします。
ISBN4-569-56758-4

実力派のパートナー　PHP文庫好評既刊

戦国武将国盗り秘話

早乙女　貢

しのぎをけずる戦国の世、国盗りにかけた男たちをまちうける運命やいかに。石田三成、北条早雲、伊達政宗、大友宗麟ら、七人の男の野望とその人生を描く歴史小説集。

定価420円
（本体408円）

ばさらの群れ

童門冬二

ばさらとは、自分らしさを失わず、他人との激突も辞さず、その中からさらに新しい何かを生み出す人間である。本書はそのばさらの人物群像を南北朝時代を背景に描く。

定価540円
（本体524円）

明智光秀

徳永真一郎

漂泊の牢人の身から三十四万石の大名にまでとりたててくれた主・信長をなぜ討たねばならなかったのか！「本能寺の変」の真相にせまる問題の長編小説である。

定価600円
（本体583円）

定価は将来、改定されることがあります。